緋弾のアリア XVIII

Aria the Scarlet Ammo

星条旗の覇道（トランザム）

赤松中学

MF文庫J

緋弾のアリア XVIII

Aria the Scarlet Ammo

星条旗の覇道（トランザム）

赤松中学

「――今。この瞬間が、歴史の転換点だ」
アリアの顔で――
アリアではない、緋緋神が語る。

ＭＦ文庫Ｊ

緋弾のアリアＸⅧ

星条旗の覇道（トランザム）

赤松中学

口絵・本文イラスト●こぶいち

Contents

1弾 緋色の女神（ヒロインジャック）
2弾 『かもしれない』・『かもしれない』（メイビー・メイビー）
3弾 East meets West 世界の中心へ
4弾 ニューヨーク（ジーサード・リーグ）の男
5弾 With ありがとうな、Enable 兄貴
6弾 星条旗の覇道（トランザム）
Go For The NEXT!!! Ford Model T 型フォード

1弾　緋色の女神（ヒロインジャック）

「――今。この瞬間が、歴史の転換点だ」

アリアの顔で――

アリアではない、緋緋神（ヒヒガミ）が語る。

「お前は、その目撃者さ。遠山（とおやま）」

鳥居（とりい）の上から、乃木（のぎ）神社にアニメ声が響く。

緋緋神の持ち技は、俺（おれ）が知る限りでも……一撃必殺のレーザーと、有視界内瞬間移動（イマジナリ・ジャンプ）。時空の彼方（かなた）に物質を放り込む緋天（ひてん）・緋陽門（ひようもん）も使えるハズだ。

さらに、その肉体はアリア。

つまり戦うにしても――傷つけずに倒さねばならない。

しかも仮に倒したとしても、どこかからアリアを遠隔操作してる緋緋神本体は無傷。

防御（ぼうぎょ）の概念（がいねん）を超越した防御力を持つ、超常の敵――

（乗っ取りはチャリジャック（ジャッカー）に始まり、タンカージャックで打ち止めかと思ってたが……まさか、アリア・ジャックとはな……！）

対する俺の手には、拳銃（けんじゅう）とナイフしかない。

木々や大地、大気や星々までもが緋緋神（ヒヒガミ）の闘気で微震するような感覚の中――

鈍（にぶ）く光る甲虫（こうちゅう）が、冬空を矢のように逃げていく。

かつて妖刀（ようとう）に襲われた夜は、逃げ惑うネズミを見て俺（おれ）も逃げたいと思ったものだが――

王者のヒステリア・レガルメンテを備えた俺は、辛うじてその場に踏みとどまれている。

「香港（ホンコン）以来、あたしはかなり寝てたからな。今夜は軽く、ノビをしよう」

凶暴そうな笑みを浮かべた緋緋神アリアの――緋色（ひいろ）のオーラを纏（まと）ったツインテールが、ばさっ。大きく羽ばたいた。その揚力（ようりょく）で、緋緋神は鳥居（とりい）の上で軽く浮揚（ふよう）する。

飛翔（ひしょう）能力――イ・ウー戦の直後、ＩＣＢＭからの墜落（ついらく）時にもアリアがそれを使えていた事を思い出した時、

（……？）

俺の中に1つの疑問が生じる。

事実として、アリアや猴（コウ）は自分の意志で色金（イロカネ）の力を一部使えていた。

そして、それが出来ていた少女がもう1人いる。理子（りこ）だ。

シャーロック曰（いわ）く、理子のロザリオは緋緋色金（ヒヒイロカネ）と同族異種の色金を含む色金合金（イロカネごうきん）。

理子はそれをずっと持っていたにもかかわらず、猴やアリアのように心を乗っ取られた様子を見せた事がない。

この理屈でいくと、概念（がいねん）上の超々能力者（ハイパーステルス）――『緋弾のアリア』に近いのは、理子の方だ。

効果が小さいから目立たないだけで、理子は色金を従えている。それは、なぜだ。
ヒステリアモードの頭でも、その答えは導き出せないが――
探偵科風に言うと、疑問が残る、という事は、まだどのようにでも転びうるという事だ。この件、完全に出口のない迷路ってワケではなさそうだぞ。密室のように見えて、僅かに外気が吹き込んでいる。どこかの、不完全な穴から。
この戦いで――その穴を見つけ出すんだ。
行け、キンジ。
「遠山。あたしはお前を戦に使いたい。だから殺しちゃダメなんだ。それは分かってる。分かっちゃいるけど、戦いたい。殺すまでの数分、もしかしたら数秒かもしれないけど、きっとお前は激しく戦ってくれるよな。お前が――『本物の戦い』という快感をくれると思うと、ガマンできなくなりそうなんだ」
そしてもう1つ。この相手、取り付く島もなくはないぞ。
発言から類推するに、緋緋神の行動原理は感情。恋と戦の快感を追い求め、退屈を厭う。能力は人間を超越しているが、その精神は人間的なのだ。加えて、その能力にも波がある。特に誰かに憑依した直後、『寝起き』の状態だと本調子は出せない。
――神の名を冠するにせよ、コイツは完璧な存在なんかじゃないんだ。
超強力な超能力者との戦いだと思え、キンジ。得意分野じゃないが、超能力者は今まで何人か強襲逮捕してきた。
――やるぞ。だから、今夜も。不可能を可能に変える、咎 として。
「だから遠山、ほんのちょっとだけ……つまみ食い、させてくれよ。限界まで我慢して、思いっきり手を抜くからさ」
「我慢しなくていい。理子が言ってた事だが、我慢は体に良くないからな。アリアの体に良くない事は一切するな」
どう戦えばいいのかは分からないが、戦いながら見つけ出すんだ。そこも今までと同じ。
不可視の銃弾の閃光弾で、まずは攻め手のきっかけを作ろうと――俺が、動いた瞬間。
「キンジ――」
俺を遠山と呼ぶハズの緋緋神が、俺をそう呼んだ。アリアの声で。アリアが呼ぶように。
「――愛してる」
……ッ……！
それは緋緋神がアリアを演じて言っただけ、それは分かっていたのに――
ヒステリアモードの俺が、動揺して、不可視の銃弾をミスった。
閃光弾は僅かに逸れ、緋緋神の背後で炸裂する。
その白い花火のような光を背に、
「――ハハッ！　ハハハハッ！　恋は、咲く花の如し――」

緋緋神アリアが、鳥居から空中に踏み出す。
その小さな体が自在に空を飛ぶ、いや、スキップするように、跳ぶ。
パキン！　パキパキンッ！　と、足下に七色の光が僅かに飛び散っているのが見える。パンプスが宙を踏むたび、見えないキューブのような踏み台がそこに生じているのだ。
髪の翼を揺らし、躍るような身のこなしで降りてくる緋緋神は――
心を奪われるほどに、美しかった。
女優よりも優美な表情、ダンサーよりも華麗なステップ。
それらの仕草が、愛らしいアリアの姿で演じられている。
香港で孫が睡蓮のような少女たちの手を渡ってきた時にも、俺はその動作の華やかさに飲まれてしまったものだ。しかしあの時よりも、緋緋神は意のままに動けている様子だ。
『美には神が宿る』と、昔兄さんが言っていたが……美少女に憑依する緋緋神は、さらに神にのみ宿る美しい身振りを見せつけてきている。
俺を抱き留めるように両手を広げ、閃光を背に宙から歩み降りてくる緋緋神を見て――
俺はその非現実的なムードに圧倒され、身動きが取れなくなっていく。
王者のヒステリアモードと嘯いたところで、王も所詮は人。神の前には一様に、ただの人間でしかありえないのだ。それを痛感させられる。ただ、その佇まいを目撃しただけで。
――パァンッ――！
陶酔した俺の目を覚まさせる、平手打ちのような銃声。
パキンッ！　と足下に銀色の光が弾けた緋緋神アリアが、小さくバランスを崩す。
「……!?」
今の発砲音は.45ロングコルト弾。
銃はコルトSAA――平和の作り手――
「ヨハネ福音書1章51節……天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる」
……カナ……！
「――法化銀弾は効くみたいね。さてと、緋緋神さん。ここは神様を祀る社よ。もう1人神様がいるのは、多すぎじゃないかしら？」
取る物もとりあえず駆けつけたのか、縦縞セーターにジーンズのズボンという私服姿のカナが――鳥居を降りてきた緋緋神とは逆に、石段を上がってきていたのだ。
その腰に斜め掛けされた象牙色の革ガンベルトには、ズラリと並んだ銀弾が弾頭を煌めかせている。
つんのめった緋緋神アリアが再び踏もうとした見えないキューブにも――パンッ！
本家・不可視の銃弾が放たれる。

「おっと」
やむなく緋緋神はそのまま飛び降りて、俺から少し離れた場所に着地した。
「兄さ……カナ、来てくれたのか」
俺の左2mに並び立ったカナ――ヒステリアモードの兄さんに、救われた俺だが……
兄さんの変身には、時間が要る。長髪を三つ編みにし、着替え、あれこれ整えてはいるようだが、アリアが緋緋神になってからでは早すぎる。
つまり元々兄さんはカナになってたんだ。どうしてだろう？
「――海で会って以来ぢゃの、緋緋神。よくよく、妾の愉しみをジャマする女よ」
さらにその場に現れたのは、パトラ。兄さんの婚約者だ。
世界三大美女・クレオパトラの子孫らしいだけあって、彼女もまた美女なのだが……
なんだか、やたら不機嫌そうな顔をしてる。
それでピンと来てしまったんだが、どうやら兄さんはパトラに頼まれてカナになってたらしいな。それでちょっと俺には理解できない大人のご遊戯をなさってた模様だが、何にせよお陰で助かったのは事実だ。
見ればパトラは、さっき木のウロから逃げていった甲虫――黄金虫を指輪に留まらせていた。
あの使い魔が、この事態をパトラに報せてくれたってワケか。
「――キンジ。私、全力でいくわ。あなたは逃げなさい」
歩前進し、無形の位――早撃ちガンマンのように立ったカナが、アリアやパトラとはまた別の美人顔でそんな事を言ってくる。
「断る。これは俺の問題なんだ。絶対に退かない」
「キンジったら……反抗期？」
ちょっと困り顔をしたカナは、小鳩のように小首を傾げてる。緊張感ないなぁ。
「反抗なんかしてない。さっきは、その……少し飲まれてたように見えたかもしれないが、俺だって戦える。この1年で、あんたの半分ぐらいの力は付けたつもりだ」
それに――一度は、アリアを殺そうとしたカナだ。
今回も、アリアを殺して事態を納めようと考えるかもしれないからな。玉藻のように。
「……分かったわキンジ。でも、あの緋緋神はあなたには荷が重い。倒さなくていいわ。私が倒すから、あなたは私の重心から半径177・7cm以内にアリアの体を誘導しなさい。それと――心配しなくていいわよ。今、あなたが心配してること。私、武偵だから」
俺の疑念を見抜いたらしいカナは、不殺を約束してくれて――
「……分かった」
――俺は、それを信じる事にする。
まあ、見た目は姉さんでも兄さんは兄さんだからな。
兄を信じなくて、何が弟か。兄さんも俺を信じて戦列に加えてくれたワケだし、ここは俺も兄

さんを信じて戦いの手順を立てるぞ。
「でもキンジ、素手じゃダメよ。なぜ銃を出さないの。拳銃こそ人類が編み出した至高の近接戦器。そしてそれを最も有効に使いこなせるのが、私たち遠山の人間。でしょ？」
「昔ジーサードが逆の事を言ってたからね」
また緋緋神にアリアの演技で妙な言葉を吐かれ、動揺して誤射するのを恐れていた俺に……カナは抜銃を促してくる。だが俺がそれを断ると、
「じゃあ中間でいこっか。キンジも、前に私が預けたのをまだ持ってるでしょ」
と——カナは、ブラウンの長い髪を振るい——
——フォンッ——
と、カナがそれを一振るいして下段に構えた。ほぼ肉眼では追えなかった軌跡の下から、カナを中心としたミルククラウンのように砂塵が舞い上がる。
半径1・777mに広がったその『円』を展開して『球』にしたものが、カナの殺傷圏。
その間合いは俺のナイフより遥かに長大で、角度も自由。大鎌を長大なバトンのように使いこなすカナの攻撃圏は、ほぼ完全な球形をしているのだ。
平面的な殺傷圏で相手を切断しようとする刀剣とは違い、球の内側に入ったもの全てを『刃で引っ掛け切る』か『峰で弾き飛ばす』のが——攻防一体の武器、スコルピオ。
そいつで——刀剣戦を挑むってワケか。緋緋神に。少し意外な戦術だな。
だが今、兄さんは……さりげなく、俺にもバタフライ・ナイフを使えと促してきている。
経験則から察してるが、俺のナイフはただの刃物じゃない。アンベリール号や藍幫城で見せた超常的な反応から考えて、色金と無関係ではない可能性もある。
機能は不明だが、ここはカナの戦略に乗ろう。ナイフ戦だ。
（どうせ緋緋神が相手じゃ、銃でも剣でも拳でも大差ないだろうしな）
チャキッ、と、手元で俺がナイフを展開し——
イ・ウー甲板上以来の、遠山兄弟……遠山姉弟？　のタッグが並び立つ。
「遠山侍が2人か。なかなか壮観だな。だがどうする？　お前たちはこの体を殺せない」
こっちを見渡す緋緋神は、アリアの平たい胸に両手を当てて俺たちを嘲笑ってくる。
「そうねぇ。でも、手足の1、2本は飛ばしちゃおうかな。それに私たちは人間だから、『勢い余って』って事もあるかもね。私、持ち技がちょっと——過激だから」
ニコニコと笑顔で応えつつ、攻撃技が主体のカナは空恐ろしいセリフを返す。
「それに何よりね、緋緋神さん。私、キンジのために戦う時だけは……優しくないのよ」

ジリッ……と、スコルピオを下段に構えたカナが――
喋(しゃべ)りながら、間合いをセンチメートル単位で詰めていく。

その全身にヒステリアモードの力が行き渡っていくのも、分かる。
だが、その力は火のように燃える俺のものとは異なり、水のように満ちていくものだ。
自然体の全身はむしろリラックスした状態に置かれ、戦いの場にいるとは思えないほど柔らかなその表情の奥から……しかし、一瞬ごとに高まる鋭利な集中力が感じられてくる。
その顔は――周囲の全てを静止させてしまいそうなほどの、美形。
スタイルも、地球上の全女性が裸足で逃げ出すような完璧さ。
女ではないものが女の姿を以て醸し出す、他にはありえない美貌が――緋緋神に圧され気味だったさっきまでの空気を、一変させていく。
美には神が宿る。その発言を体現させた、神にも劣らぬ存在感だ。
（――さて、アリア――）
緋緋神に乗っ取られたとはいえ、お前と戦うのはイ・ウー以来だな。奇遇にも、周囲のメンツも似通ってる。死んだシャーロック、それと姿を消した白雪は欠席だが……
「緋緋神を誘導できるか、まずはやってみる。１７７・７cmだな、カナ」
「お願いね」
１７７・７cm――それはスコルピオの間合いの中という意味だ。つまり俺にナイフ戦を促す前から、カナはその大鎌で緋緋神を仕留める戦術を立てていた。
死神のようにアリアの首に鎌を掛けて、その体を人質に取るつもりだろうか。
「――おい、緋緋神。俺はちょっと考えを改めた。アリアにはいつもイジメられてな。反撃すると百倍返しされるもんだから大抵やられるままだったんだ。だから今、アリアがアリアでない内に、その体に思いきり仕返しさせてもらう。殺さない程度に……なッ！」
そんなブラフ以下のブラフを最後に、ダッ――！　と、俺は右ナナメ前に走る。
全く同時にカナが左ナナメ前に走り、後衛のパトラも合わせて3方向から緋緋神を囲むようなフォーメーションを形作っていく。
――切り込み役は、俺だ。
カナと俺とで緋緋神を挟み撃ちにする位置に着いた瞬間に方向転換し、さっきあれだけ使わないような会話をしてきた銃も抜き、敵に迫る。
対する、緋緋神アリアは――
「ああ、ときめく。これだよ、あたしが欲しかったのは」
心の底から幸せそうに、こっちへ投げキッスするような仕草をした。
緋緋神の足下を撃って兄さんの方へ後退させようと企んでいた、俺の射撃線上に――
うっすらと空間が歪んで見える、１辺が30cm程の立方体が広がっていく。
星明かりに浮かぶ立方体の下に影は無く、内部に相似形の立方体をした暗がりが見える。
感覚的に分かる。あの内部の暗部は、影。立体の影だ。常識では考えられない事だが、あの立方体は影が立体なのだ。

気味は悪い、が……不気味さだけじゃ、ネズミすら殺せない。なんだ、こんなモノ――と、得体の知れないキューブを撃ち、蹴っ飛ばして緋緋神に接近しようとした俺に、

「触れるなトオヤマキンジ！　それは次次元六面――あらゆる物を止め、自在に削ぎ取り、消滅させる罠ぞ！」

パトラが警告してきて、俺はすんでの所でそいつを跳び越える。

すれ違い様に見えたが、俺が撃った9㎜弾は……一回り小さい黒い弾――いや、これも立体の、弾の影と並んでそのキューブ内で静止していた。

パンッ、パパンッ。

緋緋神が手を叩くと、その体の周囲にその不可思議な立体が増えていく。

カナ側にも次々と出現した。4個、8個、16個とジャマな立方体は増えたが、緋緋神も無尽蔵に増やすマネはしない。

おそらく、あれはアリアの肉体が不用意に触れてもいけないものなのだ。

「ハハッ。よし、遠山。イ・ウーの時と同じ――近接拳銃戦といこう。アリアはこの銃がトレードマークだからな」

忌々しいキューブを潜り抜け、跳び越え、ようやく肉薄した俺に――

緋緋神アリアが、破けたスカートから二丁拳銃を抜く。

その瞬間、パッ、とキューブたちの配置が換わった。俺とアリアを囲むリングのように。

距離や移動といった概念を無視したその挙動には面食らったが、竦むほどの事じゃない。あれは空中に浮かぶ地雷のようなものだ。

「それ撃て！　どんどん撃て遠山！」

――バッ！　ババッ！　俺とアリアの腕があの日のように交錯し、ベレッタとガバメントが零距離射撃を応酬する。

「――うおおおおッ！」

俺は発砲を牽制に用い、ナイフでアリアの体をカナの側へ後退させようとする。

さらに刃を振るい、アリアのツノに被された髪留め、そのゴムを切断しようと試みる。

ツインテールの翼で飛ばれたら、カナの半径177・7㎝内に送り込むことが絶望的になる。

戦いながら、少しずつ機動力を奪うんだ。

（……ッ？）

そんな俺と近接拳銃戦を繰り広げる緋緋神の射撃は、どこかおかしい。

俺を殺傷するように見せかけて、弾をバラ撒くこと自体を目的としたような撃ち方だ。

その俺たちの周囲で、空間アートのようにキューブたちが瞬間移動を続ける。流れ弾が、スイカの種のようにキューブの中に収納されて増えていく。あれは何をやっているんだ。

それに俺が目をやった瞬間、

「さて遠山、じゃあこうなったらどうする？」

――ババババババッ！

キューブの配置が一斉に変わり、初弾からの全弾が四方八方から俺に襲いかかってきた。

静止していたにも拘わらず、その運動エネルギーを完全に保った状態で。

アリアの体の至近を通る弾もあるが、全て、アリアには当たらないコースだ。

瞬時にそれを確認した俺は――

「――っ！」

ベレッタ・キンジモデルをフルオートに切り替え、残弾を全て使って連鎖撃ちでそれを迎え撃つ。だが咄嗟の事だったので撃ちきれず、回避の必要も生じた。

敵の弾幕はカナ側が薄い。俺はいつ瞬間移動してくるか分からないキューブを高跳びのように跳び越え、なんとか弾丸の暴風雨からカナの側に転がり出る。

「……ッ……！」

だが、これは失策だ。二重の意味で。

まず、ヒステリア・レガルメンテを以てしても――

緋緋神をここ、カナの前に誘導する事ができなかった。

そして、この位置関係。

さっきの挟み撃ちとは違う配置で、緋緋神・俺・カナが直線上に並んでしまっている。

それを見た緋緋神は、こっちが懸念した通り――

「よし、おさらいといこうか」

アリアの両手で、『前へ倣え』のポーズを取ってきた。こっちへ向けて。

あれは……レーザー……！

その測距測角の姿勢だ。

それを裏付けるように、アリアの赤紫色の瞳が緋色の光を放ち始めている。

（――来るぞッ……！）

ヤツは俺とカナを、気に撃ち抜くつもりだ。遊び半分で、それを俺たちが再びどう攻略するのか見ようとしている。おそらく、できないなら殺すという腹で。

冷や汗を滲ませた俺の首に、ちゃき、と、後ろから鎌がかけられ――別の意味で焦った俺を、後ろに下がらせていく。

代わりに前に出たのは、カナだ。

「カナ……！」

その表情に少なくない危機感を滲ませたカナは、大鎌の刃先を自分の胸の中心に据え、付け根をアリアの右眼に向けている。

構えから見て――あの攻撃がレーザーだという事までは分かっていて、俺がスクラマ・サクスでやったのと同じ発想で受け止めるつもりらしい。

だが――アリアのレーザーが孫のレーザーと同じスペックである保証はどこにもない。
しかも組み立て式だから、大鎌の内部は一部が空洞だ。危ないぞッ……！
「ハハッ。カナ、お前は美人だなぁ。男女を問わず、全世界を恋の虜にさせられるだろう。だから……よし、その恋の象徴――お前の顔を、剥いでもらっていこう」
ニヤリと笑いながら、緋緋神はアリアの瞳の輝きを強めていく。
その光り方は、孫より強い。まず間違いなく、孫より高出力だぞ……！
「キンジ。これが最後に教える事になるかもしれないわ。どんな相手でも、攻撃の瞬間は無防備になる。そこを攻めれば、斃せるものよ。覚えておきなさい」
……ダメだ、カナ！
孫戦の記憶と今の光量から概算したが、カナの大鎌は――撃ち抜かれちまう！
「香港での負けを、ここで取り返させてもらうぜ。遠山」
撃ち抜ける事が緋緋神にも分かっているらしく、キャンセルの様子はない。
光が一際、強まった――もう発射は止められない。発射を前提に動くしかない！
撃たれればどの道、俺かカナか、どちらかがやられる。
ヤツが最初に狙ったのは俺の方だ。カナの後ろから出て、俺だけを撃たせるべきだ。
俺に緋緋神を止める打ち手はない。だがカナにはあるかもしれない。カナを残すべきだ。
コンマゼロ数秒でそう判断した俺は、カナの背後から飛び出して――重要臓器を避けて胴を撃ち抜かせる、ジーサードの内臓避けを見様見真似でやろうと身構える。
――パアッ――――！
闇を貫いた緋色のレーザーで――
――俺が、撃たれた。予想通りに。
（……ッ……！）
だが、ヒステリアモードの視覚が見せるウルトラスローの世界で――
ひとつ、予想と違うことが起きている。
直進しかしないはずの光線が――カーブを描いているのだ。
俺の前方、３ｍぐらいの所で。ナナメ右下、石畳から地中を撃つような角度に。
「……ッ！」
そこに生じ、浮かんでいるものは――透明な、半径１ｍ程の『レンズ』。
だが質量物ではない。おそらく超能力で作り出された何かだ。
向こう側が歪んで見える事から、緋天・緋陽門とはまた別の未知の技と思われる。
コンマ１秒にも満たないレーザー照射が終わり、時間感覚が元に戻ってから……
「……『重力レンズ』か。ザコ女が、横やりを入れやがったな？」
レーザーが生じさせた熱風の中、緋緋神が、呆然とする俺とカナの後ろを睨んだ。

そこでは、パトラが――

真冬に汗をかいて、眉を寄せ、荒い息をついて両手を突き出していた。

パトラはカナを守ろうと、あのレンズみたいな超能力を使ったんだ。だがそれには他の術とはケタ違いに大きな力が要ったらしく、一気に疲れ果てた様子になっている。

「――つまらない水を差したヤツは、殺す！」

まるで、ゲームを途中で取り上げられた子供のように――

今まで比較的冷静だったハズの緋緋神はキレた感じになり、その体の周囲に金色の光の粒を生じさせ始めた。あれは香港で見た事がある。タンカージャックの時に猴が見せた、有視界内瞬間移動……！

だが、猴にはかなりの集中が要されたその技も緋緋神アリアにとっては片手間でできる事らしい。同時に漆黒のガバメントを抜いたかと思うと、その銃口の前に指で輪を作っている。今度は何をするつもりだ。

「……っ……！」

パトラの前方に小さな砂嵐が起き、吹き上げられて集まった神社の砂が小型盾・アメンホテプの昊盾となって宙に浮かぶ。5枚、10枚と重なって防壁となったそこに――

――バツッッンッッッッ――！

通常の銃声とは全く異なる爆音を放った、マッハ3～4と思われる――.45ACP弾では到達し得ない超高速度の弾丸が飛びかかった。俺と兄さんが銃弾撃ちを出すヒマもなく。

パパパパパパンッ！　と、斉に撃ち抜かれた昊盾の向こうで、ビシッ！　と――

パトラの額を、弾丸が、撃ち抜いた……ッ……！

「――！」

声もなく倒れたパトラへと振り向いた、カナの目の前に――

――パッ――！

緋緋神が、それまでの距離を全く無視して出現した。瞬間移動だッ！

その手には、抜き放たれたアリアの小太刀が逆手に握られている。

振り上げようとしているその軌道は、宣言通り――顎から額までカナの顔面を削ぎ切るつもりのものだ。

「――カナっ！」

その瞬間――

カナはバックステップして、斬撃を躱した。

カナはパトラに注意を向けていなかった。

向けたようなフリをして、緋緋神を誘ったのだ。それが成功した。今だッ――！

「うおおおッ！」

すかさず俺が発砲する。アリアの後頭部を撃ち抜く射角で。

さっきまでの俺のアリアを殺すなという発言や戦い方は、全てこの瞬間のための伏線。俺には確信があった。俺が殺そうとすれば、絶対、緋緋神は避ける。理想の依り代とまで言っていたアリアの体を傷つけられないのは、緋緋神も同じハズなんだ。

だからこの一瞬だけ、一回だけは、確実にアリアの体を誘導できる。

その読みは——的中し、

「——おっ!?」

意外そうなアニメ声を上げた緋緋神が、身体を前に傾けて俺の弾を躱した。

既に大鎌を構え直していたカナの177・7cm圏内から——緋緋神は出ようとしていたが、それを妨害した形になる。

次の瞬間、

——フォンッ——

カナのスコルピオが、空振った。

いや、違う。

僅かに、しかし力強くその峰はアリアの顎を掠めていた。頭部に、震動を伝えるように。

ほとんど何もされなかったように見えた、緋緋神が……

「おっ……お……？　おっ？」

とた、とたた、と、背後によろめいて……すとんっ、と、尻もちをついた。

目をまん丸に見開いて、両足を地面に投げ出すようにして。

「……ごめんね、ちょっと力が入っちゃった。私も、怒ることってあるんだなあ」

などと緋緋神を見下ろすカナの背景で、あの鬱陶しいキューブが縮小して消えていく。

「しょ、しょせん、ひとの、体か。猴の、からだなら、こうはいかなかった、ものを」

緋緋神は……呂律が回っていない。

あれは、強襲科の徒手格闘訓練で何度も見た事がある。カウンターの殴打を顎や頭部に入れられて脳震盪を起こした人間の足つき、症状だ。

「条理予知でも半々かなって推理してたけど——乗り移るといっても、神経系は憑依先の人体のものを利用してるのね。緋緋神さん」

「ままならぬ、ものよ」

緋緋神アリアは——文字通り目を回し、ばたん、きゅう……

と、アリアっぽいムードで大の字になって倒れた。

緋色のオーラも一気に弱まり、薄ボンヤリしている。

「……妾の化身は、よく額を撃ち抜かれるのう。台場ではレキもここを撃った。キンジ、お前の持つ小刀を緋緋神に突きつけるのぢゃ。急げ」

そうボヤいて、大木の裏から偉そうに現れたのは……

コートを肩に掛け、タイトなミニスカートをはいた、パトラだ。

やっぱりかと思って振り向くと、さっき頭を撃たれたパトラは砂人形で……もう、風に崩されつつあった。カナはそれが分かっていたから、さっきのブラフが打てたんだな。

「こ、こうか……？」

言われるままに、俺がナイフをアリアの体に近づけていくと――

パトラが何やら念じると共に、元から赤味がかっていた俺のナイフが……

……緋色に、光り出す。

「……うっ……あ……やめて、く、くるしいよ、きんじ……っ……あぁ……ひぁ……」

その光にあてられた緋緋神は、アリアの演技で悶絶している。

これには心が痛むが、もうその手には乗らないぞ。

と、俺が心を鬼にしてナイフを緋緋神アリアに寄せた時――

「――よ、しッ！」

ガバッ！　と上半身を起こした緋緋神が、ナイフに噛みついた。

これにはパトラもカナも驚き、すぐアリアの体を刃から引きはがしたが……

「こ、こんかいはこれで良し、だ。ハハッ。こいつは、も、もう使えまい。あ、あばよ、キンジ……近いうちに、また……あう……」

そんなセリフを残して、緋緋神はアリア諸共、失神したようだった。

緋色のオーラを消して、ふわり……と倒れていくアリアを抱き留める俺の前で……

「とりあえずは……痛いの痛いの、飛んでいけー……だね、アリア」

ようやくこれを『アリア』と呼び直したカナが、大きく息をつくのであった。

アリアを背負って、乃木坂の兄さんのマンションに戻ると――まずはスカートが破れてトランプ柄のアレがスキ間から見えていたアリアを、パトラが着替えさせてくれた。

その後、ソファーに横たえられたアリアはレム睡眠状態になって「ももまん……」などと寝たままクッションを食べようとしている。

ヒステリアモードの解けた俺にも分かるが、これは人格がアリアに戻ったって事だな。

緋緋神は、逃げたのだ。これ以上、カナに手の内を読まれないために。

神を名乗る割には――卑怯なヤツだ。戦闘能力はそれを名乗るに値するかもしれんが、人格は神なんかじゃない。卑怯者の強化版超能力者、ってとこだぜ。

アリアを見つめつつ、向かいのソファーに掛ける俺に……

「よく頑張ったわね、キンジ。えらい、えらい。さすが私の弟くん」

天然のカナが頭をヨシヨシとナデナデしてきてる。

調子狂うなぁ。あんな超人バトルを繰り広げた直後だってのに。

まあ、部屋に入るなり俺を射殺しようとした金一兄さんよりはマシだけどさ。

「でも、キンジが緋緋神を起こすほど……アリアとの仲を発展させてたとはねぇ」

ふう、と溜息をついたカナは――めっ、という感じで俺の額をつついてきた。

「思ってたより、ませてたのね。キンジも。でも、またアリアとくっついちゃダメよ？　そしたら、また緋緋神が出ちゃうんだから」

「……いや、別にそんな、くっついたってワケじゃ……」

俺が赤くなって抗弁するが、カナはそれをスルー。

なんか俺とアリアがハレンチな事でもしてたかのように、話を進めてくる。

事実関係としては、パートナーシップの証にチョコレートをもらったレベルだってのに。

「そこの『恋』の線さえ切っちゃえば、ひとまず安全かな。アリアが武偵法を破って人を殺すような戦いじゃないと、『戦』で緋緋神を喜ばせるには刺激が弱いからね」

「アリアが……そういう戦いをする怖れはないって事か……」

「絶対の保証は無いけど。アリアの身柄は拘束したくないし、『殺して』って頼んでくるまでは殺してもいけないと考えているわ。他の関係者がどう言うかは分からないけれど、武偵憲章4条――武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用の事――自分のことなんだから、どんな結末になるにせよ、アリアは緋緋神の件に自分で決着を付けるべきよ」

やや際どい、カナの意見だが……

期限切れになったら敵に回ると宣言してる玉藻よりはマシだな。アリアを殺す選択肢を残している以上、今後はヘタに助けを求めない方が良さそうではあるが。

そこへ――

「……このナイフはの、妾にも修復できぬ。もう、ただのナイフぢゃ」

テーブルで俺のバタフライ・ナイフを調べていたパトラが、それを畳んで返してきた。

「カナは……俺に何を持たせてたんだ？　このナイフ、大事にしろって言われたから……ずっと持ってたんだぞ」

俺がナイフを見せつけると、カナはちょっとたじろいで「あははー」と苦笑いする。

「それは昔、遠山家が星伽神社に貰った匕首・色金止女を打ち直した物なの。緋緋色金に共振して、力を少し打ち消す効果があるのよ。小さかったり元々弱ってたりする色金なら、発動を止めさせる事もできるの。緋緋色金絡みの災難を避ける、お守りみたいなものね。シャーロックが欲しがりそうな物だったし、そのシャーロックを殺す時に必要そうだったから――あなたに預けて、隠したつもりでいたわ」

「やっぱり、色金絡みのアイテムだったんだな……ていうか、お守りならご利益があって欲しかったとこだぜ。色金の災難に遭いまくった身空としてはな」

もらった時は反射防止のために赤いメッキで着色してあるもんだと思ってたが……最近、疑ってた通りだったな。この緋色のナイフは。

「周囲の緋緋色金が大きすぎたのよ。シャーロック、孫、アリア……色金殺女クラスじゃないと

抑えが効かない大質量のものばかり、キンジは相手にしてきてたの」
「色金殺女――白雪の刀と関係あるのか、これ」
「それは色金殺女を造った時に余った材料で、もっと原始的な造り方に基づいて打たれたもの。ほぼ無制限に使える色金殺女とは違って、共振するたびに効果が弱まっていく――最終的には使い捨てにする、一世代前の色金ジャマーなのよ。あとね、色金殺女はずっと持ってても無害な人工色金で造られてるのに対して……この色金止女は本物の緋緋色金をちょーっぴり含んじゃったりしてるけど――」
「ちょっ……！」
俺は驚いて、バタフライ・ナイフを落っことしかける。
じゃあ要するに、い、色金合金ナイフじゃねーかこれ。
なんちゅう危なっかしい物を弟に持たせてたんだよ、カナは。
「だ、大丈夫よ。それの色金は人体に全く影響が出ないレベルの極微量に留められてるし、キンジなら絶対大丈夫なの」
「……どういう意味だよ」
「キンジは武偵だし、女嫌いで恋に向いてないっていうか、耐性があるから。恋愛感情に疎い子は、色金の影響を受けないものよ」
「……」
そう言われちゃ、ぐうの音も出ないな。
非殺を義務づけられてる武偵で、かつ、恋愛にとことん疎い俺ならと――
カナは俺の非恋愛体質を利用して、これを預けてたってワケか。
「しかしそのイロカネトドメも、もう使えはせぬ。さっき緋緋神が力を一気に注ぎ込み、共振を満たしてしまったからの」
パトラにそう言われて、ナイフのグリップを開いてみると――
確かに、刃から色が抜けている。ただの鋼鉄の、破壊峰つきのナイフになっちまってるみたいだ。
……使い捨ての武器を、使い切らされたってワケか。さっき、緋緋神に。
「この辺りが……色金について私とパトラが知っている、限界よ。シャーロックも、これ以上の事は知らなかったでしょうね。そしてこのレベルの『緋色の研究』から、アリアを救う手段は……見つからないわ」
カナの言葉に、俺が再び眠るアリアを見据えると――
「これ以上キンジがアリアのために戦うなら、私たち以上に色金を知っている人物に頼るしかない。そして私は――それを2人、知ってるわ」
そう言ったカナに、パトラが少し驚いたような視線を向けた。
「仕方ないでしょうパトラ。最高裁より先に、緋緋神化まで至ってしまったし。キンジももう

17歳。大人を相手にする場に出してもいい歳ごろだわ」

「……最高裁……？　何だ。何の話をしているんだ、カナ」

俺が眉を寄せてカナに振り向くと――

「いいこと、キンジ？　話すけど、聞いたら、もう引き返せなくなるわよ」

――カナは、今まで俺に見せた事のない……

俺を一人前の男として認めているような、そんな視線を寄越した。

「今さら何を言ってるんだカナ。俺は退く気はない。どこの誰なんだ、その2人は」

「1人はロンドンにいるわ。現代最高の安楽椅子探偵、メヌエット・ホームズ」

「……っ……」

アリアの、妹か。

「あともう1人は――神崎かなえ。かなえはメヌエットから、それを聞き知っているの。メヌエットと、かなえ。そのどちらか、或いは両方の口を割らせるしかないわ。どちらも、至難の業だとは思うけど……」

アリアの、母親……かなえさんが、知っているのか。色金のことを。

「アリアを救いたければ、まずは神崎かなえに会いなさい。緋緋神になった話をすれば、もう彼女もトボケられないハズだし。さて、と・こ・ろ・で……」

俺から自分も知らないことを質問攻めにされるのを厭ったか、カナはそこで急に――

「このセーターね、高かったの。パラスパレスの限定品。とってもお気に入りだったの」

と、普段のフワフワした調子で話題を変えてきた。

そしてどういう構造なのか知らないし知りたくもない大きな胸を包む、縦縞セーターにふんわりとキレイな手をあてがっている。

「どこかの誰かさんが、アリアにませたことをしたせいで……私は急遽この服で戦う事になっちゃって、ここ、ほつれちゃったなあ」

その柔らかな口調で、さっきまでの会話のムードが霧散してしまったので――

「……ご、ごめん」

これ以上カナを問い詰めても何も出ないであろうことを悟った俺は、一応そこを謝っておいた。するとカナは確かにほつれて穴が開いてしまっている腋の辺りを指し、

「ほつれちゃったなあ」

姉（というか兄）のセーター下に妙な気でも起こしたら、自己嫌悪で拳銃自殺どころか自暴自棄で緋緋神と組んでの世界戦争モノなので――

「わ、分かった。何かで弁償するよ」

俺はカナが俺に言わせたかったであろうセリフをすぐ返す。

カナは無欲だが、武偵が武偵に助けてもらったからには支払いを拒んじゃいけないしな。

「やったね。じゃあ、ねぇ、お願い。クロメーテルさんに会わせて？」

――ぎゃあ！

文字通りソファーから飛び上がってしまった俺に、

「トオヤマキンジ、お前も女に化けたらたいそうな美人だったではないか。また化けて、妾の前でカナと仲良しこよし、やってみい」

……パトラ……ッ！

俺も兄さん＝カナをバラしたから人のことは言えないが、俺の恥ずかしい秘密をカナにバラしやがったな!?

「それはダメだッ！　絶対やらないぞ！　絶対だ！」

と喚く俺にソファーの上で迫り来るカナとパトラは、なんというか、本気。

好物を前にした猛獣2匹みたいに、目が光ってるカンジだよ……！

「お姉ちゃん、妹が欲しかったのよー！」

「それはかなめがいるだろっ！」

「かなめは可愛い、クロメーテルは美人で、別腹なのっ。さあ頑張ってみよー。ファイト、キンジ！」

「衣装は妾が貸してやろうぞっ。ほれ、化けてみい！　フヒヒッ」

さりげなく俺を拘束するカンジで抱きついてきたカナと、いつの間にかロン毛のヅラを手にしているパトラの変態夫婦に――みょ、妙な大人の遊びを仕込まれてしまいかねん！

ていうか兄弟で女装して仲良しこよしとか、プレイにしても業が深すぎるだろッ！

ていうか、ああ、あッ、黒髪ロングのウィッグを被せられたッ。は、入っちまってる。クロメーテル日本上陸が、秒読み段階に！

「……や、や、やめてくれェーッ……！」

という俺の叫びが、天に通じたか――

「……んー……やめ……ない……クロメーう……むにゅ……」

俺に抱きついたままのカナが――

そのまま、すー、すー、と……寝息を立て始めた。

よ、良かった。間一髪で――

カナのヒステリアモード後の、長期睡眠期が訪れてくれたんだな。

事を焦っていたのは、それが近いことを自分で悟っていたからしい。

カナ・クロメーテル姉妹のカップリングがお望みだったらしいパトラもすっかり萎えた様子で、俺のクロメーテル化を諦めてくれ……

目を覚ましたアリアが「？」という顔でヅラをした俺を見ているのが分かった。

み、見ないで！　アリア……！　後生だからっ……！

2弾　『かもしれない』・『かもしれない』

監査役をやっている事もあり、俺はチーム・コンステラシオンに顔が利く。
なので、アリアの母親・神崎かなえさんとの面会に行く際……俺は、仕事で千葉にいた武藤に代わって、車輌科の島苺に車を出してもらった。
昨夜のあらましを（恋がどうのの件とクロメーテルの件は伏せつつも）俺に聞かされたアリアは――すぐ、翌日の夕方にかなえさんとの緊急面会をセッティングしてくれて――
「……あたしはホームズ家の嫡女として認められてるけど、ママはお父様と離婚したから独身なのよ」
新宿警察署・留置人面会室に入るなり、俺にそんなプライベートな話をしてくれた。
「だからって、ママにヘンなこと考えてあんたの様子が変わったら、風穴開けるからね」
と、『ヒステリアモードになるな』の厳命をもらって、しばらく待っていると……
クリーム色をした、鋼の扉が開き――
透明な、アクリル板の向こうに――
彼女が、現れた。
高裁判決・懲役536年。事実上の終身刑を言い渡された、神崎かなえ。
バレッタで留めた、柔らかくウェーブする、長く艶やかな髪。
オニキスのように黒く、優しげな瞳。それを縁取る長い睫毛。
アリアと同じ、白磁のような肌――
「お久しぶりです。遠山キンジさん。うちのアリアがお世話になってます」
かなえさん。
あんたはなんで、そこにいるんだ。
何を知っていて、どうして、そこにいるんだ。
あんたの裁判はおかしい。なぜか通る、検察の支離滅裂な主張。アリアの命がけの努力を無にするような、重すぎる判決。
俺はアリアを無条件に信じ、かなえさんの罪だが、実は何らかの罪――あるいは、何らかの理由――によって、かなえさんはそこにいるんじゃないだろうか？　罪は後付けのニセモノかもしれないが、司法にまで手出しができる何者かの思惑によって、そこにいるんじゃないだろうか？
あんたは何に関与しているんだ。
俺たちの知らない、何に――
「なにママをジロジロ見てんのよ。さっき注意したでしょっ」
「――痛っ！」

いきなり横のアリアにギュムッと耳を引っ張られた俺が悲鳴を上げると、
「まあ、アリア。どうして乱暴するの。お友達に」
かなえさんはビックリした顔で、幼稚園児のママみたいにアリアを叱る。
「ママ……このムッツリは、日本代表レベルの女ったらしなのよ。ほっといたらママにもヘンな気を起こしかねないから、調教してるの」
「まぁ。こんなおばさんにヘンな気だなんて。あら。あらあら。もしそうなったら、どうしたらいいのかしら。元気な高校生の男の子だなんて、私、身が持たないわ」
アリアのトンチンカンな発言に、かなえさんはちょっと赤くなった頬に両手をあてて、クネクネ。久々に女扱いされて嬉しいような顔で、アリアとは似ても似つかぬ大きな胸と共に上半身を小さく揺らしてる。
た、確かにかなえさんは若く見えるし、どえらい美人だが……クラスメートのママさんだぞ？年齢も倍ぐらい離れてるだろうし、理子的なゲームじゃあるまいし、そんな気、絶対……絶対とは言わんが、起こさない。起こさないと思う。起こさないんじゃないかな。
いや、それに今日はそんな話をしに来たんじゃないんだ。
面会時間だって短いんだし、単刀直入に行かせてもらうぞ。
と、俺はアリアに乱された佇まいを正す。
そして、
「かなえさん。アリアに言わせるのも酷だから――俺が言う。今は元に戻したが、昨日、アリアは一時的に緋緋神になった」
話すべき本題を、切り出す。
その瞬間――
「――！」
かなえさんは、それまでのフワフワした雰囲気を一気に変えた。
まるで別人のように目つきを変え、しばらく沈黙してから――
アリアと、そして俺を見た。
そして、
「――子供は、自立していくな、寂しいような気分だわ」
そう呟くと、どこか色っぽい仕草で……深く、溜息をつく。それと同時に手を後頭部に回してバレッタを外し、まとめていたウェーブヘアを広げて、顔の側面に回した。これは多分、部屋の片隅でイスに掛けた管理官たちに口元を読まれないようにするためだ。
俺たちとかなえさんを隔てる、小さな穴が複数開いたアクリル板――
そこにさりげなく顔を寄せたかなえさんは、急に声を潜めて語り始めた。
「キンジさん。ごめんなさい。あなたがそこまで踏み込めるとは、思っていなかったわ。私は、あなたを甘く見ていた」

改正刑事訴訟法39条に基づき、原則として接見中の会話内容は自由であり、記録される事もない。それは被留置者の当然の権利だからだ。しかしそういった接見交通権は逃亡や証拠隠滅のリスクを避けるために等の理由で、制限されるケースもある。

平たく言えば、不穏な会話は中止させられるのだ。

それを知っている俺とアリアは、管理官に注意を払いながらかなえさんの話を聞く。

「推理小説なんかだと、ヒントだけを言うものだけど……面会時間は短いから、私は答えだけを言うわ。話す内容によっては途中で面会を中断させられるでしょうけど、知ってる限り、言える限りのことを言う。ただ、私はあなたたちが何をどこまで知っているのかを知らない。だから時間のムダにならないよう、尋ねなさい。知りたい事を」

ここのアリアは――まだ、理子が化けたアリアという事になっている。理子が公機関に流した偽情報では。それが警視庁にも伝わっていれば、そこの管理官たちの上は油断しているだろう。特別警戒するような命令は下ってないハズだ。

ある程度までなら、聞き出す時間が取れそうだぞ。

「ママ――」

何かを言おうとして身を乗り出したアリアを、俺が制する。

焦るなアリア。今は不審がられちゃダメだ。冷静を装っちゃいるが感情的になっている、お前に代わって――

「かなえさん、あんたは本当に無実なのか」

俺が、聞くぞ。聞くべき事を、可能な限り全て。

「――そうよ」

「じゃあなんで留置され続けてるんだ。なんで終身刑を解かれない」

「私はメヌエットが推理した色金の正体を知っているのよ。そしてそれを知っている事を、上に知られている。上はそれを知りたがっているのよ。だけど、私は黙秘している。黙秘しているから、囚われているのよ。求刑が死刑ではなく終身刑なのは、私に喋らせるためなの。上が私にイ・ウーの罪を着せたのは、色金について当局に喋れというメッセージよ」

かなえさんの言う、『上』という隠語――

アホのアリアは天井を見上げたりしてたが、司法を恣意的に操れるような者は限られる。

教科書にある三権分立なんて嘘っぱちを嘲笑うような、本当の意味での権力者――が、やって事か。

その名を伏せたという事は、かなえさん自身も相手の正体を知らないという意味であり、そっちを打倒しようとしてもムダって事なんだろう。

「どうして黙秘しているんだ」

「アリアのためよ。喋れば、アリアが殺されるから。武検や0課を知っているでしょう」

武検――武装検事。0課――公安0課。

俺やアリアなんかじゃ手も足も出ないような超人の巣窟も、権力で動く。
それを防ぐために、かなえさんは黙ってるのか。
だが少し分かったぞ。その権力は日本国内に限定されるものだ。かなえさんに喋らせるためにアリアを目の前で拷問にかけたりしないのは、アリアがイギリスの貴族だからなんだろう。
だが、色金の正体を知れば——権力は、それを無視してでもアリアを殺せる。おそらくそこは、イギリス側の権力とも合意が取れている事だ。だから、かなえさんは喋らない。
……際どいぞ。この話。
アリアの命は、ダモクレスの剣のように——か細い糸で、保たれているに過ぎない。
その話に、俺とアリアが言葉を失っていると……
「問いかけを急ぎなさい。向こうが勘付きかけてる。怪しまれた以上、多分、もうこれが面会できる最後のチャンスよ」
かなえさんにそう言われて、俺は管理官たちの様子に気づく。
さっきまで座っていたのが、立ち上がっている。時計に向けていた視線も、こっち側に向いてきている。内容は聞かれていないが、俺とアリアの緊迫した表情がバレて、会話を不穏当なものと見なされかけている。
「——ど、どうすればいいんだ。アリアを……緋緋神から救うためには。教えてくれっ」
余計な前置きはヌキで、俺が一番聞きたい事を聞くと——
にこっ、と、かなえさんが微笑んだ。
「それを教えるためにも、アリア。あなたに大切なことを聞くわ」
「大切なこと……？」
最後の面会と聞いて泣きそうな顔になっていたアリアに、かなえさんは——
「キンジさんのこと、好き？」
——そんな事を、訊ねた。元のフワフワした表情に戻って。
な、なんでこの期に及んで……そんな場違いな話をするんだよ、かなえさん……！
「そ、そ、そ、な、な、あ、あ」
瞬時に赤面、どころか全身を真っ赤に赤熱化させてバグったアリアに、
「言いなさい。でも緋緋神を喜ばせないように、ただ言葉として言ってみなさい。それでいいわ。はい言って。『好き』って」
アリアは……ぶわぁ……と、ツインテールを放射状に逆立たせて恥ずかしがりながら、
「す、すき」
……ッ……！
「はいもう一度」
「すきぃ！」
目をギューっと閉じて、アリアはアニメ声をさらに裏返らせて叫んでる。ナニコレ。

「うふふっ」

目を細めて笑ったかなえさんの前で、俺までも真っ赤になって黙ってしまう中――

「マ、ママが言えって言ったから言っただけよっ！」

がう！　と、アリアが俺に噛みつかんばかりの勢いで犬歯を剥く。

「親は子の嘘を見抜ける。本当の事も見抜ける。アリア、あなたは本当に、この人が好きなのね。それなら――」

と、穏やかに目を閉じた、かなえさんは……

「――この人と別れなさい」

淡々と、そう告げた。

「恋で緋緋神になったなら、それを封じる方法は……好きな人と、別れること。それしかないわ。もう、キンジさんと会ってはいけない。そして――忘れなさい。彼のことを」

かなえさんは――

去年の4月、出会った頃の俺とアリアがここで面会した時……開口一番、俺とアリアの関係を探るような発言をしていた。アリアが男子である俺を連れてきた事に、驚いた顔をして。

あれは……確認だったのだ。アリアが俺に、恋心を抱いているかどうかの。

「あなたは独唱曲。この前とは逆の事を言うけど――1人に戻りなさい。組むにしても、同性とだけ組むようにしなさい。あなたは『独唱曲』だから……できないだろうと思って、言わないでいたけど――あなたは、恋をしてはならないのよ」

「……っ……」

アリアは――

あの4月にパートナーと決め、ずっと一緒に戦ってきた俺との別れを命じられて……返す言葉が見つからない、といった顔をしている。

その表情には、激しい動揺と共に――絶望の色がハッキリ表れている。

「かなえさんッ……」

俺も動揺を隠しきれないが、それでも聞き続けなければならない。

腕時計で確認したが、もう面会時間は3分もない。

かなえさんはこれで終わりにするつもりかもしれないが、そうはいかないだろ。

アリアと俺が、別れる。

それじゃダメだって事だけは、分かるんだ。

この、鈍い俺にも……！

「――それだけじゃ不十分だッ。それじゃあ……アリアはずっと緋緋神に呪われたまま、今のままじゃないか！」

「……キンジさん。あなたも男の子なら聞き分けなさい」

「断る！　だって、アリアが――アリアが、こんな顔をしてるじゃないか！　それじゃあダメなんだッ。あんた、親だろ。親なら子供にこんな顔をさせるなッ！　あんたが聞けと言ったから聞く。答えると言ったなら答えろ。俺が聞きたいのは、そんな、逃げるような方法じゃなくて――立ち向かう方法だッ。緋緋神は人間の話が通じる相手じゃないわ」

「ムダよ。緋緋神に――」

追いすがる俺を、かなえさんは切って捨てる。

隣で、アリアが泣き始めてしまった事に気づいた俺は――

「じゃあ、じゃあ――緋緋神以外の神に頼ることはできないのか。神なら、別の神の話は聞いてくれるかもしれない。それなら、その神に頼むから、神に祈るから――！」

もう自分が何を言ってるのかも分からなくなりつつ、アクリル板に身を乗り出す。

その時、俺に詰め寄られたかなえさんは――目を丸くして――

「……神に……祈る……？」

何かに気づいたような、顔をした。

「そうよ、キンジさん。その手があったのよ。私には教えてくれなかったけれど、きっとメヌエットもそれに気づいていたんだわ。だから『瑠色の研究』『璃色の研究』を――」

頭の中で新しい道を突貫工事するように、かなえさんがその目に真剣味を漲らせていく。

その時、管理官が――

「神崎。面会を終了しろ」

――時間切れか？　いや、まだのハズだ。この会話が不穏当であると判断して、中断を命じているんだ。

それを無視して、かなえさんは早口に話し続ける。

「色金には3種類ある。緋緋色金、瑠瑠色金、璃璃色金。緋緋色金を司る緋緋神がいるのなら、瑠瑠神、璃璃神がいてもおかしくはないわ。その神々がもし存在するのなら、頼る道もあるかもしれない。キンジさん、あなたのお陰でそれに思い至ったわ」

近寄ってきて「神崎、発言を中止しろ」と腕を掴んだ管理官に、かなえさんは抗い――

「アリア。ロンドンへ帰って、メヌエットに会いなさい。あの子はまだ私に話していない推理があるはず。それを引き出しなさい。キンジさんはアリアと別行動して、瑠瑠色金・璃璃色金を探すのよ。メヌエットと、色金の神々――その2つを組み合わせれば、糸口も掴めるかもしれない！」

「神崎！」

管理官が、かなえさんの腕をねじり上げる。

「――ママぁ！」

「アリア……っ！　キンジさんの、言う通りよ、一旦はキンジさんと離れる事になるかもしれないけど、一旦は逃げる事になるかもしれないけど、最後は立ち向かいなさい……！　もう、私のためではなく、あなた自身のために……ッ！」

引き連れられて、面会室から廊下へ出る扉に押し込まれていくかなえさんに――

「ママ！　ママ！　ママぁ！」

アリアが、叫ぶ。あの日のように。

「――戦いなさい、アリア――！」

その声を最後に――かなえさんは、姿を消した。

俺たちの手の届かない、扉の向こうへ。

車輌科・島の待つ地下駐車場へ降りるエレベーターの中、アリアはツンツンした睫毛の目を閉じていた。激しい感情を抑え込み、かなえさんの話を真摯に考慮しているのだろう。

「……ママが言ってた事、少し考えさせて」

地下2階に着いたエレベーターから出つつ、強い意志を籠めた目を開いたアリアがそう言う。

俺の方を、見ずに。

「迷うなアリア。今のお前は、言わば魂の危機にある。かなえさんが言う通りにしろ」

俺は男として、アリアが言いづらそうにしていたその結論を言う。

恋心がどうこうという話は、俺は未だに完全には理解しきれずにいるが――俺がそばにいる事でアリアが緋緋神化するリスクがあるというのなら、離れ離れになるしかない。

――俺とアリアが、別れる。

それはパートナー関係の解消も含む事だろう。

１００％の信頼を置ける仲間を失うのは断腸の思いだが、それも、アリアを救うためだ。

「今後は別れて行動しよう。お前はイギリスに帰って、メヌエットに会うんだ。打ち手がない以上、お前がかなえさんに言われた通りにする事に異存は無いから」

腹を括った俺が、そう言うと――

「キンジ。あたしだってママに１００％従う操り人形じゃないわ」

アリアは、俺に厳しい視線を向けた。昔よりも少し、成長した表情で。

「ただ、確かに、メヌエットには話を聞くべきね。あんたのお兄ちゃんも名前を挙げてたそうだし、メヌが『何か』を知ってるってのは固いセンと言えるわ」

普段メヌエットをメヌと略して呼んでるらしいアリアが、そう言って腕組みする。

「だから、口を割らせに行くけど……あんたは連れていきたくないの。キンジの言う通り、ここは別行動にするわよ。ママが言ってた、こ、恋がどうのこうのはともかく――メヌは、危険な子なの。うまく接しないと、喋るだけで殺されるから」

「……喋るだけで殺される？」

「メヌエットは頭が異常にいいの。そして、変わり者でね。『人を嗾す』事にかけては、世界一高度なスキルを持ってるわ。認知心理学でいう教唆術を自己流で発展させた技術を、イタズラ半分に使って――喋るだけで、相手の思考、行動、時には人格まで変えてしまう。ヒマつぶしにね」

危険な変わり者というなら、このアリアも大概だが……

姉妹だけあって、妹さんも相当だなそりゃ。

「気に入らない相手には、その人が自分から死にたくなるような内容を会話に交えて言う。それもすぐにじゃなくて、数日の時間を置いて……ある時、急に自殺したくなるようにね。そういう事ができるのが、メヌエットなのよ。まあ、メヌの教唆には掛かりやすい人格と掛かりにくい人格があって、あたしなんかは全然掛かんないけど――十中八九、あんたはイチコロで掛かる。カワイイ女の子の口車にはすぐ乗りそうだから」

――失敬な。とも思ったが、正月、妹にそれ系の口車に乗せられて入籍しようとした身としては反論できんな。

「まあ……分かった。メヌエットの線は、お前に任せる。俺は……不得意な超能力分野の話だし、何の手がかりも無いが……瑠瑠色金・璃璃色金の方を探ってみるよ」

俺がそう言うと、アリアはコクリと頷いて――

「ママを助けるにしても、このまま裁判してたんじゃ埒が明かないって事も分かったしね。ママが色金の事で捕らわれてるなら、助けるため、色金に踏み込む。ある種の正面突破よ。それしかないわ」

胸――色金の埋まった小さなそこを小さな手で示し、眉をツリ上げるのだった。

運転席でヒラヒラのお洋服とリボンに埋もれるようにして居眠りしていた島苺のミニ・クーパーに戻り……俺と、「こら」と島の頭の巨大リボンを引っ張って起こしたアリアが後部座席に乗り込んだ時。

「――アリア女史」

ちょっと舌っ足らずな、アリア並にアニメっぽい声と共に……ずいっ。

待ってましたとばかりに、駐車場のどこかに隠れてたらしいチビ女が車に侵入してきた。俺とアリアを奥に押し込むようにして、定員2名の後部座席へと。

狭い車内が、島も含めてチビっ娘3人と俺1人でギュウギュウ詰めになっちまったぞ。

人によっちゃ泣いて喜ぶシチュエーションかもしれんが、俺は迷惑で苦しいだけだ。

「――誰だお前」

アリアの名を知っていた事から、俺が警戒心を込めて問いかけると――

「外務省欧州局事務官・銭形乃莉です。おいお全身ロリータ。お前、霞ケ関まで送れです」

チビ女は短いお下げにした髪を跳ねさせて、ぺちぺち。

ダブダブに丈が余っているコートの左手で、島の頭を叩いた。

眉を寄せて襟を見れば――そこには確かに、真新しい外交官徽章が付いている。

う、嘘だろ？　コイツ、大人なのか？　これで？

――チャッ――

（……ッ……）

ダブダブの袖に7割ほど隠れた銭形の右手から、小さな金属音がした。

銃……ではないが、何らかの武器を持ってるぞ。

「――ご自分こそ合法ロリータさんですの！」

べー、と、ちっこい舌を出して島は不満そうにしているが――

「な、なんで省内でのアダ名をお前が知ってるですかッ。いや、それはいいからとっとと車を出せですッ。断ったら外務大臣にチクって武偵庁長官に話を行かすですよ。そしたらお前のクビなんか、スッポンポンのポーンです」

声だけでなく喋り方も子供っぽい銭形に、そう強いられている。

「さてアリア女史。ちょっとご同行願いますですよ。イギリス大使館と外務大臣政務官がお呼びです。今までいろいろ揉み消してやったんだから、こういう時は身柄の1つや2つおとなしくよこせです」

その発言に、理子という事になっているアリアがシラを切ってくれる事を祈ったが……

「銭形……探したわよ！　このドベ！」
虫の居所が悪く、ブチィ！　とノーウェイトでキレたアリアは、ぐぎぃ！
銭形の首をいきなり両手で絞めた。や……やっちまったな！
これじゃ、いろんな意味で自分がアリア女史ですねッ！　か、形の変わるヘンな影も無いから、そー
「や、や、やっぱりこっちがアリア本人だってバレちまうだろうが！
だろーなーと睨んだ通りです！」
経費に１００万かけた理子の協力も、水の泡。バレたぞ、外務省に……！
「ていうか、言うに事欠いて霞ヶ関へ来いですって!?　今あたしが一番行けない場所じゃない
の！　ちょっと身長が気に入ってるから目を掛けてやれば、この裏切り者！」
会話から察するに、このチビ大人……今までアリアが手足のように使ってきた外務省の担当者
らしい。
だがそれが裏切って、省が軟禁していたアリアを再び捕らえにきたってワケか。
「こッ、こッこれは外務大臣政務官からの命令なんですっ、連れてかないと私が大臣からこって
り搾られるです！」
「いつも搾られてるんだから今さらどうでもいいでしょこのポンコツ！」
どごっ、どごごご！
アリアは、背中まで衝撃波が抜けて見えるような膝蹴りを銭形の下腹部に入れてる。
う、うーん……暴君・アリアに使われるという事は、恐ろしいことなのだなあ。
普段は主観だが、こうして客観視すると改めて思い知らされるね。
「それと銭形あんた！　キンジのバスカービル戻しの件もサボってるでしょ！」
「公務員は忙しいんです！　私のように国Ⅰを主席合格した超エリートともなればっ、な、なお
さらです！　そんなクズみたいな仕事にかまけてるヒマはありませんです！」
……クズみたいな仕事……
「こっちだって他でも色々やっちまってるんです！　もう始末書は書きたくないです！」
鏡高組と俺たちの抗争の時に火消しをしてくれたのも、銭形なんだろうが……
今の状況下では、もう味方じゃないらしいぞ。それなら――
「――加勢するぞアリアっ！」
俺はアリア越しに銭形の両足を掴み、猫車を押すようにしてクーパーから出しにかかる。
「外務省にもインターンがあるのか知らんが、小学生の分際で武偵にケンカを売るな！」
「な、なッ……！　私は24歳です！　お前らよりお姉さんなんですっ！」
「ウソつけ！」
「ウソじゃないです！」
などと喚いた銭形は「最終確認！」などと小さい手でアリアの胸を鷲づかみにする。
「やっぱりこっちがアリア女史です！　峰理子がいくら押さえつけても、ここまで縮めることは

できないです！」

次の瞬間、

「――うるぁあ！」

決して美少女キャラが上げちゃいけない系統の怒声を上げたアリアが、小型車なら粉砕できるような勢いのショルダータックル。

銭形はクーパーから転げ出て、それを見た島が「行きますの！」と車を急発進させる。

「急ぎなさい島！　コイツには手練れの仲間がいるわ！」

アリアの叫びと、クーパーのホイルスピン音が交錯する。

仲間がいるのに銭形しか来てないという事は、アリアが新宿にいるらしいという情報が漏れてから時間がそう経ってないのだろう。

きっと、かなえさんとの面会中に警視庁から外務省に連絡が行ったんだ。

急げというアリアの指示は正しい。まだ、外務省側はフォーメーションが取れていない。逃げて姿をくらますなら、今の内だ。医科研病院にはあんなポンコツだけじゃなく本物の気配もあった。そいつらに包囲されたら、袋のネズミだぞ。

「行っきますのよー！」

真っ赤なエナメルの厚底ブーツで短足を補った島が、深くアクセルを踏み込んだが――

「待て待てェーいでーす！　アリアーっ女史ィー！」

ずりずりずりっ！　と、開いたままのドアにしがみついた銭形が、全身を床に引きずりながらついてきてる……！　なんちゅうド根性女だっ……！

「しつこい！」

「あばよ、お姉ちゃんッ」

アリアと俺のツープラトン・キックで、ようやくそれを叩き落とすと――

島はクーパーをドリフトさせ、駐車している他の車をほんの数ミリで躱して走り抜ける。

バックミラーを見ると、なんと銭形は太い眉をツリ上げてすぐ立ち上がり、ダッシュで俺たちを追おうとしてきた。が、自分のトレンチコートの裾を自分で踏んで盛大にこけた。チビのくせにそんなもん着てるからだ。よく見て覚えておけよ、アリア。

1撃でグリズリーを昏倒させるアリアの打撃を2撃受けても立ち上がった銭形も、人間離れした耐久力の持ち主らしい。なるほど、外務省もあれをアリア番にするワケだ。

「ついキレてやっちゃったわ。もう外務省とも敵対かなぁ。便利な組織だったんだけど」

地上に出たクーパーの中、そのアリアが口をへの字にしてる。

「今のは銭形が悪い。逮捕権も無いヤツが人を拘引しようとすりゃ、抵抗されて当然だ」

「あの女はああ見えてキャリア官僚よ。そういう理屈が通じる相手じゃないわ」

国家公務員は――

下っ端はともかく、上へ行けば行くほど、行政的な融通が利くようになっていく。外務省のエリートともなれば、いざ警察が介入した時にも向こうに有利な根回しがされる。

それを盾に何でもできる、ある種の無法者――友法者なのだ。霞ヶ関の官僚連中は。

敵に回しちゃマズイのを敵に回した、というのはいつも通りの事としても……

さて、うまく逃げ切れるだろうか。

車で出たは出たが、都内じゃいつ渋滞にハマってもおかしくない。特に新宿付近は、車より徒歩で抜けた方が早い事だってザラにある土地なんだ。

という俺の心配をよそに、島は車通りの少ない道を選んでミニ・クーパーを明治通りに進めた。そこを一目散に南下し、新宿御苑と代々木駅の間を通過した辺りで――

ビイイイイーン！　と、甲高い単気筒エンジン音を上げて、

「――アリア女史いーっ！」

シート高が66cmしかないミニ原付、ホンダ・モンキーが後方の交差点に飛び出した。

乗ってるのは、身長130cm台と思われるミニ大人の銭形乃莉。

二段階右折した時に見えたが、モンキーは『外―』の字で始まる青い外交官ナンバー・プレートを付けてるぞ。

小さな運転者を乗せた小さなバイクという、小熊のサーカスを思わせる姿の銭形が――ヒュラッ――ピュンッ！　クーパーを追いながら、左手に握り込んでいた鎖のスリングを回して何かを投擲してきた。女児っぽく、おさげの髪を跳ね上げさせて。

――ボスッ！　という着弾の音に続き、チャリチャリチャリ……と、クーパーはタイヤから異音を上げさせ始める。何だ、これは……？

「5円玉を投げてきたわよ。タイヤに突き刺さったわ。防弾タイヤじゃなきゃ撃ち抜かれてたかもね」

動体視力のいいアリアが、白銀のガバメントをスカート内から抜いてボヤいた時――

ピュンッ！　ガシャンッ！

銭形の2コイン目が、クーパーの後部ガラスをブチ割った。

「……ごっ、ごめんなさいですのー！　この車は予算の都合でフロントガラスしか防弾にしてませんですのー！　ですのですので、えーいっきりハンドルを切り――ギュギュィ――ッ！　と、車線を変えずにクーパーを180度スピンさせる。同時に左手でギアをRに入れて、なんと、バックで走り始めたぞ。上体を捩って、今や後ろとなった前方を振り返りながら。

叫んだ島は、右腕が捻れるぐらい思いっきりハンドルを切り――ギュギュィ――ッ！　と、車

バックになっても、島はかなり出していたスピードを落としていない。さすが車輌科。武藤のライバルだけあるな。

この異常走行に気づき、車道を行く一般車やタクシーは道を譲り出した。すみませんね皆さん。

「キンジ、油断しちゃダメよ。元々、銭形は荒事専門の事務官なんだから――ねッ！」
後部シートに両手を突いて、でんぐり返しみたいな姿勢になったアリアが――バキッ！　文字通り天を突き上げるカンガルーキックを真上に放つ。
バック走行を続けるタルガトップのクーパーから天井板が外れ、車道に吹き流れていく。銭形が「うひい！」と首を窄めてそれを躱す中、バスッ！　後部座席に後ろ向きで立ったアリアの.45ACP弾が、モンキーの前輪に命中する。
しかし――向こうのタイヤもパンクしない。防弾だ。しかも大きくタイヤのバランスを崩されたのに、銭形は「ふんぬっ！」とか叫んで地面を蹴り、モンキーを立て直してる。
なんてヤツだ。公安警察の外事科にでも転籍しろよ。
「ッ……島！」
標識で進行方向の様子に気づいた俺が、青ざめる。
クーパーが、北参道交差点――5叉路に差し掛かってる。信号は赤だ。
時速100km近いバック走行車が侵入してくるなどとは露知らず、右・左・ナナメから交差点に車が入ってくる。歩行者も多数だ。いくら島でも、あれは躱せないぞ！
「心配ご無用ですの！　いっきますわよー！」
ギュギュッ！　とまたタイヤを鳴らし、クーパーは――車が入る事が想定されていない飲み屋街の細道めがけ、信じられないような直角カーブを切る。
その曲がり方のせいで、車の4輪のうち左2輪が浮き上がり……ずずっ！　と、車体をナナメに傾けた片輪走行の状態で細道へ突っ込んだ。右2輪を歩道に、左2輪を壁につき、クーパーは時間帯的にまだ人のいないそこをバックのまま走っていく。
「キンジじゃま！」
ナナメになったシート、それと絶句した俺の頭を踏んだ2段ジャンプで、アリアが車の上空に飛び上がる。壁から突き出たジャズ・バーの看板を跳び越え、宙返りしながら――ババッ！　モンキーとクーパーの間に突き出ていたラーメン店・天下一品の看板の軸を.45ACP弾が撃ち砕いた。
大きなその看板が……がしゃん！　と地面に落ちて――
『進入禁止』の道路標識みたいになりつつ、細い追撃路を塞ぐ。
「――アリア女史！　どうせ逃げられないですよ！」
看板の前で急停止し、太い眉の眉尻を上げて憤慨する銭形に……アリアは、べー。
空中でアカンベーしてから、慣性の法則で車内に戻ってきた。俺がアリアをキャッチし、リアシートに座らせると――がっちゃんっ。細道を抜けたクーパーも、4輪走行に戻る。
（よし、これで逃げられるぞ……）
と思ったのも束の間、バラバラバラ……と、空から……イヤな音がしてきたよ。
ヘリのローター音だ。上空からのサーチライトも、裏原宿を走るクーパーを追ってくる。

どうやらヘリで俺たちの走行ルートを見張っていたらしい、外務省一派は――

――先回りしてるぞ。

外交官ナンバーのイギリス車、スポーティーなジャガー・Fタイプが進行方向に現れた。

「ああん、もうっ！　ですの！」

島は左右の手でハンドルとシフト、足でアクセルとクラッチを操り、ドリフトして車の前後を直し――道を折れ、どうせ空から見られているならと再び大通り側に退路を求める。

だが、無茶な運転のせいか……クーパーの速度が、少し落ち始めた。

後輪が、1輪パンクしてる。タイヤは防弾製だが、コインは想定外で――

食い込んだコインが、両輪走行に戻った際の自重でタイヤ内部を傷つけたんだ。

クリスチャン・ディオール、バーバリー、ルイ・ヴィトン、アルマーニ……世界各国の高級ブランド店で煌めく表参道に出たクーパーの前方に、ジャガーも逆走覚悟で出てきた。

その助手席の窓から、黒いワルサーPKKを手にした金髪男が身を乗り出している。

「――あの男、MI6だわ……！　ロンドンで見た事ある顔よ」

MI6――イギリス情報局秘密情報部。

機構上はイギリス外務省に属しているが、実際は英国首相直轄の諜報組織だ。

強靱・冷酷で鳴らした冷戦時代の先輩らに鍛え抜かれた現役世代は、世界屈指の武闘派エージェント団。日本くんだりでこんな仕事をやってるのはその二下だろうが、それでも本物の威圧感があるぞ。

ワトソンも言っていたが、連中は――イギリス人以外を人間と思ってないフシがある。治外法権を盾に、英国貴族が誘拐されたとかそういう事にして射殺しに来るだろう。まず、運転手の島を。

ジャガーを避けて転回・逆走し始めた、島が――

「……ッ！」

フワフワの花柄ロングスカートの下で、厚底ブーツの足を思いっきり踏み込んだ。俺とアリアがつんのめる中、クーパーが急ブレーキを掛ける。

クーパーの前方100mにて、モンキーが表参道を横切りながらスパイクストリップを敷設してる。あれは車のタイヤに無数の棘で食らいついて強制停車させる罠。封鎖線だ。

後方ではジャガーがもう2台現れて、横向きのまま急停車した。

車体そのものをバリケードにして、出口を塞ぐ陣形だぞ。

「……この辺で、チェック・メイトみたいだな」

今回の相手は公権力。つまり、国。それも日本とイギリスの2カ国だ。

国に挟み撃ちされちゃ、個人じゃ手も足も出ない。

今ならまだ武偵なら何とか言い訳のきく道交法違反・器物損壊で済んでるが、これ以上事を大きくすると警察も黙っちゃいないだろう。警察は銭形――官僚のお友達。俺たちがワルモノにさ

れ、逮捕されて、ブタ箱に入れられる。
そうなればそこで一巻の終わり。武偵免許も良くて免停、悪けりゃ剥奪だ。
「……あんたは逃げなさい、島」
そう指示し、ガバメントの弾倉を入れ替えたアリアの手を――
「よせアリア。銃を頼りに強がっても……相手が国となっちゃ、戦ったら詰むぞ」
俺が、押さえた時。
「――じゃあ、国には国で対抗しよう！　お兄ちゃん」
誰もいないハズのクーパーの助手席から、元気いっぱいの声が上がった。
こ……この声……
「か、かなめ？」
俺がその名を呼ぶと、「ばぁ」と――光屈折迷彩のコートを脱いで、かなめが助手席に出現した。半透明のテラナを掛けた、天真爛漫な笑顔で。
「こういう時は、日本よりも、イギリスよりも、もっと強い国に頼ろー！」
おー！　という感じにセーラー服のタイを跳ね上げ、かなめが突き上げた拳の上……
上空から、吹き下ろす風と共に大きな音が近付いてくる。
外務省のヘリのローター音に紛れて聞こえてきたそれは、双発・四翅――ＵＨ―６０の降下音だ。そこから、かなめは屋根を失ったクーパーに降下してきていたらしい。

俺とアリアが見上げた、冬空から――

透明になっていて外周が見えないヘリのハッチを開き、ゴウッ！　ゴゴゥッ！　という逆噴射音を立てて、何かが降下してきた。クーパーと、迫り来るジャガーの間に。

ドチャンッッ！

と激しい金属音を上げて明治通りに降り立ち、着陸専用らしい背嚢型ジェットパックをガランッと車道に投棄した……それは……

「……ロ、ロボ……!?」

アリアが目をパチクリさせて言う通り、人型ロボットと形容するしかない鋼鉄の巨躯。

目測、全高２ｍ４０㎝。

ブルーブラックに着色されたメタリック・ボディーはさほどスマートではなく、これが陸戦用兵器だという事が一目で分かる。背には機能停止中の光屈折迷彩と思われる、黒いマントを着装している。

だが、これはロボットじゃない。

関節の位置が人体と同じ点、また、ジャガーの車群に蛍光グリーンのモノアイを向けた仕草から察するに――中に人間が入っている。

ロボットというより、先端科学兵装の甲冑を纏った戦士なのだ。コイツは。

――ガスンンンンッ！

ＭＩ６を乗せたジャガーが、出会い頭にそいつを撥ねた――いや、撥ねられた。

先端科学甲冑の戦士が、突き出した右腕一本で車を押し戻したのだ。

「――撃貫抗ッ！」

なんでか外部スピーカーを通じて技名を叫んだロボ男――成人男性だ――の前腕から、爆音が上がる。火薬の爆発力で前腕甲から飛び出した劣化ウラン芯と思われる杭が、車のエンジンを易々とブチ抜いてしまう。

動けなくなったジャガーから、ＭＩ６がドアを蹴り開けて転げ出る。そしてすぐさま、バウゥウッ！　と、近距離からグレネード武偵弾を甲冑男に炸裂させた。

爆煙で一瞬２人が見えなくなったが、風にそれが晴れると……ＭＩ６のエージェントは運転手を連れて後退しており、甲冑男は左前腕に着装したピザの１切れみたいな形の盾で炸裂弾を受けきっていた。

「電動関節駆――出力80％。敵車輌――豪快に大破。当方に損害無し。オーバー」

パワードアーマーの胸を張って英語で喋った男は、２ｔ弱はあるジャガーを片腕で持ち上げて車道脇に運んだ。交通のジャマにならないようにしたらしい。

巻物のようにして収納していた磁気推進繊盾をスカートからニョロニョロと出現させたかなめが、ピューピュー！　と指笛を吹いて喜ぶ中……

アリアがロボ男を指さして俺の方を向き、『あれ、あんたの仲間？』的に小首を傾げてくる。

ので、俺は首を横に振るしかない。
「だッ……誰なのです！」
俺たちと同じ疑問を持ったらしい銭形乃莉が、クーパーの後方から叫ぶ。
問われて振り返った甲青男は、
「――アメリカである」
なんとも、雄大な答えを返した。
「日本君。イギリス君。ここはひとつ、私に免じて下がりたまえ」
そう言い放ったミスター・アメリカに、ＭＩ６は再びワルサーＰＫＫを向けたが――
「……非合理的ィ」
かなめが笑って呟いたのとほぼ同時に、パスパスパス！　という音と共に至近距離から鉄串みたいなニードルでロングコートを貫かれている。
バランスを崩し、片膝を突いたエージェントの隣に――ジジ、ジジッ――と、電子音を上げて現れたのは……赤いネクタイ、ワインレッドのシャツ、紫色のスーツの黒人男性。
チリチリの天然パーマの頭から下、顔面は包帯で半分ほど隠れており――合間に見える耳や唇には、大粒のダイヤモンドがあしらわれたピアスが煌めいている。
「……ッ……」
包帯の間に開いた口が自分に向けられているのを見たＭＩ６のエージェントは、銃口を下げたまま沈黙した。あの黒人の口内に、ニードルを射出する武器があるんだ。
（アイツは……ッ）
そこでようやく、俺は思い出す。
あの包帯男は、去年11月、かなめを助けに向かった品川火力発電所の敷地内にいた。
――ジーサードの部下、だ。
「あわわわ……アメリカと事を起こしたら、外務大臣にネコ掴みされて反省室送り……！　省史編纂室で定年まで始末書タワーの刑なのです……！　おぉい大使館、お前たちも退くです！」
などと、銭形は眼鏡がズレるほど震え上がってモンキーに跨がる。そして、脱兎の如く代々木方面へ逃げ出し……残されたＭＩ６も、
「――ジーサード・リーグか。貴様等を相手取るのは、クレバーではないな」
そう英語で黒人男にボヤいて、ニードルで地面と釘付けにされたコートを脱ぎ捨てた。
そして予備銃・弾倉・コンバットナイフ等を収めたチョッキを露出させた姿で、後衛のジャガーへ撤退していく。
（……）
いつの間にか、そしてなぜか来日していたジーサード、味に外務省側がビビってくれたおかげで、この場は何とかなったが……

ヤツらは準備を整え、必ずまた来るぞ。
向こうには公権力がある。武偵病院からアリアを横奪したように、姑息な手も恥じない連中だ。
今回の騒ぎの責任も、俺たちは何らかの形で取らされるだろう。こっちに騒動を起こさせたことが、外務省にとっては収穫なんだ。クソッ、霞ヶ関はマジで戦りにくいぜ。
「――キンジ君、アリア君。ケガは無いかね」
どうやらジーサードの部下らしい科学甲冑の男が、俺たちにモノアイを向けてきて――
気づけば、島は……さりげなくラフォーレ原宿の辺りにいて、野次馬しに来た島っぽい服装の女の子たちに紛れて見分けがつかなくなってる。ファッションのセンスはともかく、あれも武偵だな。ほっといても自分で武偵高まで逃げられるだろう。
「お兄ちゃん。あたしたちファインプレーだったでしょ？　はい、ナデナデして？」
クーパーの助手席に膝立ちして振り返り、背もたれ越しに出されたかなめの頭を……
確かに窮地を救ってもらったので、俺はナデナデしてやる。すると、
「えへへー。じゃあ、合理的に撤退しようか。あたしたち、お兄ちゃんを連れてこいってリクエストされたんだ。キンゾーにね」
かなめはデレデレ顔で磁気推進繊盾（P・ファイバー）を尻尾（しっぽ）みたいにフリフリし、ヘリが垂らした梯子（ラダー）を手渡してくるのだった。
兵員キャビンに俺とアリア、かなめ、甲冑男・包帯男を載（の）せたヘリ・ブラックホークは１００mほど上昇してから光屈折迷彩（メタマテリアル ギリー）を解き――北北東に針路を取ったようだ。
「お久しぶりでございます、遠山様。本日は道路が混（こ）んでおりますので、このまま空路で巣鴨（すがも）まで参りましょう。サード様がお待ちですよ」
元から曲がっている身体を撓（たわ）めて操縦席から振り返った、初老の白人・アンガス……の引きつるような笑みに、アリアがごく僅（わず）かに眉（まゆ）を寄せる。
三揃（みぞろ）いのスーツで隠していても、その脊椎（せきつい）の捩（ねじ）れ方はハッキリと分かる。腕や脚にもまっすぐではない肢がある。だがジーサードの運転手・兼・執事をやってるだけあって、その操縦はとても巧みだ。任せても……大丈夫だろう。
「――やあ！　トオヤマ・キンジくん！　お久しぶりだ！」
甲冑男はヘルメットを外すと、白い歯を輝（かがや）かせた笑顔で俺に親指を立（サムズアップ）て、握手してきた。
悪気は無いんだろうけど、馴（な）れ馴れしいなぁ。俺とお前は互いに品川で姿を見たことはあるが、喋（しゃべ）ったことは無いだろ。
二十歳（はたち）ぐらいと思われるソイツはかなりのイケメンだが、顔が濃い。
いかにもアメリカ人、それも白人（W）エリート（A）支配層（S）・保守派（P）、体育会系って感じだよ。

テキパキとソイツが脱いだ甲冑の肩当てを手にとって、
「んも～アトラス。このP・A・Aの水素電池カートリッジ、充電切れかけよォ？　こまめに交換しなさいよね～？」
オカマ喋りの英語……？　で声を掛けたのは、包帯男の黒人。
「おおっ！　ありがとうコリンズくん！　これは危ない所だった！　豪快に感謝する！」
甲冑男ことアトラスは包帯の黒人ことコリンズに、白い歯を輝かせて笑顔を向けている。
キャラメルを放り上げてパクッと食べてる、少々お行儀の悪いかなめも含めて……
ジーサード一味は、個性派揃いだな。良くも悪くも。
バスカービルやらコンステラシオンを思い返すと、人のことはビタ一文言えんけど。
（どうも、偶然じゃなさそうなムードもあるが……）
いいタイミングで通りかかってくれたな、日本に。我が弟・ジーサードよ。
ジーサードなら。
世界を股に掛けるあの男なら、日英の国際規模に広がりつつある今の俺たちの難局でも頼りになるだろう。きっと。
どうして来日したのかは分からんが、会って――相談してみよう。アリアの件を。

航空法81条で定められた最低高度より降下する際、アンガスはヘリを光屈折迷彩で隠し――俺の実家の庭に皆を降ろして、ジーサードの私設ヘリポートへと飛び去っていった。
「……キンジ。チナミ・アズムラからだわ」
ワイヤー梯子で庭に降り立った直後、携帯に着信があったアリアが――
携帯のマイク部分を手で塞ぎ、小声で言ってくる。そしてシリアスな声で通話に戻り、
「……分かったわ。ミセス。条件は呑むけど、キンジの逮捕状請求はナシよ」
喋り方から見て、外務省系の誰かと取り引きしてるようだが……アリアが告げた名前を、すぐ携帯で調べたところ――
通話の相手は、東村千奈美だ。現内閣の外務大臣政務官。政治家だぞ。
やりやがったな、銭形。もうそこまで話を上げたか。大臣政務官ともなれば、外務省のナンバー・スリー。上は副大臣と大臣しかいない。
「あと、お詫びの品をもらいたいところね。そっちが詫びる、その形を残しなさい」
そんな大物を相手にしても強権的な事を言ってる、アリアだが――
もう……この辺で大人の言う事を聞いておかないと、マズそうだな。
そう考えた俺と同じ意見だったらしく、話し終えて携帯を閉じたアリアは……
「結論から言うわ、キンジ。あたしは事実上の強制送還――建前としては自主帰国だけど、イギリスに帰る事になった。フライトは明日よ」

思ったよりケロッとした顔で、そう言った。
今の通話は、ひたすら俺を守るために……そうする話をしていたようにも聞こえた。
ので、俺がバツの悪そうな顔をすると――
「大丈夫よ。あたしはちょうどメヌに会いに帰るところだったんだから。痛くない条件を痛いように見せかけて、あんたの身柄の安全を引き出したの。あと、何かオマケもくれるって。むしろお得な取り引きだったわ」
ニコッ、と、アリアは芯の強い笑顔を上げてくる。
そ、そうだったのか。
やるなアリア。衆議院議員も手玉に取るとは。交渉事に於いて、上に強いタイプだ。
これでアリアと俺のパートナーの一時解散は、確定したが――こっちは不本意ながら、元からそのつもりだ。もらえるだけもらって、外務省&英国大使館とは手打ちにしよう。
俺たちが、ゾロゾロと遠山家に上がると……
「――キンジ、アリア。サード様はこっちだよ」
縁側に、FN P90――人間工学に基づいたデザインの短機関銃を抱えた、人間じゃないキツネ女のツクモが現れた。守備役をやってたらしい。
腰部プロテクターの穴からシッポが丸出しのツクモに案内され、俺の部屋に入ると――
「……ジーサード……!?」
畳の上に座り込み、ぞぶっ、とトマトを丸かじりしていたジーサードは……
ひどく負傷した姿でいた。
だが傷はしばらく前に負ったものらしく、ギプスやサージカルテープで加療中のようだ。
そのため、いつものプロテクターも、部外している。同様に外して置いてある左の義手も、旧式で重そうな、メカメカしいやつだ。マントも無い。
「――よう兄貴。まだ死にぞこなってたか」
「お前もみたいだな。だがちなみに俺は2回死んだがな」
とっても遠山一族な挨拶を俺と交わした、ジーサードだが――
今は外しているものの、携帯式の酸素吸入器も脇に置いてる。自律呼吸にも支障を来すほど、痛めつけられたのか。
「誰にやられたんだ」
と、正面にあぐらをかいた俺に――
隈取りみたいなフェイス・ペインティングのジーサードは、眉をツリ上げて、
「やられてねえ。カスリ傷だ」
「片腕もがれて酸素吸入器あてて、ずいぶんカスッたもんだな」
俺と戦った時も、そうだったが――部下思いのジーサードは、自ら先陣に立ちたがる。

そのコイツがさっき出陣してこなかったのは、負傷してたからなんだな。

ジーサードは負けた事を恥じて口を割らないが、どこのどいつだ。うちの弟をこんなにしやがって。と、怒る俺をよそに――

「よく見ると、確かにキンジに似てるわね」

この程度のケガは何とも思わないアリアさんは、ジーサードを見て小さく吹いてる。

そこに、

「おやまぁ。金三だけじゃなくて、金次もケンカしてきたのかい」

「ええじゃろ。火事と喧嘩は江戸の華じゃ」

手製の稲荷寿司を運んできた婆ちゃんも、トマトを持ってきた爺ちゃんも、涼しい顔でザ・遠山的リアクション。もうやだこの家。

「……お前、アイアンマンにでもやられたのか？　ターミネーターにでもやられたか？」

爺ちゃんたちが茶の間に戻る中、そう心配して尋ねた俺に、なぜか嬉しそうな苦笑いを返したジーサードは――

「まあ、そんなとこだ」

アメコミヒーローみたいなの同上で、戦ったっぽいな。

「ソイツの名前を言え。俺が仕返ししてやるから。言わなきゃ殴るぞ」

婆ちゃんのくれた稲荷寿司を頬ばり、ジーサードの髪を掴んでそう凄むと――

「……米国家安全保障局（NSA）の、マッシュ・ルーズヴェルトだ。俺ら先端科学兵装（トランサンデ・エンジェ）より新しい、超先端科学兵装のモンスターさ」

ようやく、兄ちゃんにチクってくれたな。

NSAだかNECだか知らんが、見つけ次第、顔が分からなくなるまでボコってやる。

――俺の弟を半殺しにしたとなると、敵は俺や孫クラスの戦闘力の持ち主だ。

しかし戦闘国家アメリカになら、そういうのがいてもおかしくない。きっと超人ハルクみたいな怪物なんだろう。だがそいつがどんなマッチョの豪傑だろうと、妖刀のセイジに続いて絶対許さんリスト入り決定だ。

「なんでソイツと戦った。お前、正月にネバダのナントカ基地に行くとか言ってたが」

しつこく尋ねる俺を見て、かなめとアリアが「お兄ちゃんは」「過保護ねぇ」とハモり気味に言ってくる中――

「空軍基地はネバダのエリア51とカリフォルニアのエドワーズをハシゴする予定だったんだがな。その後、エリア51にある事が分かったんで、そこを攻めた」

「ある、って、何がだよ」

「色金だ。俺は色金を取りに、エリア51へ向かったのさ」

――ジーサードが、『色金』というキーワードを出してきた。

ジーサードが色金に絡んでいるのは、既知の事だ。こいつは色金がもたらす超々能力（ハイパーステルス）によっ

て、かつて事故死したサラ博士を甦らせようとしている。
だが、色金が……アメリカにもあったとは。それは知らなかった。
「お前の狙いを知らなくはないから……念のため言っておくがな、アリアに対してヘタな動きを見せたら止めるぞ。アリアの敵に回れば、俺も敵に回すことになる」
「そっちの緋緋色金は諦めたさ。だからこっちはこっちで、取りにくくても構わねーから別の色金を取ろうと思ったんだ。だがその途中で、迎撃されちまってな。ていうかむしろ、そっちこそ色金絡みで困ってんだろ？　部下にゃ話してねェがよ」
と言うジーサードの発言に――
「……なんで知ってる」
俺がチラッと見やると、アリアも目つきを鋭くしている。
「――元イ・ウーのパトラがカナの家から電話してきて、『力になれそうならなれ』って、いろいろ教えてくれたんだ。だから日本に来たとこさ」
……なるほどな。
パトラも今や、ほぼ遠山家の女だ。昔イ・ウーを狙ってたジーサードが色金を追ってた事も掴んでて、一族のよしみで手を貸すよう口を利いてくれたってワケか。
事態をあらかた知ってるらしいジーサードに、
「アメリカの色金は何色なの」
アリアはすぐ、そんな事を訊く。
「青い。瑠瑠色金だ」
「それはどんな物なんだ。知ってる限り教えろ」
続けて尋ねた俺が、色金の話に食い付いているのを見て――
ジーサードは胸を張り、いつもの尊大な調子を少し取り戻す。
「まだ拝めちゃいねェが、俺は俺なりに空軍の保有する瑠瑠色金について調べてよォ。どうも、やたらでっかいやつらしいぜ。色金が超々能力を発現させる強度は、質量に比例するって事も分かってる。だから、色金には色金をってヤツで……方法は分からねーが、なんとか出来るかもしれねえなぁ。ネバダの瑠瑠色金さえあれば、その緋弾も」
またトマトをかじりながらの、ジーサードは――
……誘ってるぞ、俺たちを。アメリカに。
「――さっ、話もまとまった所で、一緒に行くぜ兄貴。今から。アメリカへ」
「い、いつまとまったんだよっ」
俺の肩に右手を置いたジーサードに、俺がツッコむと……
「相変わらず頭が悪ィな兄貴は。利害は一致してるだろうが。俺は色金が欲しい。兄貴がお大事にしてる以上、アリアには手出ししねェ。だから、ネバダの瑠瑠色金を取りにいく。兄貴もアリアの緋弾――緋緋色金を、なんとかしなきゃいけねェ。なんとかするのに――色金を取って調べ

る以外の手があるんなら言ってみろよ」
「それは……」
「緋弾よりでかいヤツで場所が割れてるのは、エリア51のやつだけだ。それとも、もっとでっかい色金を今から探すか？　兄貴はバカだから、一応教えといてやるけどな。色金はそこらのスーパーマーケットで売ってたりするモンじゃねーんだぞ？」
「……」
アリアの母・かなえさんが探せと言っていた色金は――アメリカにもある。
それを手に入れて何らかの方法で扱えば、アリアを緋緋神の呪いから救うことができるかもしれない。そしてその方法は、アリアの妹・メヌエットが知ってるかもしれない。
かもしれない、かもしれない、『かもしれない』だらけの、何の確証もない道だが――
他に何の道もない中、突き進むしかない。それだけは『かもしれない』じゃないのだ。
奇遇にも、俺の弟と、アリアの妹は――
今それぞれ、鍵を持ってるんだな。色金という扉の、その不可知の向こう側への。
「……おい、お前ら。外せ」
と、室内に散在していた部下たちにジーサードが言うと……
なりゆきを黙って見ていた白人のアトラス、黒人のコリンズ、そしてツクモやかなめも……俺の部屋から、縁側に出ていった。
そこで、俺から少し目を逸らしたジーサードが――
「さっきのパトラの話は、あべこべさ。頼まれたのはホントだが、俺は……兄貴を頼りに来たんだ。エリア51への道は、突破が困難だった」
恥ずかしそうに、そう言ってきた。
「――兄貴。力を貸してくれ」
再び俺の目を正面から見据えて、そう言ってきたジーサードに――俺は、
「……まあ、さっき言っちまったからな。『仕返ししてやる』って」
ボヤき気味に呟き、立ち上がる。
そして、嬉しそうに目を見開いたジーサードを軽く手で制しておく。
「だが警告しとくぞ。俺は今、極東戦役で眷族に属してた覇美――鬼の一味と敵対してる。お前はカナとの取り決めで、師団のメンバーになってたろ。眷族だった頃の孫に仕掛けた事実もある。俺と組むとなると、セットで極東戦役の休戦破りの汚名を着る事になるぞ」
「ハッ、知るかよ。あんなお遊び、知ったこっちゃねえ」
そう言うと思ったよ。基本、天上天下唯我独尊だからな。コイツ。
溜息をついた俺を前に、
「――アリアよォ。おめェがまた緋緋神になっちまったら、世界が危機に陥るみてーだな。第三次世界大戦がどうのこうのでよ」

俺と組める流れにテンションが上がってきたらしいジーサードは、アリアに軽口を叩く。
「俺は、そういう世界の危機を救うのが趣味でな。本来お前をブチ殺しゃいい話なんだが、兄貴の手前だ。それはやめとく」
「あら、ありがと」
額に怒りの青筋を浮かべつつも、ア払結界こと俺の実家では比較的おとなしいアリアもジョークに苦笑いで応じてる。
このアリアも、イギリスに行くワケだし――
俺が1人、日本でウロチョロしてても埒が明かないだろう。アリアが釘を刺してくれたとはいえ、外務省にマークされた身空で日本にいて別件逮捕でもされたらそこで詰む。
だからしばらく、アメリカもいいかもしれないさ。ほとぼりが冷めるまで、国外逃亡だ。
――俺はアメリカへ。アリアはイギリスへ。
これで、かなえさんの『別れなさい』という指示は図らずも実現される。
だが、一時期そうしておいた方がいいらしいんだ。
色金の話も、俺たちの気持ちも、あれもこれも本当なら。だから――
「どうあれ、やっぱり……しばらくお別れみたいだな。アリア」
「そうみたいね」
去年の4月以来、数多の激戦を共にした俺とアリアのパートナーシップは、それ以上の言葉もなく――
ただ万感の思いだけを込めた視線を交わす中、音もなく引き裂かれるのであった。

3弾 East meets West 世界の中心へ

アリアは帰国準備のため、武偵高に戻り――
俺は実家に泊まって、その武偵高にアメリカ行きの報告をしておいた。書類の上では、ジーサードがアメリカに持ってる会社の依頼を受けた事にしておけば大丈夫だろう。
というのも、『最低3日間』とだけ決まっており、日数に関わらず固定数の単位が与えられる修学旅行Ⅲとは違い――依頼による海外赴任は、その日数に応じた単位が基礎数として与えられるからだ。
その基礎数は、武偵高で平均的な生徒をやっていれば稼げる単位数に設定されている。
しかも遂行の検収、つまり活動の裏取りはまず行われない。海外となると難しいからな。
つまり極端な話、中間・期末のテストだけ日本で受けて、そこで赤点さえ取らなければ……後はカラ発注の依頼を受けて海外で遊んでようとも、ギリギリ進級できるシステムになっているのだ。東京武偵高は。
これは制度の穴といえば穴なのだが、そんな手でサボってればダメ武偵になっていずれ殉学・殉職する事は間違いない。働きもせず延々と海外にいるとなれば、ビザも切れるし金だって持たない。だから普通、そんな事をやるヤツはいないってだけの話だ。
なお、この報告をしておけば、俺がアメリカにいる事は校内ネットで分かるようになる。
みんなに黙って出ていく事にはなるが、極東戦役の休戦中に妙な動きをしてる俺と……師団のメンツは、あまりコンタクトしない方がいい。そのリスクは、これで減らせるのだ。どこへ行ったか不審に思ったとしても、検索一発で海外と分かるワケだからな。
で、待ったなしでニューヨークへの出発日とされた、翌朝――
「兄貴、この木彫りの熊をくれよ。こいつは美術的な味があるぜ」
「お兄ちゃん、この銀のエンゼルちょうだい！　あたし4枚持ってるんだよ！」
俺の私物から勝手に日本土産を見つくろいやがったアホ弟&アホ妹に「熊は2000円、エンゼルは500円だ」とせせこましい事を言い放った俺は、持てるだけの銃弾を持って部屋を出る。
で、トイレから廊下に出てきてた爺ちゃんに「ちょっと行ってくる。アメリカ」とだけ言い残し、玄関のスライド扉を開けると……
「うおっ……！」
「……」
驚いた俺にリアクションの1つも返さない、セーラー服姿の――レキが、いた。
気配が全くしないのに正面に立ってたもんだから、マジでビビったぞ。心臓に悪い女だ。
見た所、いつからかは知らんが……レキはずっと、そこで俺を出待ちしてたっぽいな。

狙撃銃を肩掛けしたオンナノコが門前にずっと立ってたとあっては、ご近所様にどんな噂を立てられるか知れたもんじゃないので……

「何しにきた、矢田ミント」

俺はちょっとムッとして、去年レキが遠山家に居候してた時の恥ずかしい偽名で呼んでやる。だが案の定レキはどこ吹く風で、

「私も同行します」

相変わらずの無表情、抑揚の無い声でそう言ってきた。

俺はゾロゾロついてきたジーサード一味を手で示し、

「いくらお前でも、これ見りゃ察しがつくだろ。俺たちは、今からゲーセンやコンビニに行こうってんじゃない。お前もルールを無視するタイプだろうから言うが、こいつは休戦破りの――」

そう言ってる途中で、

「――風が、焦っている」

きろっ。とアーモンド形の眼を向けてきたレキに、言葉を遮られる。

……出たか、『風』。

新幹線ジャック以降かなり静かにしてたみたいだから油断してたが、それはレキが神のように信仰していたもの。その盲信っぷりは、死ねと言われれば死ぬレベルのものだった。

風とレキは秋に俺のせいで物別れになってから、最近改めてデンパ通信を再開していたらしいのだが――

「ついて行けって言われたのか」

「はい。風は、キンジさんたちの先に居る存在に会いたがっている」

「自分で会いにいくよう、風さんに伝えろよ」

「……私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない……」

そのポエムも、久々に出ちまったか。

こうなるとレキがテコでも動かない事は、高1の1学期の時点で学習済みだ。

それに――京都で白雪・風雪に聞かされた話によれば――緋緋色金とも、今回俺たちが取りにいく瑠瑠色金とやらの巫女的な存在だったらしい。

あまり考えないようにしてはいたが、レキは、色金の関係者なのだ。

そのレキが夏休みの最終日に警告してくれていた、『あなたはアリアさんと結ばれてはならない』を……俺は……全く無視しなかったとは、言いがたい。アリアと俺とは友情を結び、絆を結び、パートナー関係を結び続けていたのだから。

もしもあの警告が、正当なものだったのなら――

俺がそれを妄言と決めつけたせいで、今の事態が引き起こされた可能性も無くはない。

そこの確認は出来ないが、だとすると、俺はレキに落とし前を付ける必要がある。

（……）

チラッと振り返って見れば、ジーサードたちはSランク武偵の狙撃手がチームに加わりそうなのを歓迎する空気もある。

「……レキお前、英語喋れるのか」

破れかぶれの俺が、なし崩し的に連れていくのをOKするムードで問いかけると――

「はい。Yes 少しLittle なら but」

十代前半に中国やロシアで殺し屋をやってた疑惑もあるレキは、俺よりリエゾンの淡いキレイな英語でそう答えてくるのだった。

結局、アリアも俺もフライトは今朝だ。

アリアは俺より一足先に、民間機で日本を発つらしい。

昨夜アリアからメールでそれを伝えられていた俺は、成田空港・第2旅客ターミナルの3F――国際線出発ロビーで、ジーサード一味およびレキと別行動を取る。

「アリアの見送りに行く」

と告げたら、なぜかニコニコ顔の額に血管を浮かべたかなめがついてきてしまったので、それを引き連れてやたら広いロビーを横断する。

ブリティッシュ・エアウェイズの搭乗券を発券するチェックイン・カウンターは3階の南端にあって、そこでは非常に見つけやすいピンク髪のアリアが……

……あれ？　アリアの隣に、武偵高のセーラー服を着た女子がもう1人いるぞ？

アリアより身長もツインテールも短いアイツは――アリアの戦妹。俺における風魔的な、つまり子分の、間宮あかりだ。荷物持ちをやらされてるんだな。

そして、もう1人お呼びじゃないチビがいる。だぶだぶトレンチを着て機嫌良さそうにしている、銭形乃莉だ。こっちは……アリアを警護してるムードだな。腹立つぜ。昨日は捕まえようとしたくせに、アリアがおとなしく帰国するとなったら手のひら返しやがって。

間宮をコキ使って荷物をカウンターに預けさせていたアリアは、俺に気づくと、

「キンジ」

ちょっと顔を明るくした。その不意打ちの笑顔が可愛かったので、俺が一瞬キョドった所に――

「おはようございますです、遠山キンジ武偵どの。武偵高さんに聞きましたですよー？　今日から、お仕事でアメリカへ行かれるとか？」

銭形が、ルンルンと割り込んできた。それはそれは危険で面倒な『アリア番』をしばし免除されるから、気分爽快！　って顔をしてる。

「昨日は大変な失礼をいたしましたです。ほれ。これは気持ちばかりの、お詫びの品なのですよ」

銭形が渡してきた茶封筒を……俺は、突っ返そうとする。

だがアリアが『受け取っておきなさい』という目をしたので、一応確認してみると――封筒には『本状の所持人を通路故障なくアメリカ合衆国へ入国させるよう、関係の諸官に要請する』と英語で書かれた紙が入っていた。外務大臣官房の角印も押してある。

これは……すぐアリアと日本で再会する事のないよう、俺の渡米をやりやすくしてくれてるつもりらしいな。お優しいこって。

まあ、ここでこれを突っぱねると外務省との不仲が決定的になる。頼るつもりはないが、ポーズとして受け取っておこう。

俺はそれをポケットに突っ込むと、もう銭形の事は無視して――

「――アリア、お前は昔イギリスで犯罪者を99人だったか逮捕してるんだろ。その中にはもう保釈や仮釈になってる奴もいるハズだ。大丈夫か、ボディーガード無しで」

と、パートナーの安全を気遣う。すると、

「あかりを連れていくわ」

ミニ女子高生のアリアは、隣のマイクロ女子高生こと間宮あかりを親指で示してくる。

「……何？」

俺が眉を寄せると――

「安心しなさい。この子、強いから。もうキンジじゃ勝てないかもね」

「バカ言え。探偵科で鈍ったとはいえ、1年に不覚は取らん」

「じゃあやってみれば。はいあかり、闘って」

ニヤリと笑ったアリアは、間宮のツインテールの片方を引っ張って俺に正対させる。

「えっ、あたしが遠山キンジ…先輩と、手合わせするんですか？　こっ、ここで？」

くりくりお目々でアリアと俺を見回す、身長139cmの間宮からは――

――コイツも1年にして修羅場を幾つか越えてきたのか、そこそこの力量が感じられる。

とはいえ、1年は1年だ。ヒステリアモードじゃない俺でも負ける気はしない。共通のご主人様の命令だし、アリアのボディーガードをやれるかどうかテストしてやろう。

俺はブリティッシュ・エアウェイズのカウンターにいるお姉さんをチラッと見てから、

「空港で銃は、みだりに出したくないからな……軽く、撫でてやるよ。ただ撫でられ方がヘタだと、俺の手が目や顎に入って痛いかもしれないぞ」

と、顔面を狙う前置きをし、

「あっ、そうだ。そういやこないだ探偵科で佐々木に聞いたんだが、お前……」

後ろ頭をポリポリ掻き、全く攻める気配を見せずに喋りながら――

――バッ！　と、間宮のスニーカーめがけて足払いを仕掛けた。

普通の1年ならこれで尻もちをついて、低い位置に来た延髄にもう一発のローキックでトドメを刺せる所なのだが――

「ひゃあっ」

驚いた声は上げつつも、間宮はしっかり俺の蹴り足に自分の足を合わせ、蹴られる力に自分のジャンプ力を合わせた。そして、バッ！

短いスカートを翻し、俺を猫宙気味に跳び越える。

間宮が背後に降り立つ足音と同時に、俺はさっき出さないとブラフを吹いておいた銃をクイックドローする。そして、振り返りざまに間宮に向けると――

（……？）

あれ、軽いぞ。俺の銃が。

弾倉が抜かれてる。

「……お返しします」

屈んでいた間宮が、背を伸ばしつつベレッタの弾倉を返してきた。

さっき跳んだ瞬間に、俺の服の中のショルダーホルスターからスリ取ったのか。

同様の技はワトソンも使うが、あれと同レベルの技量だな。やるじゃねえか。

返された弾倉を収め、銃を懐に戻すと……ホルスターに、獣による引っ掻き傷みたいな跡が残ってる。間宮の爪の跡だ。そこから読み解けたが、これは――

（遠山家の、『牛筒取り』……？）

俺が出会った日のアリアに投げられながら予備弾倉を取った、敵の携行武器をスリ取る技。その手指の軌道に、かなり似てる。

だが、俺が父さんに教わった牛筒取りは両手でやる技だ。爪の跡は片手。

（いや、『鳶穿ち』か……！）

その技名を思い出し、俺は目を丸くする。

技の継承時に教わったが、『牛筒取り』は遠山の金さんこと遠山金四郎――その父親・遠山景晋が他流からパクった劣化版の技。その元祖・純正版が、『鳶穿ち』だ。

相手が体の表面に携行してる物しか狙えない牛筒取りと違って、鳶穿ちは奥にある物を狙える技。つまり腸とか脳幹といった致命的な器官をヘソや口に指を突っ込んで抉り取る、エグい必殺技なのだ。

そしてその鳶穿ちを使っていたのが、遠山景晋の部下として抜け荷の取締りをしていた公儀隠密――忍者だ。

その隠密の名は、間宮林蔵。この間宮あかりと苗字が同じ。これは偶然じゃないだろう。

だが、その辺の事は……言わぬが花だな。

「……分かった。任せる」

と、俺も一応『牛筒取り』でさっき取っておいた間宮の短機関銃の長弾倉を返しながらそう言っておく。

間宮は間宮で、少しホッとした顔をしてるな。

「ロンドンには、あたしの戦姉もいるわ。あたしはあんたの風魔ぐらい放任されてたけど、イザという時には頼もしい先輩なの。戦闘力もSランクの折り紙付きだし」

アリアがそう言って、俺にウィンクしてくる。その先輩・アリア・間宮で、戦姉妹の三姉妹って事か。まあ、それなら過剰に心配する必要はないかもな。

「アリア……」

「キンジ。銭形がいるから多くは言えないけど、ハッキリさせとくわ。あたしたちは日本から出ていくけど、これは逃げているんじゃないわ。立ち向かってるのよ」

――緋緋神に立ち向かってる、という意味だな。

それは分かるよ。その通りだ、アリア。

「だから、『さよなら』じゃないわ。行ってらっしゃい、よ」

「そうだな。俺は去年、お前にパートナーとして選ばれた。それを俺は、流れだったとはいえ、受けた。受けたという事は、俺もお前を選んだって事だ。武偵がパートナーとして選んだ武偵に対して、『さよなら』は無い。それは死ぬ時だけだ」

「ありがとうキンジ。何かあったら、呼ぶからね」

「地球に穴掘ってでも駆けつけるさ」

「ふふっ。あんたなら出来るかもね。それ」

喋る中で、アリアの様子を最終チェックしたが――

うん、しっかりしてるな。これなら大丈夫だろう。

離れ離れになる直前で、俺も開き直った。まあ、地球にいるなら同じところにいるって事だ。

隣の駅にいるのも、隣の国にいるのも、渡る乗り物が違うだけで本質的には同じ。

「行ってらっしゃい、キンジ」

「お前もな。気をつけろよ」

よし、行こう。

と、回れ右しようとした俺の足が……しかし、動くのを渋る。

（でも、アリア。俺と、お前は――）

これが一生の別れになってしまう可能性も、無くはない。

それは事実だ。

俺を見上げてくるアリアと、アリアを見る俺は……

ただ黙って……ズルズルと、時間だけが過ぎていく。

「……」

「……」

「……早く行って」

ふと、アリアがその赤紫色の目を俺から逸らした。

そのアニメ声は、小さく震えていて……その目も、潤んでいる。

「行かないとあたし、泣いちゃうから……！」

とん、と、小さく突き放された俺の胸に――

切ない、痛みが走る。

ズルいよな。女の涙は。

それを出されちゃ、男は逆らえない。行こう。ここまでだ。

という俺の決意をよそに、

「はいアウトー！　お兄ちゃん！　フラグ増築してないで、ほら行くよ！」

「アリア先輩！　飛行機の中ではタダで映画が見れるんですよね！　楽しみですね！」

かなめ・間宮が、俺・アリアにそれぞれタックルしてきた。

むにゅんっ！　というハリのある感触にビビって己の腕を見れば、そこではセーラー服越しにかなめの、最近成長著しい、胸がッ、俺の肘～前腕を左右から挟み込んでいる！　たぶん白雪か理子だと思うが誰に教わったんだそんな荒技！

ていうかマズいだろ、この光景は……！

「――キンジ！　なっ何あんた、妹に鼻の下のばしてるのよッ！」

ほら来た！

「のばしてねえよッ！」

「あッ、あたしの監視が無い間に妹にヘンな事してたら、次会ったとき風穴だらけにして網人間にするからねッ！」

「人体には厚みがあるから網にはならん！」
と、俺とアリアは――
ついさっきまで感動的な別れのシーンだったハズなのに、かなめ&間宮による謎同盟の陰謀でケンカ別れになってしまう。
「お兄ちゃん、これからは兄妹水入らずでいこうね♪」
ちゅう、と、人前なのに俺のほっぺたにチュウしてきたアメリカ育ちのかなめちゃんを見て……ブチィッ！　と、アリアの頭から血管がキレる的な音が上がり、
「うるぁああ！　風穴膝かっくんッ‼」
――バオォォッ！　と、さっき俺が間宮に放った足払いの2兆倍ぐらいの威力があるアリアのローキックがなぜか俺めがけて振るわれ――
かなめと間宮のスカートのみならず銭形のコートもアリアの足が生み出した風圧で巻き上がる中、バキイイイッッ！　と俺の両膝にその殺人キックが命中するのであった。

本来は一方向にしか曲がらない事で皆さんおなじみの『膝』というものがフリーダムな曲がり方をしちゃった俺は、それでも太ももから上は動くので珍妙な走り方になりつつも……ひょこひょこ！　とダッシュでアリアから逃げ、
「おにーちゃーん、あれ買ってよー」
などと空港の売店のキャラメルを指さしてニコニコしてるかなめも、ゴマフアザラシのゴマちゃんみたいに腕に抱えて輸送してきた。アリアに銃殺される恐れがあったからな。
ていうかアリアめ！　今のは蹴るなら俺じゃなくてかなめだろうが。あと膝かっくんは膝の裏側を背後からプッシュするものであり、膝頭を蹴り折るのは膝ばっきんとでも言うべきものだッ。それと接頭辞の風穴も関係ねーしッ！
そんなツッコミ所だらけのラスト虐待を受けた俺は、＞側に曲がって逆関節的になっていた膝を、遠山家の整復術で通常の＜側に曲げ直し……
出国ゲートにいたジーサード一味&レキと共に、やたら甘いセキュリティーチェックで優先ゲートを通過できた。なにこの特別扱い。ファーストクラス以上だぞ。
かなめが第3男子寮から持ってきてくれていたパスポートを出し、その先の出国審査は普通に受けさせられたが――
「チケットは誰が持ってるんだ」
と尋ねた俺を、細かい金糸の刺繍をビッシリ入れたパンタロンスーツという狂った姿のジーサードが「兄貴は自分のチャリに乗る時、切符を買って乗るのか？」と一笑に付した。
……プライベート機で行くって事か。だからセキュリティーチェックも甘かったんだな。自家用機を自分でハイジャックするヤツはいないんだし。
「B―2爆撃機改に乗るのか？」

「それは兄貴がブッ壊しただろ」
と、遠山兄弟トークをしながら宝飾や香水の免税売店前を通過していくんだが……
ゾロゾロついてくる、この、ジーサードの一味。
白い学ランみたいな服を着た、金髪碧眼の大きな白人・アトラス。
虹色のスーツを着て、顔は包帯でグルグル巻きの、黒人のオカマさん・コリンズ。
女子中学生みたいな紺色ジャンパースカートにシッポは収納してるが、キツネ耳っぽい頭上のケモノ耳は丸出しのキツネ女、たぶん日本出身のツクモ。
あとここにはいないが運転手・兼・執事のお爺ちゃん、アンガス。他にも右と左で瞳の色が違う銀髪ロングの女とか、弾痕が顔面にあった大男も品川で見た記憶がある。
（リーダーも含め、ハデな連中……というか、多様な連中だよな）
白人・黒人・黄色人種・キツネ人間、健常者・障害者、性的マイノリティー、老若男女、なんでもござれだ。
その辺の話をジーサードに振ると、
「俺は使えるヤツは、人種も身分も年齢も性別も過去も、一切問わねェ。だがその代わり、使えねえヤツはたとえ将軍でも大統領でも切る」
と、徹底実力主義的なご回答があった。なるほどねぇ。
だが、空港を行き交う日本人たちはとにかく目立つコイツらをチラチラ見てくるので、個人的には皆さん光屈折迷彩で隠れていただきたい。
実際そうと言えばそうなんだが、俺も仲間だと思われて奇異の目で見られてるし。
（この状況で、友達とかに出くわしたくはないな）
友達が少ないくせに、俺がそんな事を思ってたら……そこに……たったったぁー！
「――ひほふひほふー！」
ユナイテッド航空・搭乗口65番ゲートめがけて、リュックを背負い、武偵高のセーラー服を着たチビっ子が俺たちを走って追い越していく。
間宮にもチョイ似のあの子は、平賀さんだ。最近、俺の周囲はチビっ娘フェアーだな。
「おおー!?　とーやまくん！　はややはほへへひふへすのはー！」
食パンをくわえた平賀さんは、その場で足踏みして俺に何か言ってる。付き合いも長いから分かったが、『あややはこれで行くですのだ』だな。さっきのは『チコクチコクー』。
少女マンガでよくある食パンダッシュを成田空港で見せちゃうあたり、さすが発明家はオリジナリティに溢れてるよ。
「俺もアメリカだ。何かあったら頼むよ」
苦笑いでそう言った俺にVサインしてから、平賀さんは最終搭乗案内中の65番ゲートにヘッドスライディングで入っていった。行き先は――ワシントンDC・ダレス国際空港。
平賀さんはワシントン武偵高の装備科に交換留学が決まってたからな。

これから、その事前準備に行くらしい。グッド・ラックだ。

「兄貴、こっちだぜ」

俺が立ち止まって平賀さんを見送ってると、ヤキモチを焼いた感じでめんどくさい弟が袖を引っ張ってくる。

ので、改めて皆と南ピアを歩き、地上階のラウンジまでエスカレーターで降りる。

そこで恭しくお辞儀して待ってた初老の男は、ご一つ揃いのスーツ姿のアンガス。

ジーサードの運転手だ。

「サード様。キンジ様。お待ちしておりました。X—19Cへご案内します」

と言うアンガスに促されて、ラウンジから出てワゴンバスに乗り込み……

ボーディング・ブリッジを使わないで乗るらしいジーサードの自家用機へと、航空機用誘導路を横目に進む。

間近で離陸していくボーイング747の迫力に、目を奪われていると——

「着いたよ、お兄ちゃん」

かなめに肩をつつかれた。そこでバスが停車したので、ジーサードを先頭に一同が順次アスファルトの駐機領域へ降車する。すると、そこには……

V—

「——っ……22　……か？」

ダークシー・グレー色をした、飛行機とヘリの中間みたいな航空機が駐機していた。

V—22——オスプレイとは、回転翼を上に向けて垂直離着陸を、前に向けて水平飛行を行うティルトローター方式の航空機。

ヘリのように滑走路不要で、固定翼機のように高速で航続距離も長い、『人類の飛び方を変える』とさえ言われた夢の乗り物だ。

だが、コイツは……俺が資料で見た諸元より、倍近いサイズ。ローターを含めた全幅は40mはある。主翼に並ぶプロペラの数も2発じゃなくて4発。Q　T　R機だ。全体のシルエットはどちらかというと、C—130の方に近い。

X—19

「C　だ。さっきアンガスが言ったろうが。Xプレーンぐらい全部知っとけよ！」

俺に怒鳴って乗り込んだジーサードに続き、部下たちは機体側面のドアから次々と乗り込んでいく。それにレキが続き、ドアからはかなめが、

「寒いから早く乗ってよー」

と、手招きしてくるが……それ、一般の旅客機とは似ても似つかぬ形状で……乗るのは、ちょっと勇気がいるな。見てる分には、カッコイイけどさ。

だが確かに外は寒いので、えいやあで俺も乗り込む。

やはりAC—130の胴体を流用したらしいサジタリウスの機内は広く、ジーサードの趣味な

のか高級ホテルのスイートルームみたいな内装が施されていた。
　希少なキューバ・マホガニー材の彫刻で飾られた壁には、ローマの円形闘技場を描いた油彩画。それを背にジーサードが足組みして座るのは、ワインレッドの地に金糸の刺繍をふんだんに施したヴェルサーチのソファー。足下のペルシャ絨毯もフカフカだ。
「アラスカ上空にて空中給油を施し、直行便でJ・F・ケネディ空港まで参ります」
「おう」
　自分の胸に曲がった腕を添えて伝えたアンガスに、レコードを選んでいたジーサードが一言応え……
　アンガスが操縦室へ向かったので、俺は、その後についてコクピットを覗き込む。
「車やヘリを運転してるのは見たが、これも操縦できるのか？　その、気を悪くしないで欲しいんだが……アンタは、動かせる腕の範囲が健常者より狭いように見える。ティルトローター機は操縦が難しいんだろ。よく、事故るって噂も――」
「ご安心下さい。私はサジタリウスでの総飛行時間が１０００時間ほどございますので。巡航はアトラスと交代で担当しますが、彼も３５０時間は飛ばしてございます」
　と……インカムを付けて複座の片方に座ったアンガスは、妙に嬉しそうな顔をしてるな。表情筋が一部硬直してるので、ニコニコなのかニヤニヤなのかは分からんが。
「……何が嬉しいんだ？」
「いえ。昨日・今日は、とてもいいものを拝見しましたので」
「いいもの？」
　俺が小首を傾げると、アンガスは俺の方に首を曲げて、
「何でもご自分でなさろうとするサード様が、キンジ様を――人を頼られたので。これは珍しいものを見たと」
　ちょっとヒソヒソ声で言った。が、それを地獄耳で聞いてたらしいジーサードは、
「違っげェよ！　兄貴は放っといたら無職になるから、コネで仕事をやっただけだ！」
　がすんがすんっ、と足を踏み鳴らして怒ってる。真っ赤になって。
「それはそれは。相変わらず、お優しい御方でありますなあ」
　……どうやらアンガスは、ジーサードをイジるのが趣味みたいだね。命知らずな。
「優しくないだろジーサードは。アンタとも昔、戦ったんだろ？　それで……そんな体にして」
　弟がやった事なので、俺がちょっとアンガスを気遣うと……
「いえいえ。その時も、お優しかったですよ」
「どこがだよ」
「殺さなかったですから。私を。私はＣＡＧで上から単独強襲を命じられ、殺すつもりで行きまし
したというのに」

そのアンガスの発言に、俺は目を丸くする。
こいつ、元・CAG――第1特殊作戦部隊デルタ分遣隊員だったのか。
それが今や、ジーサードの運転手とは。
デルタフォースとは、世界最強とも言われるアメリカの特殊部隊。そこで選り抜かれて単独でのジーサード暗殺を命じられたとなると、悪魔みたいな実力の持ち主だぞ。
だがそれも、1人で小国なら滅ぼせると謳われた人間兵器には敵わなかったって事か。
（となると……）
いま俺の後ろで、爽やかな笑顔でキャビンからミートパイを取り出してるアトラスも、シャンパンクーラーを覗き込んで鼻歌交じりに飲物を選んでるコリンズも、出所は推して知るべしだな。グリーンベレーやSEALs辺りだろう。かなめとハンディ・カラオケで1人足りないパフュームを歌い始めたツクモが陸自中央即応集団から来たとは思えんが。
サジタリウスはヘリ状態で成田空港を離陸すると、1分後に遷移飛行に移り――
そこからは、ありふれたターボプロップ機と同様の巡航飛行を始めた。アンガスの操縦技術は超一流で、ヘタなバスよりも揺れない。
……なんか、案ずるより産むが易しだったな。ティルトローター機。
レキは体育座りで等身大フィギュア化。アトラスはスマートフォンで、母親とチャット。イスラム教徒らしいコリンズは床で身を丸め「アッラーは偉大である……」と礼拝の唱句。かなめとツクモは羽子板を出して、機内で羽根突きを始めたよ。ジャマくさ。
電子レンジで温めたレトルト料理を食べたりして、何時間か飛行した後――
「――アンガスとアトラス以外は、就寝。NYには東部標準時1445に到着予定。到着次第、拠点に移動して兵装の調達と整備。以上ッ。行動！」
まだ眠くなる時間帯ではなかったものの、ジーサードが機内にそう命じた。
部下たちは「おう！」と唱和し、折り畳みベッドやフトンを胴体後部扉の方で広げる。
時差ボケ経験のある俺には分かるが、これはその予防に寝溜めをしとけって事だな。
普段は放任主義でも、頭の中では部下の体調管理を忘れない。リーダーシップあるなぁ、サード様。
……赤い常夜灯だけが灯された、薄暗い機内で……
俺は借りた三つ折りのマットを広げて、そこに横になる。
だが……やることが無くなると、アリアの事が気になってきた。
アイツは今、イギリスへ向けてロシア上空あたりを飛んでるんだろうな。
地球を、俺とは逆の方向へ。
（……）
どうしてるかな。身の回りのことは間宮にやらせてるんだろうが、体は大丈夫だろうか。ま

た、発作を起こしたりしてないかな。
と……寝つけずに、考えていると……
最後まで起きていたコリンズが、スーツをクローゼットにしまう音がした。薄闇の中で見れば、顔を覆っていた包帯も外している。
タンクトップ一枚になった、その細マッチョな黒い肌には――全身に、刃物……いや、素手で引き裂かれたと思われる傷痕がある。顔面にもだ。手塚治虫のブラック・ジャックみたいに。
「……コリンズ、それ、ジーサードにやられたのか」
「いやぁんエッチ」
声をかけ、俺に肌を見られていた事に気づいたコリンズが女みたいに体を手で隠す。
「何よう。そんな目で見ちゃダメ。人がビックリしないように隠してるだけで、アタシはこの傷が好きなんだから。なんたって、アタシの王子様と戦った人生の記録なんだもの」
ソファーに戦国武将座りしたまま腕組みして寝てるジーサードを見ながら、コリンズは俺のマットに女の子座りしてくる。
そして視線はジーサードに向けたまま、俺に――
「……心配なのね、アリアちゃんの事」
「……っ……」
いきなり本心を見抜いた発言をしてくるので、俺は少し赤くなってしまう。
「ツライわよね。今まで一緒にいるのが当たり前だと思ってた子と、離れ離れになっちゃうのって。アタシにもあったわ」
コリンズは目を閉じ、「まあ、アタシのは悲恋ばっかりだけど」と独り言してから……
「でもね、いつもベタベタ一緒にいるだけが愛じゃないのよ。離れたり、身を引くことで愛するってこともあるの」
ニッコリ微笑んで、優しい手つきで俺の頭を撫でた。
俺はそういう話を避けて生きてきたから知らなかったし、あまり興味も湧かないが……ふーん。そういうのもあるのか。まさかオカマさんに教わるとは思わなかったけどな。
「……愛とかって。分かんねーよ」
俺がその手を押しのけてソッポを向くと、コリンズは「やーんカワイー」とか言いつつ俺の背中の向こうで横になった。
「それにねキンジ君。少し時間をあけるのも恋愛のテクニックよ。少し離れてた後は盛り上がって、今まで超えられなかった恋のハードルを越えられる事だってあるんだから」
「そ、そんなんじゃないッ、俺とアリアは……！」
「しーっ。みんなサードの命令で就寝中なんだから、お・し・ず・か・に」
トーク技術では俺より何枚も上手らしいコリンズに、あしらわれたが……
実際、アリアが医科研病院に軟禁されたのを取り返した後は、絆が深まった気もする。

緋緋神の件を乗り越えれば、きっと俺たちはもっといいパートナーになれるんだろう。

……きっと。

（そうなれば、アリアから俺への発砲回数も1日5回ぐらいに減ってくれるかな……）

そんな事を考えて複雑な気持ちになりながら、俺は安定感のあるX—19のローター音を子守歌がわりに眠りに落ちていくのだった。

メルカトル図法の地図上だと、東京からニューヨークへは太平洋を渡るのが最短距離に見える。だが地球は球形なので、実際はそうではない。もっと北回りになるのだ。

サジタリウスも俺が寝てる間にアラスカ上空で空中給油を行い、カナダからアメリカに入っている。

森しか見えなかった眼下の景色に飽きていた俺は、機内の洗面所で歯を磨いていた所でかなに「見えたよ。マンハッタン」と聞かされて窓に向かう。

電車から外を見る子供のように、窓ぎわのイスで膝立ちしていたかなめの肩越しに——

——俺は初めて、ニューヨークを見た。

アメリカ合衆国最大の都市・ニューヨーク。その中核を成すマンハッタン島は、南北に細長い川中島。ハドソン川の河口付近にある81㎢の中洲の上に、世界の中心はあるのだ。

北側上空から鳥瞰した、その第一印象は……思ったより、緑が多い。マンハッタン島の中央に、大きな公園があるからだ。あれが映画で見たセントラル・パークだろう。

だが、その南側に聳えまくっているのは、数え切れないほどの高層ビル群。香港と違い中心に行くほど高いビルがある印象で、パッと見、大きな山に見える。だがあれは全てが何億ドル、へタしたら何兆ドルもを生み出すビルを束ねた世界最強の経済装置なのだ。

キラキラと黄金色に輝く川面に囲まれたマンハッタン、霧なのか排気ガスなのかで少し煙って見えるその上空を飛び越えると——

「間もなく、遷移飛行。5分でケネディ空港へと着陸いたします」

待ったなしで、操縦席からアンガスがアナウンスしてくる。

現地時刻は、15時半。ここは東京よりやや高緯度だが、太陽の位置にさほどの違和感は無いな。キンジ流の時差ボケ対策として、腕時計を合わせる際に日本がいま何時なのかはもう見ないようにしておく。時間と共に、意識を切り替えるんだ。日本から、アメリカへ。

サジタリウスはチャーター機扱いで、マンハッタン南東に在るJ・F・ケネディ空港のヘリポートに普通に着陸させてもらえた。驚いた事に更に南東には専用の格納庫まであり、俺たちはそこからまたバスでターミナル1へ移動する。

広く天井の高いターミナルは、ここも香港国際空港、ドゴール空港、スキポール空港と同様に薄暗かった。世界的には、煌々と明かりを灯す羽田・成田の方が珍しいんだな。

アメリカ内外からの観光客がゾロゾロ集まる、そこで……日本国籍の俺とレキ、それと日本の偽造パスポートを持つかなめは、アメリカ国籍のジーサード達とは違う入国審査の列に並ばされた。

指紋と顔写真の撮影があるせいか、蛇行する審査待ちの列はノロノロ進み……

俺たちの後ろにも、他の便の乗客たちが大勢並んでいく。

見ればすぐ、入国者は観光客だけではない事に気づかされる。商用で来てるスーツ姿のビジネスマン。すぐ後ろの黒人女性たちは出稼ぎに来たなどと喋ってる。バルセロナ便で来たエキセントリックな格好のカップルは、芸事で身を立てにニューヨークへ来たらしい。

ここを新天地と定めてやってきた人たちは、やる気に満ちている。彼らがうまくいくかどうかは、分からないが……ニューヨークは、夢と希望を抱く者たちの集う街なんだな。

待つこと15分、俺たちの番がようやく来て――

ゼロハリのトランクを提げたレキも、わざと日本語訛りの英語で喋るかなめも、30秒もかからず入国審査をパスして出ていった。そして、次は俺の番だ。

スナック菓子を食べながら俺のパスポートを受け取った、太った白人女性の係員は――旅券番号を端末に入力した途端に画面の色が変わったディスプレイを見て、急に目つきを鋭くした。そして食べるのをやめて、俺をシリアスに見据える。

「――入国の目的は？」

おっと……イギリスみたいに、アメリカも俺を準危険武偵リストにでも載せてたか。

まあ、さもありなんだ。俺もあんまり素行のいい方じゃないんでね。

少なからず俺をマークしてる感のある彼女に――

「公務だよ」

俺は銭形にもらった『お詫びの品』こと、外務省からの入国要請書を突き出す。本当はいま思い出したんだが、さも最初から見せるつもりだったような素振りで。

俺を見据えたまま紙を受け取った係員は、

「……」

後ろで待ってる皆さんに申し訳ないぐらい、しっかりそれを熟読し……考えた挙げ句、カウンター上で黄緑色に光る指紋読取機に指をかざすよう顎で示した。さらに、安っぽいデジカメで俺の顔写真も撮る。

同時に宿泊先や滞在期間を訪ねられたので「弟の家。仕事が終わったら帰るよ」などと答えると――彼女は俺にパスポートと手紙を返す際、すでに俺から視線を逸らしていた。

そして、「次の人（Next）」と俺の後ろに声を掛けている。

どうやら入国OKらしい。

微苦笑して、皆の待つ入国審査場の先へ出ると――

「はいお兄ちゃん、ウェルカム・ドリンクだよ」

ちょっとドキドキして渇いたノドにはありがたい、缶コーラをかなめがくれた。
「ありがとな」
売店や郵便屋のある入国ロビーで、本場のコカコーラを口にするが……
うーん。日本のと同じだな。まあ、そりゃそうか。
外の気温は東京より低かったが、今日は陽も照っているので耐えられるレベルだ。
だが寒がりのツクモはダッフルコート、マフラー、毛糸の手袋・帽子でモコモコ状態。防寒性もある武偵高の冬制服を着た俺・レキ・かなめはそのままでも平気だが、その他のジーサード・味も伊達の薄着で寒そうだ。
白い息を吐きながらアスファルトの道を渡り、駐車場に入ると……
「どれがいい、兄貴」
出、出たー！　ジーサードの趣味、スーパーカー。
アニメっぽい流線形デザインの車が、5台ズラリと並んでるぞ。
自動車オタクの武藤に聞かされた事があるから辛うじて分かるが、変形機構があり時速４００kmだかで走れるというブガッティ・ヴェイロン。真っ赤なフェラーリ・エンツォ。サーキットが似合いそうなマリンブルーのパガーニ・ゾンダ。ミニ四駆をそのまま大型化したような、黒いバットモービル風の謎カー。純白のロールスロイス・ファントムが一番マトモに見えちゃうから空恐ろしいね。
「走りゃどれでもいい」
という俺の回答に、ジーサードが激しくイラッとした顔をするので……
「……こんな高級外車に乗ってたら心臓に悪いだろ。日本車は無いのかよ？」
と、どれも乗りたくない車を仕方なしに見回していると――
「コイツは日本製だぜ。光岡オロチだ」
と、最も中二病的デザインの巨大ミニ四駆に引きずり込まれた。
「……光岡自動車かよ、これ。言われてみりゃそうかもしれんが、原形留めてねーだろ。何なんだよ、これのケツの左右についてた穴は」
と、やむなく助手席でシートベルトを掛けていると、
「ロケットブースターだ。ＮＯＳ燃料を併用すればマッハ０・５は堅いぜ」
なんでそんなん搭載してんだよ……ていうか、車の速度をマッハで言うヤツ初めて見た。
しかし、兄弟は海を隔てても縁があるもんだな。
俺の手甲と同じ大蛇を、別の形で弟も飼ってたか。
右ハンドルのシートについたジーサードはゴキゲンで、ウォンッ――！　と、載せ替えたと思われるＶ12オーバーのエンジン音を立てた。
「悪ィなオロチ。色気のねぇパッセンジャーでよ」

独り言のように喋ったジーサードに、
「お気になさらず、サード様（Don't mind 3rd）」
正面のインパネで蛍光グリーン光のレベルメーターが上下し、男声の電子音声が答えた。今後iPhoneに載せられるというウワサの音声秘書機能（SIRI）みたいな感じで。
「喋るのか、この車」
「はい、キンジ様。キンジ様の事はサード様にお伺いしておりました。お乗りいただけて光栄です」
ナイトライダーの人工知能（K.I.T.T.）みたいな機能に驚く俺と……隣でドヤ顔をするジーサードは、アンガスが先導するロールスロイスに続き、かなめ・レキを乗せたブガッティ、ツクモの運転するパガーニ、アトラスとコリンズが乗るフェラーリを従えてバンウィック高速道（エクスピー）に入っていく。まるでスーパーカーの大名行列だ。恥ずかしいなぁ。
「この光岡（みつおか）オロチも、元々は俺を殺しに来たんだぜ。人工知能（AI）の分際でよォ。ハハッ」
「その節は失礼いたしました」
などと、プログラムまで味方に変えちゃうどこまでもカリスマなジーサードは――
故郷のアメリカに帰ってきて、のびのびしてる感じだな。
フランスでのジャンヌもそうだったが、誰（だれ）にでも故郷はあるんだ。
（アリアも……今ごろイギリスで一息つけてるのかな）
明瞭（めいりょう）な英字で描かれた標識や看板、高速道路の左右に点在する焦げ茶色の煉瓦（れんが）で建てた低層マンションなどを旅行者気分で眺（なが）めていると――
だんだんマンションが中層になっていき、建造物も新しい物が増え、過密になってきた。交通量も増えてくる。そして、
「只今（ただいま）、ブルックリン橋を通過中です。これでイースト・リバーを越え、マンハッタンに入ります」
というオロチのセリフ通り、車は片側3車線の巨大な橋を渡っていく。
橋の茶色い鉄骨がジャマで渡河（とか）中はよく見えなかったが、橋を渡り終えると急に視界が開けて

――もう、ここはマンハッタンだ。
いま俺は、ハリウッド映画で何度も見たニューヨークにいる。
アメリカの心臓部、都市の中の都市、世界の首都をこの目で見る時が来た。
（そう思うと……けっこう、ドキドキするな）
川沿いのFDRドライブから見上げると、ロウアー・マンハッタンのビル群は香港（ホンコン）ほど過密ではなく、真新しい建物が多かった。この雰囲気は……パリともアムステルダムとも、九龍（ガウロン）とも違う。強（し）いて言えば、東京に似てるな。だが、歩道を行く人々が全員アメリカ人なのはともかく……何かが決定的に違うんだよな。何だろう？

俺が小首を傾げていると、ジーサードがモトローラの携帯をBluetoothで車と繋ぎ――
「――おいアンガス。道が逆だぞ。北へ行け」
『おや。間違えてしまいました』
車内スピーカーで、先導車と通話している。
「ニューヨークじゃ地元民でも迷うのか？」
「アンガスがNYで迷うハズはねェさ……アイツ、わざと遠回りして、兄貴に観光させてやろうとしてやがる。ほれ、見とけ。自由の女神だ、マンハッタンの南岸から見えるリバティ島には」
尋ねた俺にジーサードが親指で示した窓の外、マンハッタンの南岸から見えるリバティ島には世界一有名な女神像が、黄金のトーチを掲げて悠々と煌めいていた。
――緑青色の横顔を向けた、自由の女神――
アリアを脅かす、緋緋神……別の女神と戦う身としては、彼女にこの国での戦いを加護してもらいたいところだな。拝んどこう。

ジーサード一味の車列は、それからウォール街、グラウンド・ゼロを通過し、タイムズスクエアでは電光掲示板や巨大ディスプレイに照らし出された。
それら名所の解説は、オロチが電子音声で一つ一つやってくれる。
ハリウッド映画で見た光景の中、少なからぬ感動と共にブロードウェイを進み――時折歓声が聞こえてくるヤンキースタジアムを回り、車はミッドタウンの摩天楼に戻っていく。
歴史のある超高層ビル群の谷間を、どこまでも走るうちに……
（なるほど。そういうことか）
俺はさっき感じた、ニューヨークの東京との違いを理解した。
高層ビルは東京にだってある。だが、それがここのように地の果てまで連なっているという事はない。上空から山のように見えた通り、摩天楼のビル群は、東京を圧倒的に凌ぐ『体積』を持っているのだ。街が全部、新宿の高層ビル群になっているようなものだ。
（これには……アメリカの経済力を感じさせられるな）
大地に出来た亀裂のようなビルの合間へと、視線を下げれば……
そこはエネルギーが満ちあふれた、ニューヨーカーたちの世界。
人混みは留まることなく動き続け、煌びやかなショーウィンドーやオフィスがひしめき合っている。コンビニはあまり見当たらないが、その代わりに小さなよろず屋みたいな店が角・角、辻・辻に建って風景に溶け込んでいる。
あと――やはりここも貧富の差が激しく、日本より不衛生なのも見てとれた。大通りの合間には、失業者らしい男たちがたむろしてる汚いピザ屋がある。いわゆるネットカフェ、1$インターネット屋も窓の中はあまりキレイじゃない。

外気を若干取り入れてるらしいエアコンからは、排気ガスとケチャップのニオイが漏れ入ってくる。その辺は何となく、イメージ通りだな。

「ジーサード、後でアンガスを怒るなよ。このドライブ、俺は嬉しかったから。とはいえ観光に来たワケじゃないからな。これから、どうするんだ？」

「ニューヨークには幾つか拠点を持ってるが、兄貴はＶＩＰだ。本拠地に案内するぜ」

「そりゃどうも」

「そこで装備を調える。アメリカは州や細けェ行政区ごとに、親俺派と反俺派がモザイクみてーに分かれてるからな。中間派の多いニューヨークに入ったのも、それがあるからさ。エリア51に向かう途中、俺がお尋ね者になってる所も抜けるし――何より、マッシュだ。またヤツと闘るからには、部下全員の武装とコンディションを整える必要がある。兄貴もだぜ。俺もこのカスリ傷に赤チンぐらいは塗るさ」

――米国家安全保障局（ＮＳＡ）の、マッシュ・ルーズヴェルト。超先端科学兵装（トランサンデ エンジェ）のモンスター。猪突猛進（ちょとつもうしん）な性格のジーサードが、こうも警戒するとなると――

よっぽどの豪腕だな、きっと。超先端科学兵装という話から類推するに……アトラスが表参道で着込んできたような強化外骨格（パワードアーマー）の、さらに大型版……ガンダムみたいなヤツか？

だが相手がマクロスだろうがエヴァンゲリオンだろうが知った事か。やってやるさ。

その向こう側――米軍基地にあるという、瑠瑠色金（ルルイロカネ）を手に入れるためにな。

4弾　ニューヨーク（ジーサード・リーグ）の男

車列は映画『キングコング』で巨大ゴリラがしがみついていた、エンパイア・ステート・ビル……そのすぐそばで競うように天を衝く、比較的新しい高層ビルの前で停車した。

ゴシック様式のエントランス、その入口上部には『G』と『Ⅲ』の字が組み合わさった巨大なロゴマークが彫刻（ちょうこく）されている。

「これ……もしかして……」

光岡（みつおか）オロチ改から降りた俺が、そのロゴを指してジーサードを見やると、

「俺のビルだ」

やっぱり……！

「お前、マンハッタンにビル持ってんのかよ……っ」

「こんだけニョキニョキ生えてんだ。1本ぐらい俺のでもおかしくねーだろ」

「その感覚がおかしいんだよお前は。ほんと、天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）だな」

「好きな言葉だ」

と、部下たちを引き連れたジーサードと俺は横並びでビルに入っていく。入口の上には、星条旗と日の丸が並んで風に揺れている。聞くまでもない。ジーサードの命令で、ここにいた部下が俺（おれ）を歓迎するために掲揚（けいよう）したんだろう。

（そういや俺とジーサードは兄弟でも、国籍が違うんだよな……義姉（パトラ）はエジプト出身だし、国際的になってきたな。遠山（とおやま）家も）

などと考えつつ歩く俺の後ろでは「ジーサードビル、久しぶりだぁー」などとやっぱりそんな名前だったこのビルに、かなめがレキの手を引いてスキップで入ってくる。

天井のやたら高い、広いエントランス・ホールには――

壁際の床に、幾（いく）つものブロンズ手形が埋（う）め込まれていた。

それぞれの隣に彫られた名前や、概説を見てみると……どうもジーサードと友好関係にあるアメリカのヒーローたちの手形らしい。うちの弟はコネ広いなぁ。超人界隈（かいわい）に。

「おっ、ヒノ・バットの手形だ。ジーサードお前、知り合いなのか」

ヒノはアメリカで最も有名な武装探偵の1人。覆面戦士だから顔を見た者はいないが、前妻が日本人。その娘は東京武偵（ぶてい）高の強襲科（アサルト）1年に在籍しており、蘭豹（らんぴょう）のお気に入りだ。

「ああ。そこに手形があるのは、俺でも100%勝てるとは言い切れないヤツとして評価した友人たちだ」

「何で誰（だれ）に対しても上から目線なんだよお前は……ってオイッ？　ここの床……」

Kinji Tohyama――俺の名札もあるぞッ？　手形は無いが。

「後で手形取らせてくれよ、兄貴。ヒーローとして、ここに永久に名を遺（のこ）させるからよ」

「ふざけんなッ。俺はこういうのじゃなくて、普通の武偵になるんだ。名札を外せッ」

と、俺が弟をガミガミ説教してると……

「おかえり、サード。負傷はけっこう回復したみたいだね。留守中、この辺をＮＳＡとかＣＩＡが嗅ぎ回ってたよ」

――割り込んできた少女の声に、それを中断させられた。

振り返ると、そこにはこれも見覚えのあるジーサードの部下……右と左で瞳の色が違う、ぱっつん前髪の銀髪少女がいた。

「守備役お疲れ、ロカ。嗅ぎ回ってたのはきっとマッシュの手先だね。好きにさせておく方針だけど、イヤだね」

と、ビルに入ってやっとマフラーを外したツクモに言われた白人の美少女・ロカは……長い後ろ髪もワンレングスに切り揃えていて、蝶の形の髪飾りを頭の左右に付けていた。これも蝶形のチョーカー・ネックレス、２段レイヤーの短いフレアスカート、ガーリーなプリントが裏地に施された膝丈コート、と……

全体的に、オシャレな感じの子だ。表情はネクラそうだけどな。

「――ネクラはあんたの代名詞でしょ」

きろっ、と青＆赤の瞳でこっちを見てきたロカに、俺はちょっと面食らう。

今、俺……口に出してたか？　考えてたこと。

……そんな薄気味悪いロカと一緒に、車を片付けに行ったアンガス以外の一味はロビー奥のエレベーター・ホールへと向かう。

そこには腕組みして仁王立ちした、ジーサードの肖像画があった。自分大好きだなぁ、ジーサードは。こんな、自分を美化した絵まで飾りやがって。俺なんかフェイスブックにアップされたｊｐｇ画像を延ばした写真を家に貼られてんだぞ。しかも女装したやつ。

ジーサードビルは大体の階を色んな企業に貸していて、その賃料だけでも莫大な収入があるらしい。富める者はこうして、さらに富める者になっていくんだな。

そのビルの１１３階～１１５階の最上階層が、全部こいつら『ジーサード同盟』の住居。総部屋数は52部屋、加えて屋上にはジーサード専用のペントハウスときたもんだ。わけがわからないよ。

各部屋はどれも多様なスタイルのスイートルーム状態で、天井が高くて落ち着かない。

その、３つもあるダイニング・ルームの１つで――

「「わーい！」」

かなめとツクモが女児っぽく英語でハモって、テーブルにダッシュしていく。そこにはロカが買ってきてたらしいハンバーガー、チーズバーガー、ビッグマック、クォーター・パウンダーといったマックが山積みになっている。バケツみたいなＬＬサイズのコーラ、ミルクシェーク、ケーキみたいなクッキー、アップルパイ……

席につくなり、女子どもはそれらを一気食いしていく。

（……この国に一番欠けてるものは、食育かもな……）

日本のより2回りは大きいマックポテトのLを黙々と吸い込み始めたレキにも、早くもアメリカの悪影響が見られる。

「兄貴も食っとけ。腹が減っては戦が出来ぬ、だぜ」

後から来たアンガスが引いたイスにドカッと掛けたジーサードも、ビッグ&テイスティなご当地バーガーを食べ始める。

「いや。好きだけどさ、マック。毎日3食これとかはよせよ？　かなめの教育に悪い」

お小言して、確かに空腹だった俺もビッグマックを1つ食べると――やっぱりほとんど日本と同じ味だ。本場感は無いが、逆にちょっと安心感があるな。安定のマックだよ。

食事がファーストフードでもジーサードの傍らに立って御用聞きをしているアンガス、ガタイの割には小食なアトラス、宗教上の理由か包み紙のハラル・マークを確認してから食べてるコリンズ……食事1つさせても、みんな個性的だな。コイツらは。

「で、いつ出るんだ。瑠瑠色金を取りに」

サイフォンのコーヒーメーカーでアンガスが上手に淹れてくれたブラック・コーヒーを傾けて、俺がジーサードに尋ねると――

「全員の休息とコンディション調整、兵装調達とサジタリウスの整備に3日ってとこだな。兄貴用のプロテクターも、今夜イニシャライズすりゃ3日後には装備できるぜ」

ジーサードはほぼ省略しているものの肩部には装着している、先端科学の鎧をコツンと自分の指で弾いてみせた。それ……俺にも着ろっていうのかよ。イヤだなぁ。

イヤだと言ってもすぐ引き下がる男ではない弟に連れられて、食後、俺とレキの新参者ペアはアンガスの部屋に入らされた。

アンティーク調の家具でセンス良く統一された、執務室みたいなそこで……

「サード様の予備ではございましたが、さすがご兄弟。少しの調整で済みそうですな」

俺はブーツみたいな脚部甲や、平賀さん製オロチみたいな前腕甲を仮装備させられる。

一流のテーラーみたいな手つきで俺の手足や胴体のサイズを計るアンガスは、武偵高でいう車輌科と装備科の仕事を両方できる人物らしいな。

しかし、このプロテクター……スゴいぞ。

羽根のように軽いし、動きが制限される事もない。それでいて完全防弾。

手甲を9㎜弾で撃たれるテストもあったが、はたかれた程度にしか感じなかったし。

防弾制服は極微細なバネ構造をしたＴＮＫ繊維で着弾の衝撃を分散させる原理の製品だが、それよりずっと分散効率がいいんだろう。

「どうだ兄貴」

「ズルイぜ、お前。こんないいの使ってたのかよ」

「兄貴は存在自体がズルイだろ」
このプロテクターが気に入らなくはない反応をした俺に、ジーサードはゴキゲンだ。
「だが、秘匿性がな……服の下に着込めるようにできないか？」
メタルヒーローのコスプレっぽい見た目がイヤで、アンガスにそう無茶振りすると、
「――承りました。ただ、強度は若干落ちましょう」
アンガスは関数電卓をつつき、やってくれるような回答だ。
「どのくらい落ちる。兄貴は俺の『流星』と同じ技を使うが、それに耐えられるか？」
横から尋ねたジーサードに、引きつった頬をニィと笑わせる。どうやら苦笑いらしい。
「いかがでしょう。マッハ2までなら、保証いたしますが」
過剰だっつーの。桜花はマッハ1だ。
「兄貴は頭のおかしい動きをするからよ。薄くしてもいいが、性能は極力落とすなよ」
俺より酷い無茶振りをしたジーサードにも、アンガスは「御意」と答えて頭を下げてる。
デキる男だなぁ。部下に欲しいくらいですよ。
「……で、レキ。気に入ったのかもしれんが、脱げよ。お前がそれ着ると、マジでどこにいるか分からなくなって居心地が悪い」
室内の虚空に、俺がそう告げると――ジジッ、ジジッ……
例の音を立てて、壁際の観葉植物の脇にレインコート姿のレキが姿を現した。
「……」
相変わらずの無言で、フードの下から鳶色の瞳をこっちに向けてるレキだが……
アンガスにもらった、レインコート式の光屈折迷彩――ジーサード一味が愛用している隠れ蓑が、気に入ったみたいだな。
聞けば、その光学ギリーコートに使われている再帰性投影技術は元々日本の技術だとか。俺が堕としたガリオンもそれで覆われていたワケだが、要は表面にナノマシン級の微細な発光器を塗布し、背景の変化に応じて同じ映像を表示し続ける被服というワケだ。
言わば、カメレオン・レキ。あれを着れば、ただでさえ存在感のないレキが完全に消えちゃうのだ。これがあれば、レキは緑松校長にリベンジできるかもな。
とはいえ消滅→出現を度々やられると落ち着かないし心臓にも悪いので、俺はレキからそれを預かり、しばらく着用禁止って事にしておいた。
プロテクターを外し、アンガスの部屋から解放された俺は――
まだ寝るには早かったので、今回死活を共にするジーサード一味との相互理解を試みることにした。
だが誰がフロアのどこにいるのかは分からなかったので、適当に部屋を開けて回る。

するとまず見つけたのは――

「おお、キンジ君！　豪快に良い夜だね！」

リアル・アイアンマンこと、P・A・Aを着て戦ってた白人男性――アトラスだ。

アトラスの自室はまるでスポーツジム。トレーニング器具がズラリと並んでる。

短パン・Tシャツでルームランナー上をドシドシ走るアトラスは、筋肉質で、デカく、白く、

アメフトやラグビーの選手みたいな印象だ。

悪い人じゃなさそうなんだが……ニガテだなぁ。こういう体育会系。

「ちょっとジャマしていいか」

「豪快に歓迎する！　ようこそ僕の部屋へ！　さあ、キンジ君も一緒に走ろう！」

「いや、走るのは遠慮するが……この制服の写真、お前か？」

キャビネットに置かれた、写真立てを手に取ると――

今より少し若いアトラスが、今と同じ暑苦しい笑顔で映っている。手元には1st on the 1st卒業と書かれた箱入りのメダルが映ってるな。一緒に映ってる父親らしき老人は、アトラスの腰の高さにボクシングの校内チャンピオン・ベルトを添えるように持っている。

「その通りだ！　僕は米陸軍士官学校を卒業して、陸軍少尉に任官し、特殊作戦コマンド隷下、第7特殊部隊（7th SFG）に配属されたんだ。そこのチーム指揮官をやってた時に、ジーサード君と出会ったんだよ。豪快に懐かしいなあ」

やたら歯並びのいい口でニカッと笑ってくる、アトラスは――

日本でいうところの防大、ウェストポイントを出てんのか。しかもその首席といったらダグラス・マッカーサー元帥と同じ、エリート中のエリートじゃねーか。

配属先は陸軍特殊部隊。麻薬絡みの難事に対処する第7部隊、中南米グループでチーム指揮官を――今以下の年齢でしてたって事は、陸軍でも飛び級で出世してたってことか。

そしてアトラスが今ちょっと強調した『出会った』というのは……

殺害命令を受けて、討ち取りに行ったってことだな。ジーサードを。

多分ジーサードが趣味で麻薬組織を壊滅させたりするから、仕事を横取りされたと感じた第7特殊部隊が暗殺を命じたんだろう。

「『出会い』は、どうだった。うちの弟との」

「豪快に素晴らしかったよ！　彼とはエクアドルの密林地帯で戦ったんだけど、どんなに撃っても銃弾が通じなかったから、ボクシングで勝負しようと提案したんだよ。そしたら彼は高笑いして、それを受けてくれた」

頭、悪っ……！　アトラスも、ジーサードも……！

「それで僕は血の海に沈められてね。生まれて初めて完全な敗北、その挫折を経験した。倒れた僕に『死ぬか捕虜になるか選べ』と彼が言うから、『殺してくれ』と答えたら――彼は『合格だ。殺してやる』と――僕の頭の真横に、大地を抉るような鉄拳を落とした」

「……殺されずに……捕虜にされたのか」
「いや。ある意味で殺されたんだよ。目を丸くしている僕に、ジーサード君は――『今、昨日までのお前は死んだ。そして今、お前は生まれ直した。俺がその強さを認めた、俺というスーパーヒーローの部下としてな』と告げ――僕の手を握り、笑顔を向けてくれた。僕は感動した。そして思った。なんて、なんて、カッコいい人なんだ……！　とね！」
だっせぇ……！　俺もヒスると女に歯の浮くような事を言うから人の事は言えないが、鳥肌が立っちゃったよ、そのジーサードのセリフ。
だがいかにも、こういうマジメ一徹の男がシビれちゃいそうなセリフではあるな。
アトラスはそれでジーサードに転んじゃって、エリート軍人街道からドロップアウトしちゃったのか。すみませんねホント、うちの弟のせいで。
ともあれ、このアトラスは……あのジーサードが腕力を認めて仲間にした、ジーサード同盟の前線担当ってとこか。今の話や、表参道で戦ってた光景から判断するに。
アトラスは攻撃力・防御力が共に高い、タフな、敵を削れる個体だろう。
P・A・Aで重武装したアトラスが前衛にいれば、よしんばそれを倒せても敵は激しく消耗する。その向こうにジーサードがいれば、そこを抜けるヤツはいない。
俺も、品川で……アトラスとジーサードの二段構えで来られてたら、やられてたかもな。
と、去年の死闘を思い出していると――
「息子や」
などとアトラスを呼ぶ、太った金髪のお婆ちゃんが部屋に入ってきた。誰……？
「ママ！」
元から明るい顔をもっと豪快に明るくしたアトラスは、その瓶底メガネのお婆ちゃんに駆け寄って――花柄ロングスカートをはいた彼女を、豪快にお姫様抱っこ。
「おお、ボーイ。民間企業でのお仕事は大変でしょう。お疲れさまだねぇ。ほら、お前の大好きなミートパイを作ってきたよ」
「うわあ！　ありがとう、ママ！」
あれが……アトラスの母親か。てことは、けっこう歳いってから出来た子供なんだな。
そのせいかアトラスは溺愛されて育って、マザコンになってるみたいだ。
「あとねえ、お見合いの話も持ってきたよ。ほら、携帯電話に写真を表示してあげようね。この お嬢さんなんかどうだい？　とっても綺麗なブロンドの子だよ」
「そ、そんなぁ。僕には早いよ、ママぁ」
そう言って苦笑いしてる、カーチャンにはすこぶる弱いらしいアトラスを――
母親の記憶がほとんど無い俺は少し羨ましく思いながら、部屋を後にした。
「……お前は米海軍特殊部隊の出身か？」

「やぁねェ、なんで分かったのよ」
縦横にズラリと何枚もディスプレイが並ぶ黒いガラスのデスクに向かって、ハート柄のスーツを着たコリンズがそう答えてくる。
コイツの部屋は――オシャレなんだが、男性用香水のニオイがして気色悪いな。
「何やってんだ、それ。株か？」
「イエス&ノー。投資ファンドもあるけど、これのメインは信用債務不履行取引よ」
「よく分からんが……そんな事やって儲かるのか？　今アメリカは不動産バブル崩壊とかの金融不安で大変なんだろ？」
「不景気の方が儲かる取引もあるの。今日は３６０万プラスってとこかしらね」
「こ、この短時間で……３６０万円も稼いだのか？」
「３６０万ドルよ。日本円だと３億円チョイ。お子様は引っ込んで、米証券アナリストのアタシに任せときなさい」
ダイヤモンド入りのピアスをキラキラさせ、室内なのにシャネルのサングラスを掛けているコリンズは――そのサングラスに仕込んだ視線入力システムも併用した上、左右の手で別々のキーボードを叩き続けてる。複数の画面内で刻一刻と動く金融商品のチャートを全て把握し、それらの売買を実行し、同時に俺とも喋ってるワケか。
しかも、戦闘力は元ＳＥＡＬｓの折り紙付きだ。ジーサードが手下にするワケだぜ。
「……デキる男ってやつだな、コリンズは」
「サード様はアタシ以上にデキるわよ？　面倒だからってマネー管理は任せてくれちゃってるけど」
頭のいい連中にとっちゃ……金なんて、こうして片手間でゲームみたいに調達するものってワケか。俺なんかコンビニで汗水垂らして時給６４０円のバイトやってたのに。
コリンズをジャマしないよう、俺は黙っておく。
ジーサード同盟について、頭の中で整理しておく。
全体の統括はジーサード。文武全てに於いて最強の人物、かつ、カリスマ性のある者がリーダーとして君臨している。これは理想的なチームに求められる、最重要要素だ。
リーダーの執事役として身の回りの世話をし、チームの輸送も担当するのがアンガス。
身辺警護は巣鴨でツクモが担当してた。あれは玉藻の亜種と思われるので、色金周りのアドバイザーも兼ねてるんだろう。
前線にはアトラスを配置し、その支援に資金調達係も兼ねるコリンズを当てていた。
去年の武偵高での動きから見て、斥候や哨戒、破壊工作はかなめが担当してたんだろう。加えて、かなめはジーサードの小型版みたいな存在として、万が一の時のリーダー代理も出来たハズだ。活命制限――健康上の問題を抱えていたジーサードに何かあって命令権を委譲しても、すぐには全滅しないチーム。

そのかなめは俺の所に来てしまったワケだが、今のジーサードはあの特殊なトマトさえ食ってればピンピンしてられるからそこも問題ない。

（ジーサード同盟は……万全、だな）

これ以上のチームを作れって言われても、できない。

ここにはいないが、フロアを見て回った感じでは他にもメンバーがいるみたいだし。

ちょっとした軍隊――諸兵科連合部隊みたいなものが、極少人数で構成されているんだ。それぞれに長所があり、それが有機的に組み合わさって正しく機能してる。

旧リーダーの俺をコキ使って、普段は役立たずの集まりだったうちのバスカービルとは大違いだよ。

だが……あのロカって少女だけは、ちょっと得体が知れないな。

後詰めの守備役をやってたみたいだが、屈強な感じには見えなかったし。

まさかジーサードの愛人ってワケでもないだろうから、何かの能力者なんだろう。

組んで戦うからには、その辺も確認しておかないとな。

やたらファンシーな飾りがされた、『Ｋｏｍｎａｔｅ ｏｔ Ｊｙｋｉ』と読めない字が書かれたドアをノックしたんだが……

コリンズ曰くそこに住んでるハズのロカちゃんは、ノックをスルー。

しかし、ちゃんと閉めなかったらしく半ロックになってるドアの奥に……気配は、する。

アイツめ。無視してるのか？

（なんか、俺が気に入ってないみたいな感じだったしな）

よし、それなら――さっきネクラ呼ばわりされた仕返しに、勝手に入ってやる。

レキから没収した光屈折迷彩もあるしな。

俺は裏地にスイッチのあったその透明レインコートをかぶって、広い共用トイレの鏡で自分が消えてる事を確認してから――

オエッと来るぐらい白とピンクで埋め尽くされた、これまたオエッとくるぐらい女の子女の子した甘いスメルのする部屋に侵入した。

とはいえここで吐いたら音で見つかるし、異次元空間から吐瀉物だけがワープしてきたようなトラウマ待ったなしの光景をロカに見せつける事になる。仕返しとはいえそこまで過剰攻撃するつもりは無いので、こみ上げてくるハンバーガーは根性で胃に押し戻す。

コレクションしてるのか、壁や戸棚に各国の腕時計や懐中時計が陳列された部屋は……

幾つかのパーティションとドアで区切られてて、小部屋が幾つか連なっている構造だ。

何やら声の聞こえるその奥間に、透明人間になった俺がソーッと入っていくと――

（……ッ……ッ……！）

……危うく悲鳴を上げそうになって、すんでの所で堪えたがッ……

ふわふわした天蓋つきベッドのある、ベッドルームらしいその室内では――

「ラインが出ちゃわないように、おヘソ下のリボン外していいよツクモ。付け外しできるようになってるから」

「ブラ次第で姿勢も良くなるっていうけど、ホントだね」

「こう、腋の下から胸を集める感じで、カップに入れるんだよ。バンザイしてもバストがハミ出なければOK。うん、かわいいかわいい」

ロカ（パステルピンク）、ツクモ（パステルイエロー）、かなめ（パステルホワイト）、レキ（パステルグリーン）がッ……！

みんな、みんな、下着姿。

外見が幼めなので平均年齢14歳ぐらいに見える女子が4人、肌年齢もそのぐらいっぽいピチピチの素っ裸をほぼ丸々晒してくれちゃってるぞ。Why!?

衣装持ちらしいロカの広いウォークイン・クローゼットの様子から判断するに、何やらパーティードレスを着る用事が近日中に控えていて、そのために下着から着付けをしてたらしいんだが――理由はどうでもいい！　一刻も早く、血流を押さえねばッ！

（2、3、5、7、9、9は素数じゃないッ……！　ああぁ……耐えろッ……！）

こんな所でヒスってみろ。俺以外の全男子が一度は夢想したであろう『もしも俺が透明人間だったら』ネタで思い描かれた出来事が全て起きてしまうぞ。罪もない4人の美少女たちに。しかも内1人は妹だし！

怯えて警戒する俺の視界――

ベッド上には、色とりどりの女子用下着が咲き乱れている。まるで、お花畑っ……！

似た花畑は香港のランジェリーショップでも見たが、あれより花々はフリフリしてたりヒラヒラしてたりで子供っぽい。そこはいいものの、売り物だったあの花よりもこの花は生々しい。だって――美少女4人は、これ、生下着のお着付け中だもんっ……！

つまり、そこの花はどれもこれも着用済か未着用か分からん超弩級危険物なのだ。

ていうかレキのしまむら下着やかなめのシマシマ下着、ツクモのサラシみたいな下着といったデフォルトインナーは全てベッドに咲いてる。ヤ、ヤバイだろあれは！

光屈折迷彩のフード裏についてたディスプレイには赤外線アイ機能もあり、俺はそれで生あったかい脱ぎたてのお花が……他にも多数、点在していることを認知してしまう。

ってことは、ナウ着用してるランジェリーも――脱衣しかねんざますよ、こいつらッ！

――逃げるッ！

「あれ、ドアが半開きだよ」

と、ツクモが俺の向こうにある退路ドアに手を伸ばしてきて。

透明俺はYMCAのCみたいな体勢で間一髪それを躱し――たが、ツクモがドアを閉めちゃったので出るに出られなくなってしまう。

（つ……詰んだッ……！）

透明なので色は無意味なんだが青ざめた俺……の脇で、レモン色ランジェリーのツクモが――「ふん？」と鼻を鳴らし、小首を傾げた。

ぴこぴこ、と、キツネ耳が内蔵されてるらしい髪の突起部も動かしてる。

「……何か、ニオイが……んん……？　遠山キンジみたいな……？」

鼻、いいんだね。ツクモって。

「そこにキンジさんがいるからですよ。ツクモさん」

はい、ここでレキ。理子にハメられて女子の身体測定をロッカー内から覗く事になった時の懐かしのシチュエーションが再現されましたよ。ここニューヨークで。

「……えーっと……謝罪はする。だが聞いてくれ、これは決してわざとじゃなく――」

もちろん聞いてくれないムードで俺の声の発生源を睨んだ、ロカは……

……わさ……ぁ……

と、ワンレングスの銀髪を広げていく。

そして片方青かった眼が、もう片方と同じ赤に色を変えていく。

怒った王蟲みたいな現象を目撃した恐怖で、ヒス性の血流は縮み上がってくれたが――

――バツンッッッッ‼　バツバツバツバツンッッッッ‼

俺の頭部に、続けて胸部や腹部に、次々と着弾みたいな連打が浴びせられたッ！

痛い！　痛いって！　ロカは指一本俺に触れてないってのにッ、何だこれ⁉

壁際までフッ飛ばされ、光屈折迷彩のレインコートが半脱ぎになってしまった俺は――細腕を腰にあててプリプリ怒るロカに、

「細腕だからってバカにすると許さないよ」

――考えを、読まれた。

（コイツは、ジーサード・リーグの……超能力者担当か……！）

アリアに思念動だかを練習させていた超能力捜査研究科の時任ジュリア先輩みたいに『人の心を読む』技を、非接触でも出来るんだな。たぶん、意識を向けた時だけ。

「そうだけど、それだけじゃない事はもう分かったでしょ。あたしはモスクワ総合大学の超心理学アカデミーにいた12歳の頃に、ロシア連邦保安庁――旧ＫＧＢの命令でサードと戦って、今いる部下の中じゃ一番惜しい所まであいつを追い詰めた事もあるんだからね」

12歳ってことは、飛び級で大学入学したんだし！　天は二物を君に与えたんだなあ！

「わざと考えてもわざとだって分かるから」

……じゃあどうすりゃいーんだよ。

「あたしに服従すればいいの。おい遠山キンジ。サードの兄弟だから大目に見てやるけど、それにも限度ってものがあるよ」

と、クールだが根はアリア系の性格をしてる事が判明したロカは――

半脱げで部分部分が透明というシュールな俺を……フワリ……と触れもせず空中にネコ掴みで吊し上げ、おしおきタイム。

「こ、ここには妹さんもいるってのに！　この――けだものッ！」

パンツの上縁から盛大に出てる狐シッポを逆立たせた、リアルけだもの・ツクモに――俺は顔面をハイキックされ、

「お兄ちゃんのエッチ！　見たい時は見たいって言ってよ～！」

なんでか嬉しそうな笑顔で俺のほっぺを抓む妹さんに、さりげなくハート形になってる磁気推進繊盾（P・ファイバー）をチラつかされ、

「……」

冷たい目でこっちを見るレキに無言責めをくらい、

「あたしからの罰は、運命占勢刑（キャストレート）――悪運を1つ付けて、お前の人生から女といちゃつく機会を1回分奪ってやる。その代わり、今回の作戦に幸運を1つもたらす」

ロカはパチパチとマバタキをして俺に何だか分からん術を掛けたらしいが、それは遠山キンジ業界じゃオシオキじゃなくご褒美なんで平気だね。バーカバーカ。

とか考えてたらそれも読まれたらしく、俺は自動ドアみたいに開いたファンシーなドアから外へ――ドタッ！　と、頭から落ちるようにツマミ出されたのであった。

サジタリウスの機内で寝溜めしたとはいえ、やはり初日は時差ボケが出る。というのも東京とニューヨークの時差はマイナス14時間。ほぼ完全に昼夜が逆転するからだ。

なのでジーサード一味とのコミュニケーションもできた後、俺は広いリビングで……

「お兄ちゃん顔赤いよ？」

「蹴られたからな」

などと語りつつ、かなめやレキとダーツで501をやって眠気を堪える。

しかしこれが面白くない。レキは当たり前のように180、180、141と最短手の9投で上がるし、中心を狙うかなめも似たり寄ったりだ。俺だけ無様に30投とかしてる。

ニューヨーク時間の21時になると――

レキはおやすみなさいの一言も無く、窓際で寝てしまった。ドラグノフ狙撃銃を抱えて、いつもの体育座りで。レキの体内時計には時差補正機能もあるんだな。

盛り上がらなかったダーツをやめて、俺はベレッタの簡易分解整備をして眠気を堪える。

するとかなめが、じゃれつき気味にそれを手伝ってくれた。

「お兄ちゃんのベレッタ、ずっと92改なんだね。93Rにしないの？」

「あんな銃、日本じゃほとんど流通してねーんだよ。本体も専用パーツも相場が高いし、銃検の間隔も短いし、秘匿性もやや悪い。世間的な実戦数も少ないから信頼度は改造銃でフルオート化

したコイツとどっこいどっこいだしな……ふぁ……」

アクビ混じりに喋ってたら、そこに――

俺に似た顔をし、一回りマッチョな体をした男がフラッと現れた。

「兄貴、寝るぞ。ここは仲間しか入れないフロアでゲストルームが無いから、俺の部屋で寝ていいぜ」

あ、これ、ジーサードか。

フェイスペインティングを落として髪も下ろしてたから、一瞬分かんなかったぞ。

ルーブル美術館の一室みたいな、彫刻や絵画だらけの落ち着かないペントハウスで――

俺はローブみたいな寝間着をもらったが、ジーサードは黒いブリーフ一丁で寝た。

眠気もマックスだったし、象でも寝れそうな特大ベッドだったから、傍らに弟がいてもグッスリ熟睡でき……

……フライパンをフライ返しでカンカン叩く不愉快な『妹目覚まし』をやられて起きると、もう朝10時だった。

「おはよー、おにーちゃん！」

セーラー服姿のかなめに引っ張り起こされ、俺が寝ぼけ眼のまま着替えさせられていると――

「起きるのが遅いぞ兄貴。早起きは三文の得、と、アメリカの諺にもあるんだぜ」

朝日の中、御影石の床で倒立したジーサードが指立て伏せをしていた。

上半身が裸なので、肩と左義手の継ぎ目がよく見えるが……これは多分、右腕と左腕のバランス調整を兼ねた体操なんだろうな。

マッシュにやられた傷はまだ完治というワケじゃないみたいだが、かなり回復してきている。

さすが、遠山家の男は打たれ強いな。

広い室内の壁際にはもう1人、ジーサードの着替えを抱っこしたツクモが控えている。

そのツクモは昨日俺を足蹴にしたくせに、ジーサードの半裸を見る視線に遠慮がない。

フンスーッ、って感じで鼻息を荒くして、目をハートにしてるよ。

「今日は日曜日だぜ。もう俺たちは行って帰ってきたとこだが、兄貴は教会に行かなくて良かったのか？」

「教会？」

「俺はカトリック。アトラスはプロテスタント。ロカはロシア正教。アンガスはユダヤ教。コリンズはイスラム教。ツクモは神道だ」

「俺は……改めて聞かれるとよく分からんが、神道と仏教のチャンポンだ。どっちにせよあまり信心深い方じゃないから気にするな。大体の日本人はこうだから」

「分からねェなァ、そこは。マジで日本はフシギな国だぜ」

と言うジーサードは、指だけで軽く跳躍して――たんッ、と床に立ち直した。

そこにツクモがササッとやってきて、タオルで汗を拭き取ってる。
宗教もそうだが、ジーサード一味は――まさにアメリカの縮図、サラダボウルだな。
東洋系のジーサード、西欧系のアトラス、アフリカ系のコリンズ、中東系のアンガス、東欧系のロカ。人種も黄色人種・白人・黒人・その他（きつね）がコンプされてるし。
「おう兄貴、似合うじゃねえか。俺の私服も」
ツクモにプロテクターを着せてもらったジーサードが、俺に親指を立ててくるので……
「？」
窓に映る自分を見て……うおっ、まぶしっ！　と、俺はベッドの上で卒倒しかける。
かなめがいつの間にか俺に着させていたのは、ジーサードが成田で着ていた――
白・金の2色でギラギラ煌めく、スーパースターみたいなスーツだったのだ。
「な、なんだよこれ！　ふざけんな！　俺の制服を返せ！　こんなの着てんのは、お前とにしきのあきらぐらいだぞッ！」
「元はジョン・トラボルタの服だ。兄貴、今日はソイツを着といた方が面倒がないぜ？　後で、仕事してもらう時にな。ああ、あと兄貴の防弾制服はアンガスがクリーニング中だ。明日返す」
「一仕事って……何だよ？」
「お兄ちゃんカッコイイよ！　ぷぷっ」
「いま笑ったろかなめ！」
俺がかなめに白いパンタロンの両足でドロップキックを放っている間に、ジーサードは出ていってしまい……
仕方ないので、俺は「まあこの服、暖かいからいいか」と開き直ってリビングに出る。
すると、窓の外――テラスに、レキが立っていた。
何やらどこかとテレパシーでも交わすように、マンハッタンの空を向いて目を閉じてるんだが……
「……何やってんだ。お前の奇行はいつもの事だから驚かんが、立って寝てるんじゃないだろうな。カゼひくぞ」
寒いのでドアを半分だけ開けて、こっちも奇行といえる姿で尋ねる。
「風の声を――聞いていました」
くる、と振り返ってこっちを見たレキは、俺の服装にも完全にノー・リアクション。
この無反応、逆に精神的にキツいな。理子だったら俺を指さしてプギャーって笑うんだろうが、そっちの方がまだマシだね。
だが、さて……
東京駅で別れて以降、改めてレキと遣り取りするようになったらしいその『風』とやら。
ニガテ系の話だったから池袋や巣鴨じゃスルーしてきたが、そろそろ、さすがの俺にも察しがついてきたぜ。

このニューヨークは色金へ繋がる道の途上なわけだし、ここいらでハッキリさせとくか。
京都で白雪・風雪に聞いた話だが、レキは璃璃色金の巫女。
風の遠隔操作を受けていた春には、Sランク武偵のくせに、俺か、アリアか、白雪――すなわち、色金関係者――を監視する、安い鷹の目の仕事を受けたりしていた。
その辺りから半ば当てずっぽうで、
「お前が言う『風』っていうのは……璃璃色金だな？」
その疑惑を、俺が問うと――
……こくり。
レキが、頷いた。
（――やっぱり、な）
その情報を元に……俺は、ヒステリアモード時にコツコツ気づいてきた事柄を頭の中で つなぎ合わせていく。
星伽分社で、白雪たちは『璃璃色金は人の感情を好まない』と言っていた。
それは、『恋と戦の激情を好む緋緋色金』とは真逆の性質だ。
レキが無感情のまま暮らしてきたのは、巫女として璃璃色金に合わせるため。
アリアが緋弾を覚醒させられたのは、あの情熱的な性格が緋緋色金と共鳴したから。
そこにも、似たような対称性がある。
……おそらく……
璃璃色金と緋緋色金は、ある意味、ある形で反発しているのだ。磁石のように。
東京を出る時にも思い出した事だが、レキは夏休みの最終日――2人っきりで探偵科の屋上にいた俺とアリアを引き離し、「結ばれてはならない」と命じてきた。
モノレールの駅では、アリアを銃剣で刺し殺してでも俺から離そうとした。
レキはアリアの代わりに自分を俺と結びつけようと、略奪婚さえ仕掛けてきたのだ。
だが、結果的には……
俺はレキに感情を芽生えさせ、璃璃色金を裏切らせてまで、アリアとのパートナー関係を続けた。レキは、それを認めていた。「その果てに、どんな事が起きようとも」と――言わば、諦める形で。
――その結果が、緋緋神アリアの出現だ。
レキは、そうなる事を知っていたのだ。緋緋色金に反発する、璃璃色金を司る者として。
それを教えたのは、『風』だ。
そこまではもう、疑うべくもない事だろう。となると……

（風――璃璃色金には、意志がある。それも、緋緋神と対立する意志が）

その意志が何なのかは未解明だが、緋緋色金・緋緋神の関係から類推するに……きっと、璃璃色金にもいるのだ。璃璃神が。

となると。

いま俺たちが奪おうとしている第3の色金・瑠瑠色金にも、瑠瑠神が宿っているかもという神崎かなえさんの説は――

今のレキの証言で、有力になってきた。と、言えるだろう。

（あれも色金、これも色金、だったってワケか。俺たちの周りにあった、謎の多くは）

『運命』――乃木坂での兄さんの言葉を反芻し、マンハッタンでレキと見つめ合う――俺だが……

「……」

このド派手な服のせいで、いまいちシリアス感に欠けるな。

まあ、そのぐらいの方が俺らしくていいかもしれないけどさ。

こういう時にキマりきらないのも、俺の運命みたいなもんだから。

ブランチを取っていると、アリアからメールが来た。

無事ロンドンに着いたらしく、地下鉄のベイカー・ストリート駅で無い胸をえっへんと張ってる写真が添付されていた。壁には19世紀イギリスの国民的英雄でアリアの曾祖父、シャーロック・ホームズのシルエットが描かれてる。微妙に自慢入ってるな。

だが元気そうにしてるのは確かなので、ちょっとホッとした気分で俺は――

昼過ぎ、ジーサードの言う『仕事』に同行する事になった。にしきのスーツのまま。

ジーサードがジャッジ・ドレッドみたいなヒーロースーツを着てるのは普段通りだからいいとしても、今日は部下たちも衣装が派手だ。

アンガスは蝶ネクタイの燕尾服。アトラスも科学甲冑を部分的に着てるし、コリンズのダイヤモンドも多め。ロカもロングコートが銀色。かなめはヤンキースのブルゾンを着て、キャップも被り、キャラメル味……？　のフーセンガムを膨らませてる。

「なんだよ、みんなでこんなカッコして」

ビルの前でスーパーカーの行列に分乗する一味を見て、俺がジーサードに尋ねると……

「俺たちゃアメリカ人なんでな。サービス精神ってもんがあるのさ」

「……？」

「兄貴、これは重要な仕事なんだ。ヒーローの最も重要な仕事とも言える」

オロチ改に乗り込んだジーサードは、ふざけているようで、マジメな顔だ。

この仮装行列みたいな行為に、ホントに一種の責任感を持っているらしい。

で、車だからどこか遠くに行くのかと思ったら、5分もしないで目的地に着いた。

計画都市マンハッタンのド真ん中にある巨大公園、セントラル・パークだ。

（なんで車で来たんだよ。徒歩で行けるじゃねーか）

と、冬なのに頑張ってるパフォーマーや、ホットドッグを売ってる屋台を横目に園内へ入っていく。すると道ばたに停めた車からすぐの所、ちょっとした広場で……

ジーサードたちを今か今かと待ってた顔の、子供たちの集団に迎えられた。

わーい！　と元気に集まってきた子供たちは——

見た目ですぐ分かったが、手が無かったり、足が無かったり、杖をついていたりしてる子供が散見される。そして総じて、貧しそうだ。

そんな子供らを前に、ジーサードは——

「待たせたなボウズども！　ジーサードが帰ってきたぜ！」

飛びついてきた黒人の少年——補聴器を付けている——を右腕で抱き上げ、肩に乗せてやっている。

さらに、パシュッ！　と義手の左手首から先を圧搾空気でロケットパンチ風に飛ばして……ブーメラン状に飛んだ義手は、木に引っかかった風船を取ってやってるな。

厚いメガネをかけた女児が見上げる、木に引っかかった風船を取ってやってるな。

不燃性ワイヤーで手首と繋がっている義手を左腕に戻し、子供らに親指を立てて見せたジーサードは——

それから子供らにせがまれて、世界各地で悪党退治をしてきた話を面白おかしく話してやっている。

「スマトラ島にはシャンプー工場に見せかけた麻薬工場があってな、それを破壊した時、俺は現地マフィアに腹をすかせたスマトラトラをけしかけられた。だが動物に罪はないし、トラは絶滅危惧種なんだ。だから俺は素手でトラと殴り合ってだな——」

……かなり暴力的な話ではあるが、子供たちは目をキラキラさせて、アメリカ人らしくオーバーリアクションで聞いてるよ。まあ、子供はそういう話が好きだしな。

さりげなく麻薬の害や自然保護についても教えてやってる、ジーサード……

それを囲む子供たちの喜びっぷりから、説明不要で分かる。

自身も片腕が無いのに、そんな事お構いなしで全世界を股に掛けて戦うジーサードは、体に障害があるこの子たちのヒーローなんだ。

うちのバカ弟とはいえ、ここじゃパラリンピック選手みたいな希望の星なんだな。

「ねえ、この白い服の人はサードの新しい子分？」

と、車イスの男の子が俺を指さすと——

「違うぞー。コイツはなんと、俺の兄貴だぜ！」

ジーサードは子供たちに、大仰なジェスチャーで俺を紹介する。

すると、

「サードのお兄ちゃん!?」

「すっげえ！」

日本から、お前らのために来たんだ！」

「本当だ！　サードみたいなスーツ着てる！　ねえ、お兄ちゃんはどこで戦ってるの!?」

あー……それで、このギラギラの服を着させられたのか。俺も。

「こないだはヨーロッパで、その前は香港で戦ったが……普段は日本で戦ってる。主に、ピンク色の頭をしてて、特に理由もなく俺を撃ってくる凶悪なヒロインとな」

そう俺が答えると、ワーオ！　と、子供たちは俺をジーサードと同様にヒーロー認定。

なるほど。仕事ってのは――

この子らの前で、スーパーヒーローのフリをしてやれってことだったのか。

「お兄ちゃんって事は、サードより強いの!?」

今度は俺を取り囲んできた子供たちから、そんな質問が飛び出すと――

「ああ。俺と兄貴は悲劇的な宿命に導かれ、東京上空で戦った事があるんだ。だが、このジーサードでも――素手でミサイルを殴って逸らす、この超人・『エネイブル』兄貴には勝てなかったのさ」

ジーサードの発言に、エネイブルすっげえええ！　と子供たちは目を見開いて唱和。

子供、特に男子の人気は強い順に集まるらしく……

それから俺は彼らを肩車してやったり、急に始まった子供たちの草ベースボール大会で4番をやらされたりと忙しい時間を過ごした。

子供が投げる球にわざとフルスイングで三振して豪快に笑ってるアトラスや、リリーフピッチャーを楽しそうにやるかなめ、外野をボケーっと守ってるレキなどを眺めつつ……

打順待ちの俺は、隣のジーサードに日本語で問いかける。

「この子たちは、どこから来てるんだ」

「住んでるのはニューヨークだが、学校はそこだ」

と、ジーサードが指さしたのは――セントラル・パークの隣、車列を停めた道を挟んですぐ向かいだった。言われてみれば、日本の学校とはイメージが違うが……そこのビルの1階が養護学校になってるらしい。

「……『ジーサード記念小学校（G III Memorial Elementary School）』って書いてあるぞ。お前が建てたのか？」

「違ェよ。あの学校が潰れそうだったから、近所のよしみで幾らか貸してやっただけだ。そしたら、あんな名前にしやがってよォ。ったく」

恥ずかしそうに頭をガリガリ掻くジーサードだが……アメリカでは、何かにつけ功績のあった人名を場所の名前にする事が多いから、特別な事ではないんじゃないかな。

――ジーサードが言った『学校が潰れる』という事態も、アメリカではよくある。と、ニュースで見た事がある。

公共性の高い施設と見れば何だか分からん交付金をジャブジャブ突っこむ日本と違って、例外なく金にシビアな国なのだ。アメリカは。

なので学校だろうが病院だろうが、予算不足になったら容赦なく潰す。救急車だって、金を払

えないヤツは乗せない。なんと刑務所ですら予算不足になったら潰し、囚人を解き放っちゃう国なのだ。学校が無くなったら子どもたちがどうなるかは、想像に難くない。

「いや、あの学校名でもいいだろ。お前、ちゃんと先生してたし」

「……そんな大層な事はしてねえよ。俺は教師じゃねえ。ただ……あの子供らが、自分は何もできねぇと思い込んじゃいけねェからな。時々こうやって、逆の事を話してやってるだけさ。俺だって出来るんだから、お前たちだってきっとできる、ってな。そんだけだ」

「ふーん。へー。じゃあそういう事にしとくか」

「ンだよその目は。ニヤニヤすんな。殴るぞッ」

「兄弟ゲンカを見せると、子どもたちの教育に悪いぞー」

俺にあしらわれて、赤くなってギリギリ歯ぎしりしてるジーサードだが……

アメリカ人のコイツにも、遠山の金さん四郎――正義の味方の血が、流れてるんだな。

父さんもそうだったし兄さんもそうなんだが、子供や弱者を放っておけない、お人好しだよ。揃いも揃って。

戦う時は鬼のように恐ろしいくせに、部下だけじゃなく子供たちの前では面倒見いいし。

自分より弱い人々に、手厚い。そこは俺より父さん似かもしれん。

「まあ、とにかくだッ。これは俺の、その、えーっとだな。主義だッ。主義でやってる事なんだよ。主義ってのはその――『教育は誰にでも与えられるべき』って主義だ。それも、マトモな教育をな。教育がダメだと、人間はダメになるからな」

「ああ、それには賛同するよ」

武偵高という日本・ダメな教育をしてる学校に通ったせいでこんな事になってる俺も、首肯せざるを得ないね。

ジーサードも、恣意的な米軍の人工天才として――カリキュラム的には最高・最難の、しかし意義的には最低の教育を受けさせられたからな。なおさらそう思うんだろう。

「……だが最近、あの学校の先生が変わっちまってな。前のババアが定年退職したんだが……う……？」

喋っていたジーサードが少し苦い顔をして学校の方を見たので……

「？」

俺も、そっちを見ると……

ジーサード記念小学校から、服装からシスターと分かるブロンド髪の女性が出てきてる。

公園にやってきた、優しそうな面持ちのシスターは――とととと、と早足にこっち……ジーサードの所へやってきた。

「――サードさん。また子供たちと遊びに来てくださったのですね。感謝します」

と、胸の前で十字を切ったシスターは、若いな。俺たちよりは年上に見えるが、まだ、十代じゃないか？　そして、化粧っ気はないが美人だ。

ウワサをすればってヤツだな。この人が新任の先生なんだろう。子供たちの親しんでる様子から分かる。

だがここで俺の隣、ジーサードに妙な現象が起きる。

「あー……いや……違ェよ、シスター・マリア。えっと、たまたまだ。たまたまヒマで、近くを通りかかったから……だッ」

普段あれだけ凶暴で押しの強いジーサードが……

視線を下に落とし、タジタジしてる。左の義手や、ペインティングで隠している顔面の負傷をさらに隠すような仕草もしたぞ？

「そうだったのですね。それはとても幸運なことでした。でも……サードさん。腕や鎧が前とは違うようですが……また、誰かと争いましたね？」

めっ、という顔をしたシスター・マリアに、ジーサードはしゅんとしてる。

「……いや、これは、その……そうといえばそうなんだが、えーっとだな……」

あーなるほど。コイツも俺と同じで、年上の女に弱いんだな。

同年代でも接し方が分からん女子というものが、さらに年上になったら——どう接していいか、ビタ一文分からなくなるからな。血は争えんな、弟よ。

「私はいつでもあなたに神のご加護があるよう、祈っています。でも、あなたのご活動が時にご自身を傷つけるものだという事も知っています。それを想うと……私は深淵の闇にいるような、不安な気持ちになるのです……」

——それはそれは心配そうに、ジーサードを見つめたマリアさんに……

「シスター・マリアは、ジーサードが好きなんだよね！」

黒人の女の子が、満面の笑みでそんな事を言ったし、過呼吸気味になっちゃってるよ、この人。見てて恥ずかしくなるレベルだね。

すると、ぴょこ！　と跳び上がったマリアさんは、真っ赤になって手をワタワタさせる。

「そっ、そんな！　いけませんよ、そのような事を申してはっ——こっ、この御方は、私なんかより、ずっと、ずっとご立派な……！」

うわぁ……分かりやすっ。声もひっくり返ってるし、片思いされてるらしいジーサードは、すっかり弱って顔を伏せてしまい……

なんか殺気がすると思ったら、外野からツクモが耳の毛を逆立ててシスター・マリアを睨んでた。あーあ、見ちゃいられんな。ていうか、ジーサードはジーサードで女難の相に見舞われてたんだなぁ。地球の裏側で。そこも、血は争えんか。

ジーサードビルに戻り、夜になると今度は——ベスト付きの、黒スーツを着させられた。黒の革コートと、黒い中折れ帽子もそれに増設させられる。

お揃いの服でジーサードと並ぶと、まるで禁酒法時代のギャングって感じだ。

アンガスはタキシード、アトラスは白の、コリンズは紫のスーツでキメてて……

「今度は、どこへ行こうってんだ……？」
「ヒーロー組合（ユニオン）のパーティーだよ。お兄ちゃん、エスコートしてね」
アメリカじゃ、ヒーローにも組合があるのか。オープンだな。
まあそこはいいとしても、俺（おれ）の腕に抱きついてくる、この……
「――かなめ、お前、そのVネックドレス。ちょっと胸開けすぎじゃないか？」
「やーん。お兄ちゃんがエッチな目で妹の胸の谷間を見るぅー。背徳う～」
非難する割にむしろ胸を押しつけてきて、俺に押し返されてるかなめは――イブニングドレス姿。若者に人気のニューヨークブランド、日本人デザイナー・タダシ＝ショージのロングドレスを着てるのだ。中学生のくせに、高級クラブのホステスみたいな光沢（こうたく）のあるドレスをセクシーに着こなしてやがるよ。
どうやら昨晩、この時のために下着の着付け会をやってたらしいかなめ、ツクモ、ロカ、レキの4人は――他もドナ＝カレンやらニコール＝ミラーやら流行デザイナーが仕立てたイブニングドレスを着てる。ドレスのカラーを各人の髪の色に合わせてる辺りは面白（おもしろ）いが、みんな肩丸出しのノースリーブだし、背中もオシリのすぐ上ぐらいまで丸出しだし……
「……お前ら。そのドレス、やめにしないか？　寒いだろ。冬だし」

目の毒な4人に俺が文句をつけると、
「この田舎者。ドレスコードがあるんだからるパーティーでは、女は肌を見せるドレスが長く。素材はレースかサテン。宝石か真珠のみ上げられた。
隣のツクモの衣装を、つ、つ指さしつつのロカに、フェザー・ミニハットのチュール下から睨
なおこのオシャレっ子ロカが自室で開店したロカ美容室で、女子4人はお顔もしっかりメイク済み。元からみんな美人で俺は困ってるのに、さらに超美人になってて超困るよ。なんで女って化粧で美人度を界王拳みたいに倍増させられんの。
ブロードウェイとタイムズスクエアから至近の、賑わうミッドタウン――9番街。
白い壁が聳えてるみたいに見えるハドソン・ニューヨークというデザイナーズホテルで車を降り、顔パスのジーサードに続いて壁にぽっかり開いた入口エスカレーターを上がる。
その際かなめがエスコートを強要してきたので、俺は妹と腕組みして入場。恥ずかしいなあ。
なお、ツクモが物欲しげに近くで『エスコートして下さい』的アピールをしてたのに、ジーサードはちっとも気づかずズカズカ1人で入ってく。デリカシーないなぁ。俺以下だ。
なお……パーティー会場入口には、真下から風が吹き上げて女子のスカートがふわっと上昇する仕掛けがあった。マリリン・モンローの映画『七年目の浮気』をオマージュしたおもしろハプニングが起きる仕組みである。これ企画したヤツ出てこい。本気で殴る。
「……」
スカートがかなりきわどく持ち上がっても、レキだけは平然としてたが……女子たちは赤くなりつつも笑顔。会場にいたヒーロー組合パーティーのお歴々も明るく笑ってるよ。なんなのこのアメリカの笑いのセンス。理解できん。
パーティー会場は間接照明に加えて曇りガラスの床下からも照明が為され、カラフルなカクテルやワインやビールといった各国の美酒が振る舞われていた。壁際にはキッチンが特設されて、腕の良さそうなシェフたちが視界に収まりきらないぐらい料理を並べてる。
この国も貧富の差が激しい事は、来てすぐに分かっていたが――
（その『富』の側は、豪勢なもんだな）
組合費が何$なのか知らんが、マンハッタンのモダンなホテルを貸し切り、飲み放題の喰い放題やってるんだからな。
ジーサードは弱者の味方であり、かつ、強者の一員でもあるって事だ。
で、その強者たちだが……パッと見で分かっちゃうぐらい、それっぽい連中だ。
会場のリアル・アメリカン・ヒーローたちはほぼ全員ガタイがいいし、顔つきも精悍でカッコいい。当然ながら、戦闘力も恐ろしく高そうだ。武偵高で言うなら教務科に通じるムードがある

ね。平凡な人生を所望する俺としては、あまり付き合いたくない連中だよ。仲良くしてたら、絶対ロクでもない正義のバトルに巻き込まれる。

だが、ジーサードは――華やかな会場にバラけて挨拶を始めたコミュ力の高い部下たちを見送るなり、

「ここにいるのは、実力、実績、活動内容で基準を満たした武装職のエキスパートだけだ。Sランク武偵もゴロゴロいるから、兄貴もコネを作っとけよ」

俺にヒーロー組合の仲間入りを勧めてくる。

「全力で遠慮させてもらう。奇遇な事に俺も某Sランク武偵2名とご縁があるが、お陰で寿命が20年は縮んでるんでな」

「なんか兄貴は日本政府と仲が悪いみてェだが、日本を追われたらアメリカが戦場を用意するぜ。みんな、いつもどこかで大戦争やってっからよ」

隣にいるのに俺の話を全力で聞いてないジーサードだが、自分は挨拶に行かなくていいのかな。俺なんかと油を売ってて。まあ知ったこっちゃないけど。

「あそこにヒノ・バットがいるから、サインだけもらってくる」

と、俺はジーサードを撒き……実際にいた有名武偵から武偵手帳にサインをもらったが、それっきり、する事も無くなってしまった。

見れば、ツクモはデザートのコーナーで花瓶みたいな巨大パフェを受け取っており……ロカはシンデレラとかいうカクテルのグラスをつまみ、アトラスはあのガタイに似合わずミルクを手に、それぞれ客とオーバーアクションで談笑中。

パーティー好きらしいコリンズは奥のダンスフロアでマイケル・ジャクソンを完コピで踊り、かなめがマイクでそれに歌を提供してやってる。

……なんというか、パリの仮面舞踏会より活気があるパーティーだよな。

集まりの性質というよりも、お国柄って感じがする。アメリカでは陽気で元気が一番、活力がある事が尊ばれるんだろう。リア充理論の国だ。俺にはついていけないね。

そもそも英語が喋れようと、見ず知らずの人と話すパーティーというもの自体――俺は、合わないんだよ。内輪でやる日本式の宴会ならともかく。

そんな、居心地の悪さを感じていると……おっ、いたぞ。もう1人、完全に浮いてるのが。

レキだ。

イスに膝を揃えてちょこーんと座り、壁の花と化してる。

ぽっちのよしみで、レキのそばに行くと――

「……」

いつも通り、マネキンかオブジェみたいな状態のレキ……なんだが……

肩や背を露出させ、胸元も上3分の1が開かれているイブニングドレスを着てるせいで、色っ

ぽく、見えてしまうな。
薄手のシルクドレスは肌に密着するデザインだから、ボディーラインも丸わかりで……それが、前に見てしまったものより少し女らしくなっている。
さらに普段は洒落っ気が無いレキなのに、今日はムダにお化粧なんかをされてる。元の顔スペックが高い事に加えて、間接照明の効果もあるのか――
え、えらい美人に見えるよ。いや実際、えらい美人なんだろうけどさ。
と、柄にもなくレキに『女』を感じてしまった俺は――
「……レ、レキ。お前は何か食べないのか。食い放題みたいだから、遠慮すると損だぞ」
ちょっとテンパったのを隠すように、そんな話を振った。
「いいえ」
ちょっと俺の方を向いたレキの耳に、ティファニーのイヤリングが煌めき……
その女っぽさに、またドキッとさせられてしまう。
ヒス的な感じじゃなくて、ほんとにキレイな女の子を前にした事によるテンパりだから危険性は低いんだが……ここはここで、居づらいな。ニガテなんだよ、美女ってやつは。
「今夜摂取する分の栄養素は、これで十分ですので」
あ。どこからともなく、カロリーメイトを出してきた。そこはレキらしくて安心するね。
だが、そう言われて見回してみると……巨大パフェをおかわりしてるツクモはともかく、この場のヒーローたちは、食べ物にあまり手を付けない者が多い。
アメリカの一流の武装職は、パーティーの場でも食事管理をキッチリやってるワケか。
バカみたいに陽気に振る舞ってはいても、行住坐臥、戦場にいるような緊張感を持って暮らしてるんだな。
だが俺は食べる派だね。
食いたい時に食いたい物を食っとかなきゃ、ストレスが生じて結局のところ体に悪いんだ。ごちそうを前にした時には、なおさらさ。しかも全部タダ飯ときてる。
子分が億単位の金を上納してくれる弟と違って、こちとら慢性金欠なんでね。
……と、俺はレキを置いて料理コーナーへ……
山海の珍味との、胃袋を通じたコミュニケーションへと赴く。
手つきから分かるがシェフは一流揃い。金色のトレーに盛られたコールドミートの盛り合わせ、キャビアを添えたサーモンのカルパッチョ、ラビオリ、シュリンプサラダetc...どれも輝いて見えるね。
しかし食べ放題テクニシャンの俺に言わせれば、こうした見目麗しいスターターに手をつけて腹を膨らませるのは下の下だ。
攻めるべきは最初から中心・中央。メインディッシュ――
（――ここだぜ……！）

見つけたぞ、一番の狙い目。

本場アメリカの、Tボーン・ステーキだ。

『アメリカといえばステーキ』という俺の貧困なアメリカ観はさておき、シンプルだが、だからこそ難しいのがステーキという料理。

ステーキは素材をほぼそのまま味わわせるわけだから、ごまかしがきかない。従って、素材選びからもう料理が始まっていると言えるし、肉の切り方ひとつで食感がまるっきり変わってしまう。シェフの総合力が試される、究極の料理の1つなのである。

当然、ここの肉は最高級のプライムビーフだろう。

中でもこれはT字形の骨の右にサーロイン、左にヒレがついてる、至高のステーキ肉だ。

「……」

まず俺は、戦闘時以上の真剣さでステーキを焼くシェフを見据える。

俺の本気度に気づいた黒人シェフは、ヘアスタイルがアフロ……なのはともかく、その眼光は鋭く、本物の目をしてる。

「――焼いてくれ。一番いいのを頼む」

「――ああ、もちろんさ。俺の仕事は、あんたらヒーローに世界を守る活力を――料理で、与える事。つまり俺も、世界を守ってるヒーローなんだ」

……プロだな。言葉から、仕事に対する気高い誇りが感じられる。

太い指で肉をツマミ上げた、アフロは――

ここはショービズの国とあって、目の前で肉を焼き始めてくれる。

――来たぞッ……必要最小限の、かつ、上質な牛脂の弾ける、この香り。

これは俺ら庶民が一生に一度味わえるかどうかの、究極のステーキだ。間違いない。

そしてアフロは金縁の皿に載せたステーキに――冷める暇を与えず、花開かせるようにナイフを入れてカットしていく。美事だ。

「いただくぜ」

「エンジョイしな、兄弟」

皿を受け取り、アフロとカッコ良くサムズアップを交わして去った俺は……

純白のクロスを敷かれた丸テーブルに皿を置いて、フォークとナイフを行儀よく構える。

フーッ……と天井を見上げ、ネクタイを緩め――

「――時は来た」

人生最高の食事を、今――！

と思って、テーブルに目を落とすと……

あれっ……？

無いぞ……！　ステーキが。皿ごと！

「うわー美味しー！　お兄ちゃんエライ！」

「んー、これはAランク肉を使ってるねー」
という声に振り向くと、
はうあっ……！
かなめッ……と、ツクモ……が、テーブルから取った皿からかっ込むようにして、左右から・
気食いしてるよ！　ヒレとサーロインを！
（俺は美味いモノを食えない星の下に生まれついてるのか……？　藍幇城での満漢全席も食えなかったし……）
希少部位なので数があまり無かったTボーンステーキは、かなめとツクモの喧伝により人気の品となって在庫がマッハで瞬殺。
仕事を終えたアフロも、充実した顔でバックヤードに引っ込んじゃったよ。
会場の皆さんにはパフォーマンスだと思われてウケてたが、かなめとツクモに本ギレでボディースラムを20発ずつ喰らわせてる間に——料理も粗方、無くなっちまった。
残ってるのは酒のつまみだけだ。ちょっとスプーンで掬って食ってみたが、キャビアも単体じゃ食えたもんじゃなかったよ。回転寿司のイクラ軍艦の方がまだマシだね。
皿に残されたT字形の骨をハイエナのようにしゃぶるのも飽きたし……
もう、帰りたいんだが。
などとしょぼくれていると、
「……ハイ、ジーサード」
バニーガール……ではないが、なんかそれっぽいコスチュームに黒マントを羽織った、ドロンジョ様みたいなマスクの少女が話しかけてきた。なにやらせっせと前髪を整えて、ちょっとドキドキした感じの笑顔で。
このパーティー会場には、こういうアメコミっぽい服装の正義の味方も点在してたから——衣装には特段驚かないが、急に話しかけられたんで俺は眉を寄せる。
「あれ、違う。なによ紛らわしい。あんた誰」
「……ジーサードの兄だ」
「へー。お兄ちゃんいたんだ。で、ジーサードは？」
ミニドロンジョはキョロキョロとジーサードを探してるので、俺も、探すが……
「あれ？　いないな」
「……ちぇっ」
舌打ちして拗ねた、ミニドロンジョは……よっぽど会いたかったらしい。人気あるなぁ、ジーサード。アイツはアイツで女子にモテるのかな。だが鈍感そうだからなぁ。知らないところで女心を傷つけていないか、兄としては心配だ。
ミニドロンジョも女難系イベントを運んできそうなタイプだったので、教えてはやらなかったが……

どこに行ったかは、なんとなく分かるぞ。
兄貴は弟の事がなんとなく分かるものだからな。最初からあんまりパーティーにノッてなかったし、この場は部下たちの自主性に任せて自分はとんずらしたんだな。
よし、俺もエスケープしよう。

1人でコッソリと黄色いエスカレーターを降り、ハドソンホテルを抜け出すと――
「――来ると思ってたぜ、兄貴」
弟も兄貴の事がなんとなく分かるものらしく、ネオンサインの灯りを背にジーサードが立っていた。
兄貴として、あと2点、弟の隠し事が分かってたので――
「ほんっと、お人好しだよな。お前は」
コートのベルトを締めた俺は、白い溜息を吐く。
「……なんだよそりゃ」
「その2は後で話すが、お人好しその1。このパーティーだよ。部下たちに、再就職先になりそうなコネを作らせてたんだろ？　お前、瑠瑠色金の件で――また、自分が戦死するかもしれないって思ってるのか」
「……まあ……兄貴が相手だから言うが、イエスだ。マッシュは俺より強いんでな」
このジーサードに……そう言わせるほどの、強豪か。今回の敵は。
だがここは兄貴として、こう言ってやらないとな。
「心配すんな。兄ちゃんがついてるから」
俺も乗りかかった船だ。アリアの緋緋色金に繋がる何かを、瑠瑠色金から見つけなきゃならないワケだしな。今は。
タクシーを停めたジーサードの背をポンと叩いて、兄弟並んで後部座席に座り――
色とりどりの英字のネオンサインの光を渡り、ブロードウェイを83丁目で折れて着いた場所は……
「――兄貴は知ってるか？　ここ」
「ああ。『ユー・ガット・メール』で見た。すげえ。メグ・ライアンとトム・ハンクスが出会うシーンそのまんまだ……！」
アッパー・ウェストサイドの、カフェ・ラロ。
知らなければ通り過ぎてしまうような、フレンチスタイルの占い喫茶店だった。
「そりゃそうさ。ここでロケしたんだろうからな」
かなめから俺の映画好きを聞いていたらしいジーサードは、ちょっと階段を上った先にあるドアを開けて店に入っていく。
「あの映画も冬だったんだ。粋だな」

役者が好きだからDVDも持ってる、その映画の舞台に……

まさか、本当に来られるとは。感動だぜ。

「これだ、この席だよ。トム・ハンクスが座ったのは。おいジーサード、ケータイで写真撮ってくれよ」

「兄貴もミーハーだなァ」

と、コーラとグラス2つを手にメグ・ライアンの席についたのは、まあ、弟なんだが。

それにしても、実にいい気分だ。単にハリウッド・スター気分に浸れるだけじゃなく、純粋に名店だよ。カフェ・ラロは。

天井が高くて、内装もクラシックで、落ち着いてる。気に入った。

「ニューヨークには、ニューヨーク時間ってものが流れてる。他の街より物やイベントが多いから、忙しくなる。だが、『忙しい』って字は『心を亡くす』と書くだろ。たまにゃこういう店で時間をゆっくり流さねェと、自分が無くなっちまうのさ」

ぎし、とイスに体を深く沈めて足を伸ばしたジーサードの言う通り……

大都会には面白い物事が多すぎて、それを追っかけ回してるうちにあっという間に時が流れ、気づいたら年寄りになってしまう。とは、東京でも間々言われる事だ。

リサと過ごしたブータンジェは何も無い田舎町だったが、だからなのか時間がゆっくり流れてる感じだった。

たまにはそういう街や、こういう100年前から変わらず在るようなカフェで、時間を緩やかに……穏やかに、過ごすべきなんだろうな。過ごすべき、なんだろうけどな。

――そうもいかないみたいだな。

「で、気づいてるか兄貴」

俺のグラスにコーラを注ぎながら、ジーサードが言う対象を――

そのグラスをバックミラー代わりにして、俺は既に見つけている。

それはハドソンホテルで俺とジーサードを監視していた、奇妙な、少年。

痩せっぽちで、背が低い、中坊ぐらいの白人少年だ。

ビル・ゲイツを子供にしたような風体。頭でっかちで、髪型はマッシュルームみたいな感じ。

高い鼻に載せた金縁メガネには、何やら小さなカメラみたいなものがくっついてる。歯には鈍く光る矯正器具。飾りっ気のないコートとスーツ。手には最新のiPhone。

下手な監視だったから、ずっと気づいちゃいたが……小柄なガキなんで、警戒の必要もなかった。そいつが、ここまでついてきたんだ。尾行も上手くなかったが。

「ああ。ストーカー少年がポテトチップを買ってるな。アイツ、パーティー会場で残り物でも食ってりゃよかったのに」

「ハドソンホテルからも、無粋なのはご退場願わないといけねェだろ。あれはあれで俺の部下たちにとって重要なパーティーなんでな。だから誘い出した」

「お前のお人好しその2は、それだよ」
「――いいか兄貴。アイツに……キレるなよ。せることだ」
「知り合いか？　誰なんだよあれは」
「あれがマッシュだ」
「……っ？」
あの、キノコ少年が……？
ジーサードをボロボロになるまで追い詰めた、マッシュ、だってのか？
「確かに、マッシュルームみたいな頭をしちゃいるが……ジーサード、俺はアメリカン・ジョークは好きじゃないぜ」
「ジョークじゃねえよ。アイツがアメリカで一番強い男さ」
「一番ひ弱な男のマチガイじゃないのか？」
その、マッシュ……は、ポテトチップスの小袋、サルサソースのディップを入れた小皿、それとコーラの小瓶を載せたトレーを手に、ニコニコと――
俺たちのテーブルへ、まっすぐやってきた。
――本当に……このガキが、マッシュだってのか？
俺は鼻がいいから分かるが、コイツからは火薬のニオイが、完全に、全くしないぞ。今までの人生で、いっぺんも発砲した事が無いってレベルで。
「相席、いいかな？」
声が……高い。何がというワケじゃないが、妙に神経に障るタイプの声と喋り方だ。
OKと言われてもいないのに、同じテーブルについた少年は――
「ようこそアメリカへ、ジーセカンド。そして占い腕の調子はどうかな？　ジーサード」
――マッシュなのか。お前が。
「ああ、そうそう。ジーセカンド。キミのバッティングフォームだけど、低めを打つ時はもう少しヘッドを上げた方がいいよ。あと、ジーサードは女性から来たメールを読まずに削除したりしないように」
セントラル・パークで野球をしてた俺を、見てた……のか？
パーティーでの監視には気づいたが、そっちは全く気づかなかったぞ。
ジーサードも携帯の件をどう盗み見られたのか分からないらしく、舌打ちしてる。
この、エノキダケ少年……只者じゃないな。
「どうも初めまして。米国家安全保障局――NSAのマッシュ＝ルーズヴェルトだよ」
銃ダコが見当たらない。きっと、1度も銃を握った事すらない手だ。
甲高い声の挨拶と共に握手を求めてきたその手にも……初心者につく親指の腹や人差し指の拳
俺が握手に応じず3秒きっかり経ったところで、マッシュは笑顔のまま手を引っ込める。

「――キミたち2人は実に素晴らしいね。対照研究に最適だ。より良いデータが取れる、というか、取れてるよ。ありがとう」

コイツが白い顔に掛けてる、メガネの上の装置は――

おそらく、ＨＭＤ。ジーサードが使っていたドラゴンボールのスカウターみたいなヤツよりずっと小型化された、超先端科学の道具だろう。カメラらしき穴もある。

きっと今も撮影してるぞ。俺と、ジーサードを。

「――ＮＳＡってのは何の組織だ。ＦＢＩみたいなもんか」

メガネのカメラを敢えて睨んで俺が尋ねると、

「知らないのかい？　日本でも内閣で創設が検討されてるっていうのに。あと、ちょっと失敬だな。ＦＢＩは小者を1匹ずつ捕まえる、つまらない連中さ。あんな暴力団と一緒にしないでくれたまえ。とはいえ……ボクはこの国の、いわゆる特権階級というヤツでね。米国防総省に行けば准将相当、ニューヨーク市警察に行けば部局長相当、ＣＩＡに行けば技術保障部長級の権限を附与される。どれも庁舎に足を踏み入れた瞬間にね。ＦＢＩとも同様の取り決めがあるから、行けばさっきのキミの質問にはＹＥＳと答えるべきとなる」

ペラペラと、回りくどく、そして実に信じ難いご説明をいただいたが……

ジーサードのふて腐れたような態度から見て、マッシュの発言はマジなんだろう。

俺なりの解釈でいえば、この少年は――外務省の銭形の、スーパー進化版。国家権力の手先どころかその中枢にポストのある、ミニ大統領みたいなヤツって事だ。

この年齢の少年にそんな権力が与えられる、その理由は指で数えるほどもない。

多分――

「――人工天才か。お前も」

「ＩＱの割には推察が早かったね。ご名答だよ。ボクはロスアラモス・エリートの成功例。そこの『Ｇ』シリーズ失敗作・ＧⅢより新しい別コンセプトの遺伝子改良個体――『Ｒ』シリーズの第3子――ＲⅢだ。ああ、安心していいよ。ボクにはキミらの父・遠山金叉のＤＮＡは使われていない。その基準には少しＩＱが不足していたからね、彼は」

ロスアラモス・エリートとは――

優秀な遺伝子を科学的に掛け合わせて超人を作ろうという、米軍の人間兵器計画。

ジーサードやかなめはそれで生み出された、俺の父さんの遺伝子も備える――戦闘力に秀でた弟妹だ。

だがコイツは、別のコンセプトというだけあって……知力に秀でた人間としてＤＮＡをデザインされたんだな。

ＩＴ企業の営業みたいなノリで語るマッシュは、ＨＭＤメガネをクイッと直し――

「さて、ここで挨拶代わりにプレゼンテーションをしてあげよう。テーマは『キミたちがボクに勝てない3つの理由』だ。まずジーセカンド。キミは、アメリカにある二大政党を知っているか

な？」

ポテトチップをつまみ、俺をバカにするように質問してきた。

「そのぐらい知ってる。共和党と……えーっと、あとアレだ。アレだろ？　それはそうと俺の名前は遠山キンジだ。妙な名前で呼ぶな」

「了解した。ではキンジに教えてあげようね。ジーサードの支持層は主に共和党。ボクのバックには民主党がついている。そして今、アメリカの政権与党は民主党だ。アメリカに於けるキミたちの立場は、ボクより弱い」

――ジーサードがオロチ改の車内で分かり易く言ってた『親俺派』と『反俺派』ってのは……政治的な意味合いだったって事か。

「そしてジーサードはＦＢＩの怠慢によって野放しにされている『混沌』であり、ボクは社会的に認められた『法』だ。ジーサードが狂ってロスアラモスを脱走した後も、ボクは着実に成功者の階段を1段1段上がってきたんだよ」

この、マッシュの物言いは……

単純に腹が立つという以上に、ジーサードに対する私怨じみたものも感じる。

「ジーサードの力は、武力。ボクの力は、情報力。情報力は武力より上位にあり、武力を包括・運用するパワーだ。ボクは情報操作1つで、戦争を起こす事も停める事もできる。ジーサードのように自らの武力で戦争を処理・抑止しようという考え方自体が、20世紀のものなんだよ」

「――あァ、その通りだよ。ケッ」

口先ではすっかりお手上げらしいジーサードはコーラを呷り、両脚を投げ出してイスに身を沈めていく。

対照的にマッシュは目を三日月みたいにニヤつかせて、短い背筋を伸ばし――

「――21世紀のヒーローはキミたちじゃない。ボクだ」

新・旧の人工天才では新しい自分の方が優位である説明を、そう締めくくる。

「さて、キンジ。ボクはキミの映像も拝見したけれど――稀代のペテン師といったところかな、キミは」

今度はこっちに矛先を向けてきたマッシュに、俺は眉を寄せる。

「ペテン師だと？」

「弾丸を手掴みにしたり、空対空ミサイルを徒手で弾いたり……アメリカで訓練を受けたジーサードならともかく、平和ボケの日本人にそんな事が出来るワケがない。映像上では出来てたように見えたが、そういうものには大抵トリックがあるものだ。キミは一流武偵企業にでも入りたくて――周囲を騙し、ＳＤＡランクを上げようとしてるんだろう？」

「……そういう事にしていいから、あの人間やめランキングから俺の名前を削除しといてくれよ。ズルしたって事で。お得意の情報操作で、お前なら出来るだろ」

「操作しなくても、すぐに削除されるよ。ボクがキミを殺害すれば」

「……」

「キミたちのお笑いランキングとは別に、ボクら特権階級の少年少女にも厳しい格付けがあってね。管理権限を持つ上院議員に申請すれば――敵対する人工天才や100位以内のSDAランカーの殺害は、実績としてポイントが入るんだよ」

「……俺たちと戦う理由は……出世競争の、点稼ぎかよ？　なりと同じで人間が小さいな、お前。自己中も大概にしろ」

「人の身体的特徴について触れるのはやめたまえ。それと、高い目標地点に到達するには小さな階段を1段ずつ上がっていくのが最短なんだよ。ちなみにキミらの2段を上れば、ボクは次の階――少将相当の地位に立てる」

「立ってどうするんだ」

「アフガニスタン、シリア。その実績で中将に上がって、イラン、北朝鮮。大将で中、露。キミの国・日本にも法整備の後、お手伝い願う事になるかな。特に、後半は」

「……戦争か」

「アメリカによる一極支配の完遂だよ。戦後着々と行われてきた事の仕上げをするだけさ。予定では、ボクはその後――2033年からの任期で、アメリカ史上で最も若い大統領になるつもりだよ。アメリカは建国以来最も強く豊かになり、他の国は全て朝貢国となる」

こんなヤツが大統領になったら……

世界は、終わりだな。

「八紘一宇っつってな。俺たち日本人はそれ系の発想を60年以上前に卒業したんだぞ」

ニンマリ笑って来たるべき未来をペラペラ語るマッシュに、俺はそう吐き捨てる。

「卒業じゃなく退学させたんだよ、ボクらが。試算では、一極支配が完成した年度のダウ平均株価は現在の4・3倍、国民1人あたりの年間所得は今の4・7倍にもなる。キミはボクを自己中心的と語ったが――ボクの出世は、アメリカの利益にも繋がっているんだ」

「ハッキリ言う偽善者もいたもんだぜ」

「偽善も善だよ」

フッ、と、年下のくせに年上のような笑い方をしたマッシュは――

「とはいえ……キンジとジーサードの2人に、ボクはある面では高い信頼を寄せている。だから、貴重な時間を使ってわざわざ出向いたんだよ。ボクはキミたち2人なら、ボクの部下に据えてもいいと思ってるんだ。ジーサードにも改めて官職と相応のポストを与えてあげよう。キンジには米国永住権も付けるよ」

……戦って、殺す前に……俺たちをリクルーティングに来たってワケか。

「誰がお前の家来になんかなるかッ。日本や中国のヤクザにも似たような事を言われたが、どうせ俺を殺し屋か何かに使おうってんだろ？」

「まあそんな所かな。ウサマ＝ビンラディン辺りから始末してもらおうと思ったけど……まあ、

キンジは今の話を断ったという事で了解したよ。ジーサードはどうかな？　キミもボクと一緒に栄光の列車に乗ろう。そしてこの呼びかけは、キミにとって最終列車の発車ベルである事を理解すべきだ」

にべもなく答えた俺から、マッシュはジーサードに偉そうな視線を移したが――

「見送らせてもらうぜ、その列車。俺は他人の敷いたレールの上を行くのは性に合わねえ。というか、もうロスアラモスで懲りたのさ」

その回答で、元からの対立は――よりハッキリしたものになる。

マッシュは3秒かっきり黙ってから……

「もったいない。実に、もったいない」

そこだけキレイな発音の日本語で言い、パチン、と指を鳴らした。

すると……

ギシッ……キシッ……

（……っ……アイツは……ッ）

見覚えのある、小柄な少女が――

キシッ、キシッ、とカフェ・ラロの床板を軋ませて歩いてきた。

そして物も言わず、俺たちのテーブル……マッシュの隣に、着席する。

ぎしぃいッ……と、その少女が掛けた木製のイスが歪む。重い。コートは着ているが、中に重武装を秘匿してるようには見えない。本体が重いんだ。２００kgはある。

――人間じゃないぞ。

「……ＬＯＯ……！」

久々にその名を呼び、俺は思い出す。

ＬＯＯは去年の10月、台場の空き地島で行われた極東戦役の宣戦会議――そこで人型の白兵戦メカに搭乗していた少女だ。

あの二足戦車は米軍御用達しのバルカン砲を運用してたし、それをアリアに破壊されて脱出したＬＯＯは米陸軍の階級章を付けていた。だから出所がアメリカと分かってはいたが……こんな所で、再び会うとはな。

「……」

そして、どうやらカラクリ人形だったらしい事が今ようやく判明したＬＯＯは――

黙ってる。

レキみたいな様子だ。いや、それ以上に人間味がない。

空き地島では、少し頭がアレな印象はあったものの……人のように振る舞っていたのに。

今は、見るからに女性型ロボットという雰囲気だ。バランスを取るためか体が微動しているのは分かるが、整った顔は完全な無表情で――ある種の不気味ささえも感じる。

美少女アニメっぽいセルリアンブルーの髪はあの時のままだが、そういうのに出てくる『ロボ

ット美少女』としては、前見た時より人格プログラムがデグレされたような感じだ。
「これの様子が昨年と違うから、気になるかな？　キンジ」
ＬＯＯ（ルウ）をジロジロ見る俺（おれ）に、マッシュがポテトチップを食べながら喋（しゃべ）りかけてくる。
「あの時は、ルウジーン（LOOGyNe）計画の担当者……つまり、人間が遠隔から操縦していたからね。XGY-12――キミの言うＬＯＯは、遠隔操縦モードでは双方向間（バイラテラル）制御の精度を高めるため人間らしく振る舞うよう設計されてる。日本製の格闘ゲームでも、キャラクターに仕草や表情がある方が瞬間的・感覚的にステータスを把握（はあく）できるだろう？　とはいえ、今これは自律機動中（スタンドアローン）だから、キミらはボクに敵対的な行動を取らない方がいい。これは人工音声を鳴らすのではなく人工咽頭（いんとう）で喋る仕組みでね。舌遣（づか）いのソフトが未発達で不自然さがあるから、自律機動中は喋らないようボクが設定してある」
……軍事用ロボットは、いま米軍が最も開発に注力している兵器の１つ。
人より優（すぐ）れたセンサーを備え、生物・化学戦にも対応でき、そして何より人命の損失を防いで――世論の厭戦（えんせん）ムードを防げるからだ。アメリカはベトナムやソマリアじゃそれでコケたようなもんだからな。マッシュが言ってた今後の征服戦争、その後の一極支配には欠かせないアイテムなのだ。アメリカが世界の陸海空にバラ撒（ま）く、多種多様な無人兵器は。

だが、ＬＯＯは……

流行りの無人航空機や無人地上車輌とは異なり、人型をしている。

重量は本田技研のＡＳＩＭＯよりあるようだが、外観はずっと先進的で、パッと見では人間とほぼ見分けがつかない。さすがアメリカの超先端科学。秘密裡にスゲェもの作ってやがるぜ。

（無機質な感じがするとはいえ、撃つのをためらってしまうような出来だな……だから、わざと女の子型にしてるんだろうけどな）

それに人型なら、人間の使う武器も共用できる。

ＬＯＯは米軍が企図している片側無人戦争へ向けた、過渡期の兵器なんだろう。

「ああ、誤解しないでくれたまえよ。これが少女型なのは、ボクの趣味じゃない。ボクは女性は年上が好みだし、そもそも造ったのは計画担当者だからね――あの時はキミたちの抗争に参加するフリで、ジーサードの殺害に向かわせたらしいんだが……」

自由気ままに喋る、饒舌なマッシュの横で……

一言も喋れずにいるＬＯＯを見てると、何だか、かわいそうに思えてくるな。こいつが機械人形だという事が分かっても――マッシュの都合で、声や心を奪われたようで。

その無表情な目も、まるで『助けて』と言っているようにすら思えてしまう。

この辺は俺の、無機物にも魂を感じてしまう日本人の習性のせいかもしれないけどな。

「……さて、ではそろそろお別れの時刻だね」

甲高い声がイヤで後半はほとんど聞いていなかったが、喋るだけ喋ったマッシュは……ＬＯＯという用心棒が来てから、少し強気なムードになっていた。

今ジーサードに向けている目つきや態度も、さっきより攻撃的だ。

「ジーサード。キミと別れる前に、これだけは直接言っておかなければならない。ボクが敬愛していたサラ博士が亡くなったのは――キミのせいだ」

神経を逆撫でするような声と口調で放たれた、その言葉に――

俺同様マッシュの話を聞き流し気味だったジーサードが、ピクッ……と反応した。

――サラ博士。それはジーサードが自然の摂理に逆らい、色金の力を使ってまで甦らせようとしている女性の名だ。

彼女はジーサードの訓練中の事故で亡くなっており、それを自分のせいと断じたジーサードは……生まれ故郷の研究所から脱走している。

そして、俺は知っているが――ジーサードは……

彼女を、愛していた。

「キミがもっと強ければ、サラ博士を救う事もできたのになぁ。彼女がまだ生きていたら、未来の大統領夫人として早い内から取り立ててあげてもよかったのに。もったいない」

マッシュのセリフに、ジーサードはテーブルの上でグラスを強く握り始める。

そのグラスに、ビシッ、という音と共にヒビが入った。

「故人を貶める発言は、最もよくある低レベルな挑発の1つだ。乗るな、ジーサード」
ジーサードの手を押さえて、注意する俺だが……そう言う俺も、キレそうだぜ。
いくら対立してる相手に対してでも、言っていい事と悪い事があるだろ。
そんな俺たちの怒りを、涼風のようにスルーしたマッシュは……
「そうそう。先日ボクはキミたちと戦う想定で200回のシミュレーション演算を行った。結果はボクの199勝、1引き分け、無敗。つまり勝率99・5%だったよ」
細い指を、パキパキと動かしてる。脳ミソの中のスマートフォンをつつくように。
「『政治的優位性』、『法と混沌という立場』に加え――キミたちがボクに勝てない3つの理由、その3つ目にして最大の理由を、最後に教えてあげよう。簡単な理由だよ。それはキミたちの頭が悪いからだ。キンジのIQは100といったところ、ジーサードのIQは192らしいが、ボクのIQは407あるからね」
……偏差値50アンダーの高校に通ってる俺だが、改めて言われると腹が立つな。
なんかマッシュはそろそろ帰りそうなムードだし……
少し、言い返してやらないと気が済まん。
「マッシュ、聞け――武偵にはこういう言い習わしがあるんだ。うまく力を合わせれば、1＋1は3にも4にもなる」
「なるほど頭が悪いな。算数もできないのかいキンジ」
「モノの喩えが分からねーお前の方が頭悪いだろ。今のはつまり、こっちには数字を超越した……その、何かがあるって意味だ。それとIQが400か知らんが、俺が100なら、俺が4人いて相談しながら考えてるようなもんだろ。大した事ねえ」
知力がウリの人工天才の舌戦に応じた、俺を……
「あ、兄貴、あんまり喋るな。アホがバレる」
呆れて怒りを忘れてしまったような感じで、ジーサードが宥める。
「いいや、3つ言われたから3つ言い返してやる。『落ちこぼれの方がエリートより良い3つの理由』だ。俺らみたいな落ちこぼれは、たとえ負けても失う地位がそもそもない。だがポストのあるヤツは失脚する。マッシュ、お前だってエリート階段をただ上ってきただけじゃないだろ。失敗したら、階段を下ろされたハズだッ」
言ってちょっと虚しくなってきたが、俺がそうまくし立てると――
「うーん。今までの人生で失敗したり負けたりした事がないから、分からないな」
想定外の形で、いなされてしまった。
「……で、キンジ。あと2つの理由は何だい？」
いけね。つい勢いで3つって言っちゃってたけど、考えてなかったよ。あと2つ。喋りながら思いつくかなとも思ったけど、IQ100じゃ思いつかなかった。
「……あー、その……」

「……プッ。キミはユーモアのセンスはあったみたいだな。そこはボクの計算外だった」
「よっぽど……計算が得意みたいだがな、それならさっきのシミュレーション計算を検算してやるぜ。今、ここで。マチガイ計算だって、すぐ分かるだろうよ」
さっきから怒り心頭だった俺は、とうとうバカの証＝腕力に訴えようとする。
ＬＯＯがいる事も忘れて、グイッ、とマッシュのネクタイを掴んで引き寄せると――
「――はッ。殴るのか！　いいだろう、殴りたまえ。ボクは殴り返さない。勝てるワケがないからね。こんなやせっぽちを殴りたければ、殴ればいいさァ」
大仰な仕草で、ちょっとメガネがズレたマッシュが女みたいな金切り声を上げてくる。
「……よせ兄貴。ここでこれを殴ってもカッコつかねえし、逮捕されるだけだぞ」
俺の腕を、ジーサードの右手が止める。
きっと自分の方が、もっとハラワタが煮えくり返ってるだろうに。
「……ッ……」
ぐぬぬ……
確かに、こんなエノキダケを一方的に殴り倒してたら俺の男が下がる。弱い者イジメだ。
あとジーサードが視線で示してくれたが、窓の外にはいつの間にかニューヨーク市警の私服警官と思われる男が数人いる。マッシュがコネを使って呼びつけてたんだな。
今の俺はヒステリアモードでも何でもない。ジーサードもだ。
逮捕されちまったら、アリアのために瑠瑠色金を奪うどころじゃなくなってしまう。
「確かに、キミはボクより腕力があるだろう。ジーサードだってトップ・エージェントが何人もので、仕方なしに俺がマッシュを放すと――
挑み――誰も帰ってこなかったような、豪腕だ。だからボクはキミたちと直接戦うような愚行はしないのさ」
マッシュはメガネとネクタイを神経質そうに直し、短い足で席を立つ。
「じゃあ、生きているキミたちとはここでお別れだ。次キミらを見る時は、死体袋で眠る姿を見る。ネバダのエリア51、第89Ａ管理区でね。ボクはキミたちが狙う瑠瑠色金の在るそこを自ら申請して防衛しているから、予定通り会いにおいで。戦闘中に投降した場合は、ボクが今まで送り込んだ荒くれどもが沢山いる刑務所での楽しいバカンスをお約束するよ。ジーサード君も、身辺整理をしておきたまえ。キミを始末したらすぐ、あのビルもボクが法的に差し押さえてあげよう。キミが金を流している学校も差し押さえる」
「――マッシュお前、ジーサードの学校を潰す気かよ。子供たちに罪は無いだろ！」
「知った事じゃないね。この国では権力と金が全てだ。万一キミが生き残ったら、権力に訴えたまえ、金を使いたまえ。その力がボク以上なら、ボクのジーサードの部下たちへの厭がらせも停められるだろう。ああ、ただ、あの可愛いシスターだけは――ボクが秘書にもらってやってもいい」

このゲスな物言いには、とうとう俺も堪忍袋の緒が切れて……ガシッ！　と、市警察も逮捕も忘れて、立ち去ろうとしたマッシュの腕を再び掴んでしまった。
「おい待てッ。言いたい放題言わせて、それをタダで帰すほど俺は心が広くは――」
マッシュの腕を掴む、俺の腕を――バシッ――と、ＬＯＯの手が掴んだ。
座ったまま、視線を虚空に向けたままで。
その細腕が、グッ……グッ……と力を込めてくる。
（う、うっ……！）
やはり人間の握力じゃないぞ。アリアより、蘭豹より、兄さんよりも強い……！
「――兄貴ッ！」
「……ぐッ……あっ！」
万力のようなＬＯＯの力で、前腕の筋肉と骨を握り潰されそうになり……ジーサードが左の義手を出してきた辺りで、俺の手が自然に開いてしまった。
俺がマッシュを放したと認識したＬＯＯは、俺の手を放し……
マッシュが、パシッ、と痛む俺の腕を手の甲で叩いた。
「――汚い手で触れるな、黄色い羊」
日本人を侮辱する言葉を残し、マッシュは店を出ていき……
痛む腕を押さえる俺と、その傍らで俺を守るように立つジーサードには目もくれず――マッシュの後ろを、ＬＯＯが歩いていった。
２人を見送る事しかできない、俺とジーサードは……
最終的にはあの小男に圧倒されてしまった形となり、言葉もない。
（マッシュ＝ルーズヴェルト……）
あれは、今までに無かったタイプの敵。
自ら手を下す事をせず、知力だけで俺たちに挑んできた。圧倒的な政治力を持ち、国家権力――そこに含まれる武力、すなわち警察力や軍事力を手足のように使っている。
そのマッシュに、まさに羊のように手も足も出なかった俺だが……
覚えとけよ。羊は弱いイメージがあるかもしれんが、水牛並みに堅いツノと蹄を持ち、頭突きや蹴りで狼を殺す事だってあるんだ。ニュージーランドじゃ家畜の中で最も危険な、最も多くの人間を傷つけた動物という記録も持ってるぞ。その底力を思い知らせてやるぜ。いち、羊としてな。
すっかり気分を害され、カフェ・ラロから寒い夜道に出て……
「……あんな敵がいるとはな……世界は広いよ。同じアメリカ人でも、お前みたいに直接殴りかかってくる方がまだマシだったぜ」
白い息と共に、なぜかタクシーを拾わないジーサードにそうボヤく。

「……おい兄貴、こっちから帰るぞ」
少し拗ねるような感じで、ブロードウェイへ歩き出したジーサードのすぐ先には――
白いロールスロイス・ファンタムと、恭しく俺たちを出迎えるアンガスがいた。
消えた俺たちを探して、このジーサード行きつけのカフェに行き当たってたらしいな。
「お帰りは交通量の多い道で行きましょう。万一の際も、市警は市民を撃てませんから」
どっちが悪人か分からなくなるような事を言う、タキシードのアンガスだが……
警察もマッシュの手先みたいなもんだし、その方が無難かもな。
今の服装通り、まさにニューヨーク・ギャングみたいな発想だけど。
「アンガスてめぇ、パーティーをサボりやがって」
街灯の下で腰に手をあて胸を張り、アリア式に怒りのポーズを取るジーサードに、
「お叱りはいかようにも。しかし私はサード様と共に生き、共に死ぬと定めましたゆえ」
ヒーローのパーティーに連れていかれた理由を見抜いていたらしいアンガスは、歪んだ顔を穏
やかに微笑ませている。
「……ケッ。勝手にしやがれ。おい、トマト出せ」
それにジーサードは赤くなって、八つ当たり気味に――これもアリアと同じムチャ振りをして
る。だが子分としての格が俺とは違うアンガスは、チーフに包んだトマトを手品のようにご提
供。デキる男だね。俺だったら「ももまん」「ねーよ」「無能！」からの風穴ダンスを踊らされ
てるとこだよ。
「私も会話は盗聴しておりましたが、愚かでしたな。マッシュ＝ルーズヴェルトは」
ムシャムシャと帯ごとトマトを食べるジーサードの傍らで、アンガスがまた笑う。
「……愚か？　アイツのＩＱは４００とかだぞ？」
ちょっと気弱になっていた俺がそう言うと、
「知能指数が高くとも愚かな者は、陸軍の上層部にも大勢おりましたよ。しかしマッシュほどの
愚か者はなかなかおりません。サード様を、己の下につけようなどと……」
部下の中でもジーサードへの忠誠心が特に高いアンガス的には、どうもそこが一番気に食わな
かったらしい。
「サード様を一所に縛っておく事など、大統領にもできませぬよ。サード様は、光。光を縛るこ
となど、この世の誰にできましょうか」
「……」
トマトを食ったせいじゃないだろうが、真っ赤になったジーサードは……けりっ。
街灯にツヤ光りする革靴の先で、ちょっとアンガスのスネを蹴って何かを促した。
それで振り返った、アンガスの背後には……
濃紺一色のニューヨーク市警制服をピッチリ着た、太った黒人のオバチャン婦警さんが立って
いた。片手には、違反切符と思われるオレンジの紙をヒラヒラさせて。

「――アンタ、この車。ここ、駐車禁止だよ」
ロールスロイスを警棒で示し、ちょっと怒った顔をした婦警さんから……
「おお、これは。存じておりましたが、主のため停めてしまいました」
アンガスが恥ずかしそうに、切符を受け取ろうとする。
が、婦警さんは切符をヒョイと引っ込め、
「今夜は見逃しとく。クソ寒い中そこで私的な警備をさせられた同僚が言ってたけど、『マッシュはクソ野郎で、警戒対象のあんたらの方がまだイイモノっぽかった』みたいだからね。はい、早く車をどかしな」
小さく笑って、俺たちに融通を利かせてくれた。
……その粋な計らいに、俺も苦笑いしてしまう。
マッシュは『この国では権力と金が全てだ』なんて言ってたが――
アメリカは、そんなに狭量な国じゃないって事だ。そこはちょっと、安心したよ。

5弾　With ありがとうな、Enable 兄貴

翌日の日没後、再び訪れたJ・F・ケネディ空港にて――

プロペラ端に蛍光グリーン光を点したサジタリウスの前に、ジーサード、俺、かなめの遠山きょうだいと、アトラス、コリンズ、ツクモ、ロカの部下たちが並ぶ。機内には既にアンガスが搭乗している。

回転翼を軽く回し、黄緑の光輪を4つ描くティルトローター機を背に……ジーサードが、横一列に整列した部下たちへと振り返った。

「今からネバダ州グレーム・レイク空軍基地――通称『エリア51』、第89A管理区を再度強襲する。目的は瑠瑠色金の奪取。理由は俺の私利私欲、それとそれに比べりゃちっぽけだが、神崎・H・アリアの緋緋神化に伴う世界戦争を未然に防ぐためでもある」

世界より自分。本当にジーサードは天上天下唯我独尊だな。

まあ、それもツンデレ族が言う場合は真に受けちゃいけないんだけど。

「空路は親俺派の州と地域を辿るが、一部、特にユタ州・ネバダ州では反俺派の勢力地の上空を飛ばざるを得ない。そこでは前回同様、NSAのマッシュ＝ルーズヴェルトによる妨害が予測される。マッシュは与党に可愛がられちゃいるが、他国の自由を冒涜する者。それがどこの国であろうと、人民の自由を冒涜する者はアメリカの国賊だ。心おきなく、そして腹ァ括ってかかれッ。以上ッ！　――質問はあるか？」

珍しく部下の意見を聞こうとしたジーサードに、まずツクモが手を挙げる。

「……兵装は整えましたが、前回と同じです。いえ、むしろサード様は前回失った装備を占い予備で補っており、おケガも完全に回復なさっておらず、万全とは言えません」

「だから何だ」

「その……不利です！　マッシュの超先端科学に――あの大兵力にこれだけの火力で挑むなんて、狂気の沙汰ですよ！」

言い方はともかく、『大好きなジーサード様が心配』と目に書いてあるツクモに――

「その通りだッ！　正しい事を言ったお前には、後でボーナスをやろう」

ジーサードは高笑いを返して、諫言を一蹴。

ポカーンとするツクモの隣で、次に超能力女子のロカが挙手した。

「ねえサード。マッシュを殺したらボーナスくれる？　来週ブレゲの懐中時計を落としにオークション行くんだけどさ、軍資金がちょっと心もとないんだよね」

「ブレゲか。あれは美しいよな。よし、やらんこともないぞ」

眼を$マークにしてガッツポーズしてるロカは……時計のコレクターだからな。

美術品趣味を理解してくれて金払いもいいジーサードに、付き従ってるってワケか。

「上官、副操縦士として質問であります！　サジタリウスの光屈折迷彩はどうしますか」

「一応、掛けとけ。熱源もあるから消えるだけムダだろうけどな」
敬礼して質問したアトラスと、答えるジーサードは進撃前提で話を進めてるが……
「おい、ジーサード。俺はツクモと同意見だぞ。どうせ迎撃を受ける航路に、前回負けた兵装で改めて突っこむとか、無謀すぎるだろ。新しい作戦の説明とかはしないのか」
俺が横からジーサードの耳を掴んで尋ねると、
「ってぇな。東京でも言ったろ、作戦なんかねェよ。とにかく全戦力を固めて突き進む。敵は、出たらブッ倒すだけだ」
マッシュにアホ呼ばわりされるのも納得のジーサード発言に、ツクモが泣きそうな顔をしてするとジーサードは俺の手を払い、ツクモにシリアス顔で――
「分かりましたサード様、ツクモも一緒に玉砕いたしますっ」と声を上げてる。
「――冗談だ。作戦はある」
と、頼もしく胸を張った。
なんだよ心配させやがって。もったいつけず最初から教えろよそれ。
「今回の作戦は――『兄貴になんとかしてもらう』。これで決まりだ」
ばんっ、と俺の背中を叩き、白い歯を見せて笑ったジーサードに……部下たちは「あー、なるほど！」的に納得した顔をした。こ、こいつら……！
「確かにキンジは殺しても死なない、ゲームキャラみたいな最終兵器だもんね」
「おいロカっ、それは俺のことか。よし、お前から殴る。あと、いま納得したヤツは全員鉄拳制裁だ。俺はアンガスが調製してくれた着込みプロテクターを付けてる。マッハ1の桜花を1人1発ずつ試し打ちさせろ」
爺ちゃん式に、旧日本軍の鬼軍曹みたいな事を言う俺の首根っこを――
ジーサードが掴んで、引き止める。
「悪ィなお前ら。エリア51の瑠瑠色金は冷戦時代にソ連のエージェントが盗みに来たり、アメリカ国内の強盗も大勢挑んだが、誰も取れなかったお宝なんだ。いっぺん俺も黒星を付けられちまったしよォ。だから今回は、もうこういうオカルトに頼るしかねーのさ」
「俺をオカルト呼ばわりするなっ！　人工天才のくせに、もうちょっとマシな方法は考えられねーのか！　だいたいそんな、いくら何でも不可能だろッ、世界の誰も破れなかったような空軍基地に――」
「――いや、世界で言えば1人いたぜ。エリア51から極微量の瑠瑠色金を盗めたヤツが。誰だ」
「……い、いるのか。そんな、米軍基地からお宝を盗めたヤツが」
「アルセーヌ・リュパン3世だ。優秀な仲間はいたらしいが、軍の記録が正しけりゃ彼のチームはたったの4人でな。武装も銃と刀だけだったらしい。だから、今回の布陣はそれよりゃ厚いって事よ」
理子の……オヤジさんか。

そういえば、理子が持っていた十字架は――緋緋色金と同族異種の金属を極微量に含む合金製だとシャーロックが言っていた。

それは、エリア51から盗まれた瑠瑠色金だったのか。

「このバカ兄貴は自分の2つ名も忘れて、『不可能』と言ったがな」

俺を放したジーサードは、改めて部下たちに腕組みして胸を張る。

「いいか。不可能という概念は、悪霊のようなもんだ。人間の心に取り憑いて、心を挫く。前に不可能だった事に再び挑むのは、他人には愚かしく思えるかもしれねェ。だが、そう思う事こそが愚かだッ。確かに今回成功する保証は無え。だが、ダメだったらまた挑む。俺が死のうと兄貴が挑む。その次もあるだろう。挑むんだ、何度でも。何度でも、無限に挑み続ける相手を前に、永久に戦い続けられる敵はいない。たとえ悪霊といえども、その例外じゃねえんだ」

部下を鼓舞する、ジーサードの言葉には――

――言葉を超えた、何らかの力がある。

「古来人類は数多の不可能を可能にしてきた。海を渡り、空を飛び、月に着陸してきた。今また、俺たちが不可能を可能にする。誰も、それを見てはいないだろう。密かに世界を救ったとこ ろで、誰の称賛も得られないだろう。だがそんな事は気にするな。必ず、俺が見届ける。お前自身も、お前が成し遂げる姿を、必ず見届けろ。やるぞ。今日、俺たちはエリア51に到達して、コロンブスに、リンドバーグに、アームストロングになる。全ての不可能に於いて、いつか誰かがなるんだ。それが今だ。それが俺たちだッ！」

――そうか。そういう事か。やっと、分かったよ。

部下たちの一糸乱れぬ「応！」という鬨の声の中、俺はようやく気づく。

ジーサードが俺を引き入れたのは、単に俺の戦力を過信しての事じゃない。

あまりにも不可能に思えるこの戦いに、『咎』を――不可能を可能にする、その象徴として入れたんだ。ジーサード同盟の絆の結束を強め、1＋1＋1……を、無限大に大きくするために。

そうとあっちゃ……

このこっ恥ずかしい2つ名を持つ兄貴としても、ネガティブな事はもう言えないな。

――行くぞ。エリア51。待ってろよ、瑠瑠色金。そして――朗報を待ってろよ、アリア。

サジタリウスが、時速620kmの最高速で低空を夜間飛行する。

窓から見上げた満天の星空は、大地から舞う微細な砂埃のせいか通常より瞬いて見える。

まるでアニメの宇宙空間や、プラネタリウムの中を飛行しているような感覚だ。

地表は、街道の灯りが希に見える以外は暗黒。地平線の凸凹は、彼方の巨大な岩山だ。

親ジーサード的な地域は、大まかには州で、細かくは郡で存在している。俺たちはその上空かつ人口密度の低い区域を、細かなターンを繰り返して進む。忍者みたいだな。

……ペンシルバニア、オハイオ、イリノイ……

大型の半透明ディスプレイに表示された全米地図上を、GPSで測位された現在位置の光点がジリジリ移動していく。

マッシュ側も……夜戦はしたくないのか、攻めてこない。

オスプレイとハーキュリーズを掛け合わせてガンシップ化したようなサジタリウスは、赤外線センサー、測距レーダー、精密射撃用の火器管制コンピュータを搭載し、機関砲や榴弾砲で重武装している。向こうも迂闊には手出しして来れないだろう。

交代で仮眠を取りながら、中西部標準時の0時過ぎにはミシシッピ川を越え……西部を飛びに飛んで……敵対的なハズのユタ州上空に入る。が、ここも無事に進んでいく……

ソファーに掛け、腕組みして目を閉じているジーサードは——どうやるのかは知らんが右脳と左脳を交互に眠らせる事ができるらしく、仮眠中でも話しかければ反応する。ので、

「もう行程の9割ぐらい来たな。何の問題も無かった。静かなもんだ」

と、向かいのソファーから俺が言うと——

「——静かすぎる。こういう時はむしろ危ねェもんだ」

ピリピリしたムードで、そう返してきた。

だがその警戒も取り越し苦労だったようで、なんと俺たちは一晩中いっぺんも接敵すること無く——ネバダ州上空に入ることができた。

なんならこのまま、エリア51にスルッと着陸させてもらえそうな気さえしてきたぞ。

「夜明けだ……」

ツクモが呟き、窓の外では——東の地平、俺たちの後方から光が差し込んできた。

眼下には、黄土色の砂漠地帯が照らし出される。砂漠といっても日本人がイメージするサハラ砂漠などとは異なり、岩がちで、乾燥に適応した植物もまばらに見られる砂漠だ。

刻一刻と眩しくなっていく太陽の光に、かなめが窓にサングラスのフィルムを重ねようとした時——

——バッ、とイスから立ち上がって駆け寄ったジーサードが、それを止めた。

「……レーダー、赤外線！」

そして外を睨み、インカムに怒鳴っている。

『い、異常無しでありますッ！』

『いや、たった今——6時方向にノイズ・レベルの捕捉反応が明滅……！』

ユタ州に入ってからは2人で操縦していたアトラスとアンガスが、機内へと矢継ぎ早に報告してくる。

6時方向と聞いてすぐ、ロカがディスプレイ内で分割表示されている機外カメラの映像、そのサジタリウス後方のウィンドウを覗き込む。

俺もそれを見るが、画面は日の出のせいでほとんどホワイト・アウトしている。輝度を調節し

ても見えにくい映像には、岩山の輪郭が見えるぐらいだ。

「そいつは超小型ステルス機だ！　低高度監視！　山岳死角飛行で15秒前に発進して――1機尾けてきてるぞッ！　それともう1機――音……直上ッ！」

レーダーより敏感な耳と直観を持つらしいジーサードは、続いて真上を見る。

「――榴弾砲用意！　取り舵回避しろォッ！」

ジーサードの一喝に『了解ッ！』という叫びを返し、アトラスとアンガスは機体を左に激しく傾斜させて旋回運動に入った。

かなめが俺のベルトを掴んで支え、転倒したツクモやコリンズが回転受け身を取る。

『捕捉！　回り込んで来るであります！　7時方向および直上高高度より――本機方向へ反応2！　うっ……7時に熱源発生！　ATAS！』

やられたッ、いつの間にかL字2方向から狙われてる！

どちらもレーダーや目視で捕捉されないよう、片方は山影から太陽を背に、もう片方は真上から攻めてきやがったんだ。

サジタリウスのような作戦機は、直上の監視が甘い。敵戦闘機――現代のジェット機は機体や空気流入に障害が起きないよう、極端な急降下攻撃をしないからだ。

ジーサードは直上からの急降下攻撃は回避、真後ろからの追尾は迎撃しようと判断したらしい――しかし。

旋回で榴弾砲を向けたハズなのに、敵の機影を誰も目視できない。敵も通常のステルス性能に、光屈折迷彩を併用してるんだ。

だが熱源を頼りに、サジタリウスの砲が火を吹く――より早く、こっちの尾翼・右翼に、激しい衝撃が生じた。これは、ステルス機から放たれた誘導弾――ッ!?

「――きゃあああああっ！」

ロカの悲鳴が響く中、俺たちはパチンコの玉のように機内を転がされ――

破滅的なダメージを被ったサジタリウスは、激しく震動しながら降下し出した。だが、真っ逆さまに墜落する感じではない。片肺飛行だが、まだなんとか飛んでいる。

とはいえ……迷走飛行だ。失速するほどじゃないが、機体の傾きを修正できていない。螺旋を描くように飛び、元から低かった高度をジリジリ下げている状態だ。

窓の外は煙だけでなく、右翼から上がる火炎で地獄絵図と化してる。

『1号エンジン大破。2号中破。3、4号、正常。右垂直尾翼全失、右翼の損害激しく、1番プロップ全失。操縦不能。油圧降下。全プロップ、60度より戻りません。目的地より120マイルほど手前ではございますが、もう降りましょう。ギアダウン不能ですので、不時着します。サード様、お手を煩わせてしまい恐縮ですが……お召し物が汚れぬよう、お飲み物をお片付け下さい』

警報が鳴り響くコクピットでもアンガスは落ち着いていたが、歪んで気密の破れた機内には火災の黒煙が流れ込んでくる。

激しく咳き込み、パニックになりかけるツクモやロカたちに――

「――気をつけェい！　うろたえるな！　耐衝撃姿勢！」

ジーサードが活を入れる。

部下たちはシャキッと背筋を正し、それぞれ壁に張り付いて手すりに掴まったが……

「お兄ちゃん、こわいよう」

かなめはこんな時でも、明らかに怖がるフリと分かる仕草で俺の腕に抱きついて両胸を押しつけてきてる。何やってんだよホント、お前は。30秒後に死ぬかもしれないってのに。

（……やっぱり、無謀だったか）

最後にはブルースクリーンになってしまったディスプレイの地図を横目に、俺が溜息をついた時……ドオオオオオオオオオオオッ――――！

左翼プロペラが地面を抉る爆音が鳴り響き、大きく右側に跳ね上がったサジタリウスはほぼ横転する形で砂漠に不時着するのだった。

アンガスはサジタリウスを爆発させる事もなく、墜落と不時着の間ぐらいに留めていた。

おかげで乗員は全員ほぼ無傷で、揃って軽傷を負ったに留まった。武偵高じゃ、かすり傷と呼ばれるレベルだ。俺も、インナー・プロテクターのおかげで軽傷で済んでいる。

しかし……サジタリウス自体は、完全に破壊されてしまった。搭載していた砲も全壊し、俺たちの火力は一気に落ちた形になる。

後方から尾翼に当てられたのは、何らかの、見えない攻撃機から放たれた空対空誘導弾。直上から右翼に喰らったのは、これも何らかの、低速で熱源の無い質量物。

どちらも正体は杳として知れない。こうなると超先端科学兵装は魔術と変わらんな。

ジーサードが蹴り開けたハッチから、機外に降りると……

周囲は恐ろしく乾燥していて、風に埃のような砂が舞っており、目が痛む。

砂漠といえば暑いイメージがあったが、寒い。気温は8度ほどだ。

冬の砂浜から水分を、切奪ったような――日本には有りえない、過酷な環境だ。それが地の果てまで続いている。足下には思ったより植物が生えているが、どれも枯れていると見紛うほどカラカラの草だ。

赤茶色の大地の地平線には、青黒い山が見える。標高は低そうだが……山というより、巨岩と言った方が正しいのかもしれない。

（これが、アメリカの砂漠……）

西部劇の映画じゃお馴染みだったが、実物は圧倒的だ。
一言で言って――地獄だな。あらゆる命を拒むような、まさに不毛地帯だよ。
だが、
「よし。前回よりは近づけたぜ」
サジタリウスの瓦礫を背にエリア51の方を睨むジーサードは、額から血い流してんのに笑顔。このポジティブシンキングっぷり、理子並だね。
それに呆れながら、俺も手伝ったが……部下たちはテキパキと、壊れた機内から食糧と水、武器弾薬を引っ張り出していく。
「この人数ですと――水は1日分、食糧は2日分しか無事なものがございませんな。ただ、地上戦に堪えうる武器弾薬、爆薬、アトラスのPA・AA・Aが無事だったのは僥倖。それとこれも、適合車を調達できずとも……敵地に火付けをするダイナマイト代わりにはなりましょう」
アンガスは今や無用の長物っぽいNOS燃料……ニューヨークでオロチに搭載されてた加速燃料のパッケージを持ち、皆が集めた物資を前にそんな見積もりを語る。そして、
「全て自分が運ぶであります」
無事だった科学甲冑を着込んだアトラスが、専用の背嚢にそれらを搭載していく。
ドラグノフを肩掛けして、乾いた風にスカートをヒラつかせつつ、普段通りボケーッと突っ立ってるレキだけでなく……
GPSで測量を始めたツクモも、かなめと共にサジタリウスの自爆準備を進めるロカも、砂地にひれ伏して遅めの早朝の礼拝を始めたコリンズも、皆、淡々としてる。
こんな所で孤立無援になった絶体絶命の状況にも、全く不安を感じていない様子だ。
ジーサードという、絶対的なリーダーが生きてる以上――何があっても平気だという、強い信頼があるんだな。それか、ジーサードとならば心中しても本望だという覚悟かもな。
カラになった機体から離れた俺たちは、サジタリウスを自爆させ……こうなっちまえば神頼みも大事なので、コリンズの礼拝が終わるのを待つ事にした。
（俺だけ絶望ムードってのも、周りに悪いよな）
と、俺はレキと並んで地べたに体育座りし……
周囲に、面白い話題になりそうな物が何か無いか見回す。
すぐ、カサカサ音を立てて風に転がっていく何だか分からんワラの塊のようなもの――西部劇でお馴染みのアレを発見したんだが、別にテンションは上がらない。あれは決闘の前に転がるから風情があるわけで、遭難した身空で見かけてもお先真っ暗感が増すだけだ。
しかもあれはレキの地元にも転がってたらしく、「見ろよ、アレがあるぞ、アレが」と指さしたら「タンブルウィード……」とか逆に名前を教わっちゃったし。
かなめに双眼鏡を借りて、さらに辺りを見てると……

あーあ。見つけちゃったよ。これも定番の、死んだ牛か何かの骸骨。食い荒らす動物もいないのか、カラッカラの皮が張り付いてら。

そんな、草のボールと牛のミイラしか見つけられなかった役立たずの俺とは異なり――

「エリア51まで、直線距離で１９０km……チョーク・チェリー山地等を避けると、道のり、約２００kmです」

ツクモはタブレット端末を手に、現在地をジーサードに報告してる。

だが、２００kmって。東京～静岡間より遠いじゃねーか。

歩いて行ける距離じゃないぞ、こんな冥界みたいなフィールドじゃなくたって。

でもジーサードなら「よし、行軍！　死んだヤツはその場に置いていく」とか言い出しかねん。ツンデレ族はツン時にはブラック企業の社長なみに家来にムリを強いるからな。

アリアで痛いほどそれを思い知っている俺は、レキの頭も手で向きを変えさせ、ジト目４つでジーサードに無言の圧力をかける。

そんな中……

太陽に頭をつける礼拝から起き上がったコリンズが、

「……サード。ちょっと。あんたの耳なら分かるかも」

と、地面を指し示す。

そう言われたジーサードは、地面に伏せて耳をつけ……

……10秒……20秒……何やら、音を聞いている。

そして起き上がると、やや南寄りの西を義手の親指で指した。

「――こっちだ。歩くぞ。人工物で風が遮られてる、微かな音がする」

北海道の３倍以上の広さがある、ほぼ全土が砂漠地帯のネバダ州――

そこを、歩く。

行路の起伏が緩やかな事と、冬なので日中も気温が20度弱までしか上がらなかった事は不幸中の幸いだが……乾燥は、耐え難い。

１時間も歩かないうちに髪はバサバサに、顔や手の露出した肌はカサカサになっていく。服や顔にはパウダーのように細かい砂粒が張り付き、まるで自分が少しずつ砂に変わっていくような錯覚さえしてしまう。

喉の渇きは狂いそうなほどで、俺たちは適時ちょっとずつ水を分け合って飲むのだが……ジーサードは飲むフリだけして、一滴も飲まないな。自分の分も部下にやろうってのは見上げたもんだが、そんなんじゃお前がバテるぞ？

砂と同じ色で見分けがつかなかったガラガラヘビを俺が踏んづけてしまい、意外とハイスピードで追ってくるヘビからダッシュで逃げ回るなどの集団コントをやってる間に……

……日が暮れてしまった。

日没後の砂漠は、氷点下になろうかって勢いで気温がぐんぐん下がる。

白い息を吐き、震えながら――ジーサードの耳を頼りに星空の下を歩いて、深夜11時になった頃。

町が……

あるには、あった。

だがそこは半ば砂に埋まりかけた、いわゆるゴーストタウンだったのだ。

まあ場所柄、そんなこったろうと半分は思ってたけどな。

日本なら風雨でとっくに腐り果てているだろう、70～80年は前に無人化したと思われる町……さっきの牛と同様ミイラみたいな状態で砂漠に残った、西部劇の時代の遺跡だ。

廃墟の数から見て、人がいた頃の人口は200人を数えただろう。倒壊しているものがほとんどだが、幾つかの建造物はまだ原形を留めている。

町の中心には特に1つ、大きな倉庫のような謎の建物があり……どうやらこの町はその施設にまつわる人々が住むため、西部開拓時代に出来た町と思われた。だが、それも時と共に不要になって過疎化していき、最終的には町ごと打ち棄てられたカンジだ。

「ここなら入れそうだよ」

かなめが示した、往時はリアルにカウボーイのバーだったと思われる『Hilton's Bar』に皆で入り……アトラスがライトを吊してボロボロの屋内を照らすが……中は、砂だらけだ。

すきま風も入り込み放題だし、寒さも外と大差ない。

とはいえ、吹きっさらしの外で野宿するよりはマシかな？　ってとこだ。

「――今夜は、ここで宿営とする。各自レーションはタイプ1。休めッ」

一同に命令すると、ジーサードは手頃なイスを持ち上げて砂を払う。

ロカ・ツクモ・かなめの女子たちは店の片隅で年代物のピンボールを発見して「やった、まだ動く！」とかキャッキャしてる。レキもそれを覗き込んでるが、ノンキだなお前ら。俺たちゃ遭難者みたいな状態で、敵地めざして無補給行軍の真っ最中なんだぞ。

と、苛立ってるのは俺だけらしく――

「なんと。1934年物のバーボンがございました。状態も良い。ご賞味いただけますよ、サード様。残念ながらチェイサーのビールは御座いませんが、さて、グラスは……」

アンガスはバーカウンターの奥で、砂を払ったスーツ姿で棚を物色中。

「やだわー、セットが崩れちゃった。お肌も荒れちゃうー」

壁の鏡を見てブツブツ言うのは、顔の包帯を外して髪を整えてるおしゃれのコリンズだ。

「さあさあ、ポケットサンドイッチ、バターミルク味のビスケット、フレンチトーストも運んできているよ！　みんな、豪快に食べよう！」

マジメ男のアトラスは兜を外し、ジーサードの命令通りテーブルに野戦食（UGRE）を広げてる。

どんな時でも陽気さを失わないなぁ。アメリカ人たちは。

お陰で俺も、少し元気が出てきたような気もしてきたよ。ほぼ空元気だけど。
部下たちのために自分は食べないつもりか、酒を一口あおるとイスに座って寝たフリをしてるジーサードや、それに気づいてちゃんとジーサードの分を残して食べる部下たちを横目に……俺も、苦笑いしてミックスナッツをつまむ。
ワイワイと夕食をとる一味の中、俺は……
壁に貼られている掠れた人相書きにマジで『Wanted』とか書かれてるのを見て、
（あれ剥がして、お土産にしようかな？）
などと、遺跡荒らしをするマナーの悪い観光客みたいな事を企む。
するとそのバチが当たったか、寒さで小用を足したくなってきたんだが……
トイレだと思われるドアは、砂にほぼ埋もれてて開きそうにないな。
しょうがない。コッソリここを出て、外でしてこよう。

月明かりの下――
ゴーストタウンといえど、俺は人目につかないような突き当たりを探しあてる。
砂地は音を吸収してしまうので、辺りは耳が痛いほどの静けさだ。虫の音ひとつしない。
（水分を失うの、もったいないな……）
と、男子の特性を活かした手法を実践するため、まずはレンガの壁に向かうと……
（……ッ……？）
――気配が、する。
背後、20ｍほどに。
しまった。砂で足音がしないから、気づくのが遅れた。
ここは街路の行き止まり。自ら、追い詰められるような位置に立っちまってるぞ。俺は。
大型動物のような、呼吸音――廃墟に棲みついている野生動物か？
いや、違うぞ。微かな金属音も聞こえた。明らかに人間。
気づいた事を気づかれぬよう、俺は振り返らずに――ズボンのベルトをゴソゴソやると見せかけて、腕を体で隠したままホルスターの留め金を外す。
いつでも拳銃をクイックドローできる準備を整え、大きく息をしてから――
――バッ！　と振り返る。
すると、道の向こうからは……
機動性に優れる馬種・アメリカンクォーターホースに跨がった、焦げ茶色のテンガロンハットの大男がこっちを見ていた。
年代物の革ジャンの前を開き、Ｔシャツの丸い腹がぽっこり出た、腕っぷしの強そうな白人の爺さんだ。
ケンタッキー・フライドチキンの店前に置いてあるカーネル・サンダースからメガネを外し、

厳つくしたような顔つきの、口ヒゲを生やした大男。 元は金髪だったらしい白髪は伸ばし放題で、バサバサの荒れ放題。 西部劇なら銀行強盗の役が似合いそうな輩だ。

左手に持ったスキニー缶から、グイッと――聞くまでもない、酒だろう――をあおった爺さんが、右手で抱え持っているものは――古い、ライフル銃。 M1ガーランドだ。

「……誰だ」

俺が低く問いかけると、

「抜け、カウボーイ。 胸元に持ってるんだろ？」

向こうも声を低め、訛った英語でそう返してきた。

いきなり――やる気だぞ、向こうさん。

この国では女子供でも老人でも、普通に銃を撃つ。 年間3万人が、撃たれて死んでいる。

ヘタな内戦中の国より、人々が日常的に銃で殺し合ってる国なんだ。

それを思うと、この場の緊張感は本場の味があるな。

だが相手は俺というヨソ者を前にしても、会話に応じない空気じゃない。

いきなりズドンとやられる可能性も少なくはないが、ここは……

「あんたが先に構えろ。 そしたら抜いてやる。 俺は日本人だ。 日本は専守防衛の国でな」

俺は銃を出さず、相手の出方を窺う事にした。

すると爺さんはニヤリと笑い、

「ワシは小僧より先に撃つほど臆病者じゃない。 お前が先に抜け」

再び、酒を口に含んだ。 俺から目を逸らさず、缶だけを口元で立てるようにして。

発砲がすぐには出来ないであろう、その瞬間を捉えて――

「……あんたと戦うつもりはない」

俺はジャケットからデザート・イーグルを出して、足下に捨てた。 ベレッタは、イザという瞬間のために隠し続けておく事にしつつ。

それを見た爺さんは……ライフルを馬の脇に付けた矢筒みたいなホルスターに収めた。

――とりあえず、撃ち合いは避けられたな。

「……中に誰がいる。 ワシはそれを知りたい。 さっき遠目に見た事を確かめたい」

ジーサードたちのいる『Hilton's Bar』を親指で示して、爺さんが言うので……

「俺の弟と妹、あと、友達だよ。 見てくれはともかく、悪人じゃない」

俺が正直に、そう答えた時――

爺さんは――チャッ、と、そっちもバッ、とブラックホークを抜いて廃墟の屋根に向けた。

ー・ブラックホークホルスターに隠し持っていたらしいスタームルガ

そこには……

「見てくれってのはどういう意味だ、兄貴」

俺の立ちションにも警護に出てきてくれてたらしい、ジーサードが腕組みしていた。

爺ちゃんの拳銃を屁とも思ってない、とってもうちの弟な態度でこっちを見下ろしてる。
それを見上げた、爺ちゃんは――
「……オー・マイ・ガーッ……！」
聞くと得した気分になるぐらいハッキリと、本場のそのセリフを叫んでる。
上を向いた仕草で見えたが……この爺さん、首筋にタトゥーがあるな。髑髏をナイフでブッ刺してるような恐ろしい図柄だが、そこにはU.S.Armyの文字も見て取れる。入れた後に太ったのか、かなり伸びちゃってるが。
「ベトナム以来に人を撃つかと思ったが、こりゃたまげた！　こんなド田舎にヒーローが来るとは！」
どうやら元軍人らしい爺さんは銃を収め、嬉しそうに馬を降り、帽子を外して厚い胸に当てている。目を少年のようにキラキラさせて、ジーサードを見上げながら。

戦闘国家アメリカには、軍人が１５０万人もいる。元軍人や関係者を入れればその数は倍増する。なので、ここで元・陸軍の爺さんに邂逅したのも確率論的にいえば驚くべき事じゃないのかもだ。この出会いがラッキーなのかアンラッキーなのかは、まだ分からんが。
カーネル・サンダースを厳つくした感じの爺さん――アメリカ人には多い名前なのか、本当にサンダースという名前だった――の家は、ゴーストタウンから岩山を１つ回り込んだ所にあった。
ジーサードご一行は、徒歩30分ぐらいかけてその木造家屋に案内されたんだが……
やたら歓迎ムードで入れてもらった家の中は、爺さんの髪や髭と同じで荒れ放題。男の１人暮らし丸出しな、ワイルドなお住まいだった。銃弾の紙パッケージと酒のビンが床にゴロゴロしてるよ。
（……占いし、ボロいなぁ。アメリカ人の家なのに、狭いし）
環境的には、さっきの廃墟よりちょっとマシって程度だぞ。自家発電機も占いヤツで、うるさいし。あとなんかクサい。
だが人家は人家だ。明るいし暖かいし、命拾いした事は確かだよ。
俺たちを引き入れた爺さんはハイテンション&上機嫌で、
「ウェルカム、ジーサード！　さてあんた、去年のトレールズ油田火災を覚えてるか？」
冷蔵庫にギッシリ詰まったバドワイザーの缶をポンと投げ渡し、そんな話をジーサードに振っている。
するとそれまで少し訝しげな表情をしてたジーサードは「！」という顔になって、急に気恥ずかしそうにソッポを向いてしまう。
「あんたらが救助に駆けつけてくれたおかげで、死者が１人も出なかった。倒壊した採掘プラットフォームの下で、ワシャァもうダメかと思った。だがあんたらがワシの友人を、息子を、そし

て――ワシを救ってくれた！」

わっははは！　と笑ってジーサードの肩をバンバン叩き、こぼし気味にビールを飲む爺さんは……

趣味で正義の味方をやってるうちの弟に、昔、助けられた事がある人だったんだな。

明らかに油田事故の事を覚えてる顔で、しかし人に誉められたり感謝されたりするのがニガテらしいジーサードは、

「あー……そういやそんなヤマもあったかもしれねーけどな。だが俺は助けた人間を一々覚えちゃいねえ。お前だって今まで歩いた通りの名前を全部覚えてねーだろ」

などとツンデレってるよ。ほんと芸風が首尾一貫してるよなコイツ。

（しかし、これは……）

――ラッキーだな。こんな所で、明らかに親ジーサード的な人物に会えるなんて。

いや、ちょっとラッキーすぎる。

こいつは……俺の女運と引き替えに作戦成功率を上げたという、ロカの超能力――運命ナントカ刑の効果だな。きっと。この爺さんに最初に会ったのは、俺なワケだし。

つまりこの爺さんのせいで、俺の女運はまた下がったって事か。だが元よりギネス級に女運の悪い俺だ。もはやこれ以下になったって恐くないね。来るなら来い、ヤバい女。

爺さんは秘蔵してたテキーラを戸棚から掘り出してくるわ、プラスチックのケースごと缶ビールを振る舞うわ、冷凍庫から紙箱に入った冷凍食品をどんどん出してくれるわで、給仕するアンガスやツクモも大忙しだ。

「アンタ、なんでこんな所に住んでるんだよ。油田でも探してるのか？」

酒は飲まないものの、冷凍ピザを腹いっぱい食わせてもらった俺が尋ねると、

「それは引退した。ワシャー第二次世界大戦に備えて、イナカに引っ越したんじゃ。次の戦争は絶対核戦争になるからのォ！」

酔っ払ってるものの、爺さんはジョークじゃないマジ顔でそんな事を言う。

「クレイジーだな、このジジイは」

ジーサードがチキンナゲットをトマトと食べながら笑い、

「お前が言うなよ」

俺がジト目でそうツッコみ、

「お前が言うな」

ウェイトレスをやってるツクモが、その俺にツッコむ。

世界大戦は、緋緋神も起こそうとしてるが……

ほぼ切れ目無く戦争をやっており、銃の乱射やテロの危機にさらされてるアメリカには――自主疎開者と言って、こういう戦争ノイローゼみたいな人が少なからずいる。田舎に住み、武装して、自宅を要塞化しちゃうのもいるとか。この爺さんもその1人ってことだ。

そんなクレイジーなサンダース爺さんと、ジーサード、アトラス、コリンズはドル札をテーブルに出し……クレイジー同上、仲良く賭けポーカーなんかを始めてる。女子たちはワイワイ盛り上がってそれを観戦。姿勢は歪んでてもプロみたいな手つきでディーラーをやるのは、アンガスだ。

一方、さっき会った人とすぐ仲良くできるようなコミュ力の無い俺は……同じくコミュ力に難のあるレキを隣に設置して、一部バネの飛び出たソファーに掛ける。そして、ヒマ潰しにテレビをつけた。この辺、リサとオランダにいた頃と行動が同じだな、俺。テレビ逃避は、海外に出た時の俺の習性なのかもしれん。

じんわり……と、ブラウン管に映ってきたテレビ番組は……よかった、あの時みたいなアダルティーな内容じゃないよ。ヒス的には最も安全な番組の1つ、天気予報だ。

「……何だ、あのマーク？　ああ、暴風予報か。天気予報に『サイクロン』があるんだな。さすがアメリカだな」

と、見たまんまを喋って話題を振るが、

「……」

ソファーの上にも体育座りのレキちゃんは、鳶色の瞳でブラウン管を見つめたまま無言。無表情。無反応。隣にいるから分かるが、ミントっぽい髪の香り以外、無臭ですらあるぞ。すごいなこの無っぷり。

言っちゃ何だが、アトラスとかロカは1日フロに入らなかっただけで、アリスベル風に言うとモーレツな外人スメルを発してるのに。

「ほう、グレーム・レイク空軍基地――エリア51を攻めたいと。ジーサードは」

テキーラを注いだグラスを手に、サンダース爺さんが危険な話をしてるので――

俺はテレビから、テーブルの方へ振り返る。

「で、反撃を喰らって遭難してたのか。ヤツらはUFOやら何やらを飛ばしよるからな。騒音公害でワシもムカっ腹が立っとる。あんた、ヤツらに一泡吹かせに行くのか？」

「まあそんなとこだ」

ジーサードの答えに、爺さんは髭の中の口をニヤリと笑わせてる。

「大戦争か？　ジーサード」

「激戦だぜ」

「悪くねえぜ、小僧。力になってやる。困った時はお互い様じゃ」

小僧呼ばわりはともかく、恩人のジーサードに対して彼はとても友好的だ。

「……サンダース氏。車をお持ちでしたら、お貸しいただけませんでしょうか？　勿論、代金はお支払いします」

アンガスがそう持ちかけるが、

「車じゃエリア51までは行けんぞ。車道が無い。ワシャジープも持っとらん。馬だけだ」

馬……じゃ、行けないだろうな。まだ道のりは遠いんだ。そもそも1頭しかいないし。
サンダース爺さんの回答に、皆が少し黙ったところで――
今のは前フリだったらしく、爺さんは「だがのォ」と身を乗り出して注目を集めさせる。
「別のスペシャルな『道』がある。明日用意してやるから、ワシもお前らの一味に加えろ。エリート面しとる空軍のアホ共に、吠え面かかせてやろう。ほれフルハウス。ワシの勝ち。今夜はこれでやめて、もう寝とけ。それとも、もっと負けてくか？」
爺さんの手役と同じで家が満員だったのと、なんかその辺は厳格な人なのか「男と女は別の部屋で寝ろ。とはいえベッドルームは1つしか無いから、女たちの部屋じゃ。ワシはリビングのソファーで寝る。後はリビングで寝させたら、床が満員になった。ガタイがよすぎなどと言われたので……
アンガス、アトラス、コリンズをリビングで寝させたら、床が満員になった。ガタイがよすぎるアトラスは土地不足の主犯格なのだが、おやすみ3秒で寝てしまったので、俺とジーサードは……やむなく馬小屋で寝ることになった。
しかしこれは、残り物には福があるというヤツだった。毛布が足りない家の中と違って、藁に潜ったら暑いぐらい温かい。気持ちいいな。よく眠れそうだ。馬臭いけど。
俺は手を噛まれたが、馬はジーサードがひと撫でしただけでおとなしくなって……
俺とジーサードはフカフカの藁布団で、並んで寝る。
借りたライトを消し、闇の中で――今は俺と、弟と、馬の息の音だけが聞こえてる。
ニューヨークを出て、たぶん初めて2人きりになれたので……
「……ジーサード。お前、まだサラ博士を甦らそうとしてるのか」
ずっと気がかりだった事を、俺は聞いてみる。
ジーサードは、
「……」
黙ってるが、兄弟とはフシギなものでなんとなくムードで分かる。してるなこりゃ。
恋は盲目って言うが、そういうもんなのかな。
「酷な事を言うようだが……兄貴ぐらいしか言うヤツもいないだろうから、言っておくぞ。やめとけ。俺は、反対だ。色金を使ったところで、出来る確証もないだろうし」
「……」
「俺の見立てじゃ、緋緋色金――緋緋神は、純粋に、『悪』だ。ベタな諫め方だが、悪に頼ってそんな事して……博士が喜ぶと思うか？」
「……」
「だが、それはお前が自分で自分に問うべき問題だ。もうこれ以上は、この件については俺も二度と何も言わない。死者を生き返らせる――それに挑戦したければ、しろ。ただし、他の方法でな」

そう言った、俺の横で……
ずっと、ジーサードは黙っていた。
……寝たのかな。じゃあ今のは俺の独り言ってことでいいやもう。
そう思い、俺も寝ようと目を閉じる。
「……ありがとうな、兄貴」
……なんだ。
起きてたか。
「アンガスも、アトラスも、コリンズも――みんな、俺のそれを知ってる。知ってるが、俺を気遣って、その話を避ける。『腫れ物に触るような扱い』ってヤツさ……だから……兄貴、ありがとな。腹を割って話してくれて。ありがとうな……叱ってくれて」
ジーサードも俺が寝てるかも的前提で、半ば独り言みたいなノリで呟いてる。
不器用だなぁ。こいつも。俺も人のこと言えないけどさ。
だが……やめるとは言わなかったが、真剣に聞いてはくれたんだな。じゃあもうそれでいいよ。後はお前が考えろ。じっくりな。
あ、そうだ。もう1つ言うのを忘れてた。2人きりになったら、言おうと思ってたこと。
「……あと、ツクモっての。お前の子分。あれ、ちょっとニガテ系の話題なんだが、これも言っとくわ。もうちょっと可愛がってやれよ」
「なんでだよ。俺は部下の誰かを特別扱いはしねぇ」
うわぁ……マジで気づいてないよこれ。あんなに好き好き光線出されてるのに。
鈍感なヤツだな。鈍感主人公ってヤツだな、コイツは。
「そういう問題じゃないんだって。分からん男だな、お前も」
「分からねェのは兄貴の方だ。何をしてやれってんだよ？」
「いや、そう言われると俺も分からないんだが……」
うーん。なにぶん俺も、恋愛系の話は幼稚園児より疎いからな。
前、ジャンヌは花をあげればいいとか言ってたけど……去年それ白雪にやったら、翌日俺の部屋で機関銃ブッ放したしな。何をさせればいいのか、思いつかん。
とはいえ偉そうに切り出した手前、何か言わないと兄としての沽券に関わる。
ここは退くのではなく、むしろ前に出よう。と、俺は――
「こんどツクモと2人になったら、尻でも撫でてやれ。あとは自然が導くだろう」
遠山キンジ史上、最も性的なトークを炸裂させる。半分はレキに昔言われた事のパクリだけど。だが、しかし……
「――はァ？　意味が分からねェよ。力いっぱい舌噛んで寝ろ。永久に」
ダメだ。知ったかぶりは通用しなかった。この件は、まるで伝わらなかったみたいだな。
ちょっとこれは兄として情けないが、無い袖は振れない。おせっかいも程々にしとこう。

翌朝――

サンダース爺さんはテンガロンハットを物置から幾つも出してきて、俺たちに1つずつくれた。それが気に入ったらしいジーサードはクリント・イーストウッド気取りだが……西部劇でお馴染みのこの帽子は、ファッションじゃなくて実用品なんだな。砂漠の日差しから随分視界が保護されるし、日射病対策にもなる。

ガンマン、味みたいな風体になった俺たちを爺さんが案内した『道』とやらは……

昨日の、廃墟の街だった。

「……これのどこが『道』なんだよ？」

ふて腐れて日本語で呟いてしまってから、俺は――昨日の夜には暗くて見えなかった、それに気づく。

ネバダの荒野に、点々と……

赤い、点線のようなものが見える。

石の、ような……？　鉱石か……？　いや、それにしては直線的すぎる。人工物だ。

「……鉄道（Railway）……！」

俺と同じことに気づいたらしいツクモが、目の上に手とキツネ耳でひさしを作って砂漠を見渡してる。

昨夜は暗くて誰も分からなかったが、この町は『駅』だったのだ。

終点のようにも見えるが、こんな所にそれが造られるワケはない。西武池袋線の豊島園駅のような具合で、本線から分岐した側線をここまで引き――町の中央にある大きな謎の施設に、車輌を入れていたんだ。という事は、あれは鉄道車庫。にしては小ぶりな事から、待避駅や貨留線の役割も果たしていたらしい事が推測できる。

どや顔で爺さんがチェーンを引いて門と扉を開けた、大きな車庫の中には……

（……っ……！）

鈍い漆黒の輝きを今も放つ、オールド・ファッションな車輌――

蒸気機関車が、鎮座していた。

これにはジーサードたちも唖然としてしまう中、アンガスが「Gosh（神様）！」と嬉しそうにそのレトロな汽車へ歩み寄る。

「なんと。なんと。これは――セントラル・パシフィック鉄道の63C号機！　アメリカの国宝の1つではございませんか。薪燃料から石炭燃料に切り替えた初期タイプの動態機がまだ現存していたとは、興奮を禁じ得ませんぞ。おおッ、なんと美しい臙脂色をしたカウキャッチャー……！」

……この人、アメリカ版の鉄オタだったんだな……

アンガスは感動でプルプル震える手を、汽車正面の下部に伸ばし――地面スレスレまで庇のよ

うに伸びている、鉄骨でできた巨大な熊手っぽい部品に触れている。線路上にいるバッファローなんかを弾く、往年の機関車には欠かせない装備だ。

汽車正面にある円形をした煙室扉には、日本で御用列車に日の丸が掛けられるように、大きな星条旗が2本クロスして掛けられている。その旗の星の数は現用の星条旗より若干少ない。まだアメリカの州が今より少なかった頃の、年代物だぞ。この汽車と同様に。

「これはワシの爺ちゃんが乗ってたモンだ。老体とはいえ、火を入れれば走るハズだぜ。細部は錆びちまってるがな」

「なんのなんの、手入れも行き届いておりますよ。大陸横断用の車体ですな？」

「見る目があるなアンガスさん。愛称はTrans-American——『トランザム』だ」

ラッパ型に広がった煙突を黒光りさせる、トランザム号を前に……爺さん2人のオタク的トークが始まり、この汽車がかつてゴールドラッシュ時代から続く金銀採掘の貨物車を牽引していた事や、このゴーストタウンも元はその操車場の町だった事が聞き取れた。

まさか、汽車が出てくるとは思わなかったが……

廃線とはいえ、大陸横断鉄道の支線はエリア51のギリギリ内側まで続いているらしい。

しかもそのゴール地点はエリア51内で細かく分かれている区画の内、親ジーサード的な区域。つまり、そこまでトランザム号を走らせられれば——

俺たちは、瑠瑠色金に肉薄できるのだ。

「おいジーサード。お前、カフェ・ラロで『他人の敷いたレールの上を行くのは性に合わねえ』とか言ってたが……こいつはお前的にOKか？」

荒野へ伸びるレールを示し、テンガロンハットの俺が皮肉るように尋ねると——

「レールを信じて行くしかない時も、人生にはあるもんだなァ」

昨晩以降ちょっと素直になった弟は、お揃いのテンガロンハットの下で後ろ頭を掻くのだった。教えたワケでもないのに、苦笑いしちゃうぐらい俺そっくりの仕草で。

汽車に対して確かな知識があるらしい、アンガスの助言を得て——

占いが使えそうな石炭の炭水車への積み込み、燃焼室外周の水槽への注水、動輪や従輪、連結棒のチェック等が急ピッチで進められる。

最後の火を落としてから50年ぶりに目を覚ました、トランザム号は……先頭で牽引する機関車、石炭と水を詰んだ炭水車、兵員を載せる客車の、3輌編成だ。

深緑を基調にした外観の客車には、車両番号や製造会社名が金色の囲み文字で書かれている。その車輌外に付いた階段を上がり、コリンズ、ロカ、ツクモ、P・A・Aを運び込んだアトラスが次々乗り込んでいく中……

俺は、俺についてきたかなめとレキを手で制する。

「お前たちは守備役に残れ。サンダース爺さんには家を貸してもらえるよう、俺が頼んでおくから

ら」

アメリカ人たちは持ち前の陽気な突撃ムードだが、こいつは冷静に見ればどう考えても無謀な強襲だ。敵はガンシップのサジタリウスすら問題にしない新兵器で武装してるのに、こっちは小口径の携行火器ぐらいしか飛び道具がない。しかも、足はよりによって汽車だ。

――行かなきゃならない道とはいえ、危険すぎるからな。

「この任務では、守備役を配置できる人的余裕はありません」

珍しく口答えしてきたレキに、俺は――

「それなら腹の内を言わせてもらうが、お前たちはそもそもジーサードの部下じゃない。レキは言うまでもないし、かなめはもう解雇された身だろ。こんな特攻じみた強襲作戦についてくる義理はないんだ。それに、お前たちは――女子だからな。特にかなめは一番の年下なんだし、安全な所で待ってろ。心配すんな。俺は生きて帰ってくるから」

そう言って、男らしく2人に背を向けて汽車に乗り込もうとしたら――階段がけっこう地面から高い位置にあったもんで、ズルッ、といきなり一歩目でしくじった。

こけて階段にぶつかりそうになった俺の、頭を……

ふわっ、と、布みたいな物が支える。

かなめのスカート内から伸びた、磁気推進繊盾（P・ファイバー）だ。

「……心外だなぁ。あたしは、おはようからおやすみまでお兄ちゃんを見守る妹だよ？」

空飛ぶ布みたいな科学剣のせいでスカート前面がたくし上げられちゃってる、かなめは――それを見た俺が言葉に詰まった隙に、人差し指を立てて喋ってくる。

「見守るのは何のためか。それは、守るため。今みたいにね」

と、可愛くウインクされて……

負けたよ。もうしょうがない。置いていく理屈を、今、俺が自ら崩壊させちゃったし。

で、起き上がったら、いつの間にかレキの後頭部が客車内の窓の向こうにあるし。

やむを得ん。行こう。エリア51へ――このまま、全員参加で。

6弾　星条旗の覇道（トランザム）

がしゅんっ……！　と、動き始めたトランザム号――

そのラッパ型の煙突からは、石炭の燃焼に伴って真っ黒な煙が上がる。さらに水蒸気が蒸発した白い煙も混じって、こいつは目立つなんてもんじゃない。

半ば砂に埋もれた鉄道の上を、その砂を蹴散らしながらの黒い巨体がゆっくり、堂々と出撃する。広大なネバダの大地、その向こう側にある、エリア51へと。

かなめとレキが乗る客車は床が木製だったが、壁や天井は鉄板。手すりや吊り革は無いが、山手線と大差ない形でベンチが設置されている。

そこから前の車輌へ出ると、そこはアトラスとコリンズが石炭と水を管理する炭水車だ。

落っこちないよう手すりに掴まり、炭水車の車体外側にある踏み板をカニ歩きで渡って、シェークハンド式の連結部を跨ぎ……先頭車両、つまり機関車に辿り着く。

眩しい日差し、相変わらずの乾いた風――時刻は、正午前ってところだ。

「お い爺さん、酒はやめてくれよ」

運転席で真鍮の加減弁ハンドルを持ち、楽しげに一杯やってるサンダース爺さんに注意するが……

「黙っとけ小僧。飲んでないとワシは手が震えるが、そっちがいいか？」

ダメだこりゃ。

まあ世の中には富嶽を飲酒運転する鬼もいるんだし、それに比べりゃ可愛いもんか。

後端部が剥き出しの運転室では他にもジーサードが腕組みして立っており、アンガスとツクモが釜焚きに勤しんでる。

「時間時計、計測スタート。エリア51まで、道のり、あと115マイル。所要時間の想定、あと125分」

高そうなホイヤーの撥条式ストップウォッチを手に報告するのは、ロカだ。

終点までは185kmってとこか。そこまでに人生の終点を迎えない事を祈ろう。

しかし、ウン十年動いてなかった汽車が動いてればじきにバレるだろうが、マッシュもジーサードが汽車で攻めてくるほどのアホとはすぐには気づかんだろう。

こっちの頭の悪さを逆手に取った、案外悪くない作戦かもな。これはこれで。

「トランザムは全速前進すりゃ、時速57マイルでブッ飛ばせるぜ。ああ、釜の温度に気をつけろよ？　耐圧性は十分すぎるぐらいあるが、なにぶんコイツもジジイだからよォ」

サンダース爺さんはゲップ混じりに自慢してるが、時速90kmぐらいじゃねえか最大速。

今も原チャリぐらいの速度しか出てないし、ウサイン・ボルトならダッシュで追い越せちゃうぞ。

という俺の暗い表情に気づいたか、ジーサードが俺に……
運転席の天井から垂れてる、取っ手つきのヒモを持たせてきた。
「景気づけに引っ張ってみろよ。兄貴」
笑顔でそう言ってくるので、くす玉みたいなノリで俺がそれを引くと――
――ボオオオォォォォ――ッ……！
これぞまさに蒸気機関車、というカンジの警笛が鳴り響いた。うるさっ！
ジーサード一味はその音を聞いて「ワーオ！」「ヤッホー！」「チュッチュー！」などと大喝采だ。アメリカ人どもめ。ちょっとでも目立たずコッソリ行こうとかそういう発想はお前らには無いのか。
「合図を決めとくぜ。長い警笛は『エリア51まで1マイルを切った時』の降車準備合図だ。他の警告には、短く2回鳴らせ」
ジーサードの命令に、協力して汽車を走らせる部下たちは「了解！」と笑顔で敬礼している。
ほんと、いつも生きてて楽しそうだなぁ。この人たち。
「ワクワクするなァ、兄貴」
「後悔しかしてない」
俺はジーサードと、そんな言葉を交わすが……
なんていうか、アメリカ人って……どこまでも自由で、豪快で、俺たち日本人にはないダイナミックさがあるよな。そこは憎めないよ。ちょっとだけ、見習うべきかもだ。
線路は錆び錆びの赤銅色で、あちこち草に覆われていたが――そんなのお構いなしで、トランザム号はネバダの砂漠を西へ突き進む。スピードも出てきた。爺さんの言った通り、時速90kmぐらい出てるな。今。
そうして突入していく、ネバダ州リンカーン郡西部は……
政治的に、反ジーサード的な地域だ。
つまり、マッシュによる迎撃があってもおかしくないのだが――
俺たちの緊張感をよそに、攻撃は無い。
だがこれは嵐の前の静けさだ。ヤツらは衛星か何かの目で、俺たちをジッと見ていると考えるべきだろう。サジタリウスを撃墜した時のようにな。
ジーサードの命令で警戒態勢に入ると、すぐ――目のいいレキが、東の空に浮かぶ妙な物体を見つけたらしい。
客車に映った俺がレキが指さす方を見てみると、青空に、ぽっかりと黒い点がある。
窓から頭を出し、かなめから借りた双眼鏡でそれを見てみるが……
（何だ……？　クジラみたいな……エイみたいな……）
汽車の煙のせいもあり、よく分からない。不気味だな。

などと眉を寄せていると、馨しいミントの香りが。
俺の頭のすぐ下で、レキも窓から頭を出してきたみたいだ。
レキは風に暴れる髪を俺の顔にバサバサ触れさせつつ、
「――航空機のようです。全幅は40m強。速度をこの汽車に合わせて、3・2kmの距離を保って追跡してきています」
俺＋双眼鏡より優れている肉眼で、それを視認してくれた。
「……ジーサード。クジラとエイの中間みたいな形の飛行機が、低速で尾けてきてるぞ」
首筋に貼ったシール型の骨伝導インカムで、機関車のジーサードにそう連絡した時――
――パンパパパン！　パパパパンッ！
車体の下から、短機関銃のフルオート連射音みたいな音が上がった。
「なっ、何だ？　敵襲、じゃなさそうだが……」
今度は下を見て、俺は眉を寄せる。
『……今のは、大昔に線路上へ設置された防水爆竹を汽車が踏んだ音だ。ここから先は、保安官も路線を監視できないような無人線区――つまりは立入禁止の、伝統的な無法地帯って意味の注意報さ。きっとそろそろ、空のクジラが潮を吹くぜ』
振り返ればジーサードの予言通り、「航空機、動きました。加速して、蛇行を開始しています」と――レキもドラグノフ狙撃銃を肩から胸の前へ回している。
……なるほど。ここが、決戦の地って事か。マッシュ。
荒野の決闘、ってやつは――この無人線区みたいな、無法地帯で行われるってのが相場だからな。
アトラス、レキ、かなめは鉄板に守られた最後尾の客車で敵を待ち構える。
コリンズは剥き出しの炭水車で、石炭運びを続ける危険な任務を請け負った。
ジーサード、俺、アンガス、サンダース爺さん、ツクモとロカは機関車の守備隊だ。
「何を切り離ししやがった……？」
空を睨むジーサードが呟いてから、数秒して……俺の目でも、見えてきた。
かつて俺が撃墜したB―2改ガリオンとも似た、太ったエイみたいな翼胴融合機の――
ジーサード曰くX―48の大型版、X―48E『グローバルシャトル』から、幅3mほどの何かが空に切り離されたのだ。
黒煙と砂塵を巻き上げて無人線区を疾走する、トランザム号へと……
切り離された何かが、迫ってくる。
翼がある。
見えてきたぞ。

「あのシルエットは……！」
「――LOOだ……ッ」
カフェ・ラロでそれを目撃していたジーサードと俺が、同時に気づく。
あの少女型メカ、LOOが――翼や装甲をゴテゴテ増設した姿で、飛行しているのだ。
鋭角的な翼はアスペクト比が大きく、グライダーのように鋭角的。実際、エンジン等は搭載せず……降下する際に位置エネルギーで加速し、動的揚力と角動揚力粒子で滑空しているだけの、グライダーのような飛び方だ。僅かにジェット噴射の炎が見えるが、それは姿勢制御用のスラスターらしい。なるほど。LOOは飛行はできても航続力が無いから、寄生戦闘機のようにあのシャトルで無人線区まで吊下されて来てたんだな。
接近してきたLOOの細部が、次第に見えてくる。
白い水着を着たのみで、ほぼ剥き出しのその身体には――
「……っ……」
俺やかなめが破壊をためらうようにだろう、俺たちにとって仲間の象徴である武偵高のセーラー服の襟が付けられている。
マッシュ……卑劣なヤツめっ。
「おいアトラス、あのメカ女の装備は――お前に似たコンセプトだな。アリアのホバー・スカートやお前のP・A・Aが第1世代なら、ありゃ第2世代ってとこだぜ」
眉をツリ上げたジーサードがインカムに言うと、
『YES、サー。あれはP・A・Aよりも服飾風のユニットであります。識別用に名付けるなら――P・A・D』
「いいネーミングだ。よし……ドレスで来たお嬢ちゃんと、ダンスしてやろう。お前ら、トランザムを守り切れッ！　守り切ってエリア51に入りさえすれば、俺たちの勝ちだ！」
勝利条件を叫んだジーサードに、部下たちは『応！』と勢いよく返答してくる。
……防衛戦か。汽車を想定した事は無いが、拠点防衛のイロハは授業で習ってはいる。
微力ながら、俺も迎撃を手伝うぞ。この、戦は、アメリカを戦渦に陥れようとしているマッシュと――世界を戦渦に陥れようとしている緋緋神の、2つの野望を挫くものなんだ。兄弟揃って、絶対に負けられん。
そこでまずは、武偵高のセーラー・カラーにも容赦の無いレキのSVDが――続けて、機関車後端からツクモの短機関銃が――バスッ！　ダタタタタダッ！
カメラと思われる眼球や、広がった翼を狙って次々に砲火を開いた。
だが、レキの弾はLOOのキレイな顔の前で火花だけを散らして防がれる。
俺たちの知らない、超先端科学の力で――何らかの、見えないバリヤーのようなものを張ってるんだ。まあ、そのぐらいの事はやってくれちゃうと思ったけどね。
ツクモの弾はLOOの翼やアーマーに何発か当たったが、ちょっとぐらつかせた程度だ。対物

に強いハズのFN 5.7x28mm弾も通用しない、超先端の金属で出来てるってワケか。

「……」

レキはドラグノフの改造機構で薬室から弾倉に7.62mm×54Rを押し戻した後、別のマガジンに差し替える音を立てている。使用弾薬を変えるつもりらしいな。

メカらしく、撃たれても恐れず突っこんでくるLOOは――キュキュキュキュンッ！

長い肩当てのようなユニットから、正体不明の青い光弾を乱射して反撃してくる。

だが向こうは汽車にランディングを試みながらという事もあるのか、射程圏外なのか、その集弾性は低い。ほとんどはトランザム号の左右に着弾し、ドドッ！　ドドッ！　と地雷のような砂埃を立てるだけだ。とはいえ2、3発は客車の屋根にもらったけどな。

威嚇射撃と共に降下・加速するLOOは、もうその眉をツリ上げた顔が見えるほど近くまで迫ってきている。

『今のは、重イオン弩発銃かな？　あたしの持ってる衝突式電離剣より効率良さそうだし、速射性あるねぇ。欲しい欲しい！』

客車からはかなめが今のLOOの攻撃について喋り、全員無事である報告に代えている。

「さて、マッシュに見つかりましたな。とあれば、こちらも正体を宣言せずにいる必要もございませんでしょう。少々の暴走にはなりますが、速度を上げましょうか」

落ち着いた様子のアンガスが――スーツの懐から、紙に包まれたバトンのような物を出した。

それはジーサードの自家用車に搭載されてた、ロケットみたいな速度を出させる燃料だ。

「これは燃焼時間も長く、火力も強く、この場でも御役に立つかと。大きなNOS―2や3は汽車を壊してしまいそうですが、こちらは小さい方のNOS―1でございます」

「ハハッ！　よし、使え！」

ジーサードが高笑いし、俺は苦笑いし、ロカとサンダース爺さんが青ざめて、ツクモが大きなお目々をまん丸に見開き――

「心配すんな。この道を、加速して駆け抜けるだけだ」

女の子だったら誰でもキュンと来ちゃうような言い方で、ジーサードはツクモを片腕で抱いて支えてやってる。それがツクモに毒だって事は意識してないんだろうけど。

「では。NOS―1」

アンガスは、優しいアンダースローで石炭釜にそいつを投げ入れ――

ドウウウウウウウウウウウウウウウッッッッッッッ！

さっきまで赤かった釜の中が、金色の閃光を放つ。

その一瞬、炎の龍みたいな爆炎が釜の口から吹き出してきちゃったよ。

「――ッ……！」

俺は腕で顔を覆って熱から身を護るが、それよりも――
思いっきり転倒して、尻もちをついた。トランザム号の、急加速で。
構造上、実は蒸気機関車の燃料は高熱量のものなら何でもいい。薪でも石炭でも、石油、コークス、枯れ草で走らせた例もある。だがニトロでやったのは俺たちが史上初だろうな。
激しく燃焼する釜からは、焼肉にされちまうんじゃないかってぐらいの熱が吹き流れる。
……ようやく、気温的にもイメージ通りの西部劇になってきたじゃねーか。
真冬のネバダは寒くって、イマイチ感じが出ないと思ってたところさ。
「ボ、ボイラー内の温度メーター、１５００度！　時速――８５マイル目測、１３７kmっ！」
計測係のロカが、さっきの１・５倍ぐらいの速度で流れる外の景色を見ながら叫ぶ。
「やればできるじゃねえか、トランザム」
ごつん、と手の甲で機関室の壁を小さく叩くジーサードは、悪ガキみたいな笑顔。
アドレナリンが出まくった感じで目をカッ開いたサンダース爺さんは、
「熱かったなァオイ！　いやぁアンガスさん、あんた過激な爺さんだなァ！」
「いえ、そちらほどではございませんぞ。フフフ」
などと、アンガスとアメリカンな軽口を叩いてる。
この急加速は、エリア51への道を急ぐだけではなく――ＬＯＯを引き離し、あわよくば航続限界より先んじようとしたらしいんだが……敵は最新の科学兵器Ｐ・Ａ・Ｄだ。最古の機械・蒸気機関車との鬼ごっこで不覚を取るような相手じゃない。本来は姿勢制御用のスラスターを加速に転用して、再び追いつきつつあるぞ。
見上げれば――トランザム号が煙突から流す煙は、今や赤黒く変色してる。
煙に火の粉が混じってるんだ。地獄じみた光景だなこりゃ。
その炎の煙を、かいくぐって――
「ガイノイド・ＬＯＯ――接敵！」
状況報告係のロカが叫ぶ中、両手をバンザイさせたＬＯＯが――とうとう客車の後端にビタンッ！　と飛びついてきた。ランディング・ギアもアレスター・ケーブルも無しで。
キとめり込み、文字通り爪を立てている。足も同様だ。
その手には、１本１本がコンバットナイフのような鉤爪が見える。それが客車の天井にメキメ
鉤爪で自分と客車を固定した、ＬＯＯは――バスッ！　と圧搾空気音を上げて、背から翼型ユニットをパージした。そのウィング・スラスターは、列車の後方へとみるみる内に遠ざかっていく。
……東の空で見かけ上滞空している母艦には、もう戻らないつもりか。
片道を前提にした戦術――これも、メカならではだな。
『敵とはいえ、今のは見事だったわねェ。空母への着艦みたーい』

コリンズがノンキなオカマ喋りでそんな事を言う中……
トランザムの速度が、若干落ち始める。ＬＯＯの重量が加わったからだ。
「ＬＯＯｏｏｏｏ……」
ＬＯＯが唸り声を上げる。威嚇するような表情もある。今は人間たちが操縦してるんだ。
白の防弾ワンピース水着に、武偵高女子制服の赤襟。レーダーを兼ねているのであろう、ウサギ耳のような白い冠型兜。主な兵装や電子機器を背に着装したその重量バランスは、全体的に後ろ重だ。翼を広げた鳥や、蝶を思わせるフォルムとも言える。手足には手甲・足甲が白く輝き、アニメファンが見れば泣いて喜びそうな、ある種の美意識を感じられる。
「どうだあれ、ジーサード。お前の美的センス的に。俺はそこそこカッコいいと思うが」
「俺の趣味じゃねえな。だがよ、エリア51の安全なオフィスでコーラ飲んでポテトチップ食いながらこいつを操縦してるキノコ頭よりは――このラジコン女の方が好感が持てるぜ。正々堂々、乗り込んできたからな」
……ジーサードがヒスってくれるかなとも期待したが、その線はナシか。
「それには同意するよ。しかし……最初はガンダムと戦らされるかと思ったが、現実には美少女型のズゴックときたか。赤とか金色じゃなかったのは不幸中の幸いだな」
「何だよズゴックって。それと、ペイントカラーは関係ねェだろ」
「こんど理子に聞いてみな。２時間コースで講義してくれるぜ」
そんな遠山兄弟トークの後ろで、アンガスが――
「せっかく上げた速度を落とされるのは、不愉快ですな。さきほどサード様も仰った通り、ここは加速して突っ切るだけでございましょう」
と、ＮＯＳ―１を釜に投げ入れる。今度は、２本。
――ドゥウウウゥゥウウウウウッッッッッ！　と、再びトランザムが激震し――グンッ！　と、加速する。炭水車のコリンズが転んで落っこちそうになるほどに。
機関車ではビスッ、ビスビスッ！　と、釜の周囲のリベットが何本か飛び、白い蒸気が車体から細く吹き流れている。
あまりにも強いニトロの燃焼力に、ボイラーが限界を超えてるんだ。
「じ、時速――１５８km（98マイル）！　持ち直したよ！　ボイラー内、１８００度！　エリア51まであと１００km（62マイル）！」
ロカが叫ぶ。
今や――視界を流れる砂漠の風景は、もはや高速鉄道のそれだ。頭上に活火山みたいな赤黒い煙が濛々と広がってる以外はな。
「ジィイイザスッ！　こんなスピード、ベトナムのヘリ（イロコイ）以来だぜ！」
……このノリに合わせてこれてるサンダース爺（じい）さんも、さすが戦争経験者だな。
今の急加速でも振り落とされなかった、ＬＯＯに対し――

『――穿孔杭（パルバライザー）ッ！』

客車の内側から屋根の上めがけて、杭打ち機のような殴打がブチ上げられた。

前腕から伸びる鉄杭の後ろで、機械の右手がそのまま天井の鋼板を掴む。さらにさっき重イオン弩発銃（バリスタ）とやらで開けられた穴からも左手が飛び出し、屋根の鉄骨を掴んでいる。

砂漠に落ちる影から、ＬＯＯ（ルウ）の位置は正確に把握（はあく）できていたようだが――

足下からの不意打ちは、その機体を傷つける事はできずにいる。

だが、ある程度押（お）し退（の）ける事はできていたぞ。大質量の打撃技は、ＬＯＯにも効くんだ。それなら……格闘戦で破壊（はかい）するか、叩（たた）き落（お）としてしまえばいい。それができるのは――

『サード様、ＬＯＯは豪快に！』

客車内から、懸垂（けんすい）の要領で――ドゴッ！

科学甲冑（かっちゅう）を着込んだアトラスの上半身が、客車の上に飛び出してきた。

『――自分にお任せ下さい！』

屋根の後部に陣取るＬＯＯに対し、のそりっ……！　と客車上中央に黒い全貌（ぜんぼう）を現したアトラスは――

鋭角的な装備を四方八方に広げたＬＯＯより、全幅（ぜんぷく）は小ぶりだ。体の大きさは逆だが。

『目には目を、歯には歯を、機甲には機甲をであります』

「よし、任せた。やれ、アトラスっ！」

ジーサードが右手をバッと振るって命令し、ＬＯＯ対アトラス――アニメのメカ少女対ＣＧのアメコミヒーローみたいなバトルが開演となる。クラッと来るね。

しかし荒野の中で忘れかけていたが、ここは科学の国アメリカ。この戦いは先端科学と超先端科学の戦いなんだ。そう頭を切り換えて、戦力分析をするが――

ＬＯＯは万能型、アトラスは格闘戦特化型。汽車から落ちればリングアウト負けとなるこの戦いでは、アトラスの方が有利に思える。

しかし――ＬＯＯとアトラスの間には、一目で分かるほどの世代差がある。

まるで22世紀の兵器に、21世紀の兵器が立ち向かっているかのような光景だ。

「ＬＯＯｏｏｏｏｏ、ＬＯＯｏｏｏｏｏ……」

『この敵は危険であります。サード様、お下がりください。皆も、私の仕事を取らないでくれたまえよ！　――ＬＯＯよ。このＳＡＲ（スーパーアロイ）シールド、砕けるものなら砕いてみよッ』

明治通りでＭＩ６の炸裂（さくれつ）弾を受けきった、ピザの、切れみたいな形状をしたアトラスの盾が――左前腕で、シャラララッ――と扇（おうぎ）のように広がっていく。何枚も重ねられたピザ形の金属板が、最終的には円形の盾となった。

右腕甲に杭（くい）、左腕甲に盾を構えた、古代ローマの剣闘士みたいなアトラスがめがけて、ＬＯＯは――

（――M134っ……！）

背部に立てていたガトリングガンを、両腰脇から突き出させた。

まさに往年の映画『ターミネーター2』で、人型ロボットが運用した多連装機関砲――それを、2門も！

0・3秒のスピンアップの後――左右のM134が、バラララッ！　と、レーザーや火炎放射のように見える斉射を行う。

人が喰らえば痛みを感じる間もなく死ぬ、秒間60発もの7.62mm弾がアトラスを襲う。

だが――アトラスは動じる事なく、それを盾と鎧で受けきった。

被弾した箇所には楔形の傷が無数に生じたが、装甲は貫かれない。

間髪をいれず、真っ赤に灼けたM134を汽車後方に投棄したLOOは――

――ジャコジャコッ！　背後から両肩部へと、自動擲弾銃をこれも2門迫り出させた。

ボボボボボッ！　と、着発信管の40×53mmグレネード弾が、6発×2門の12発も飛び出す。見る間に爆炎の渦に飲み込まれた、アトラスだが――

――ガチャンッ、と、むしろ一歩前進して、炎と煙から抜け出る。

そのP・A・Aは、破壊されてはいないものの……各所が赤熱化し、煙を上げている。

まるで、火山の火口から生まれた悪魔のような姿だ。

ほぼ無傷の兜、その口の辺りで――多重装甲の表面部が、一枚スライドして開いた。

まるで、黒い面頬に開いた赤い口で、笑っているかのように。

「――スマイリー・アトラス……」

路線が若干カーブする中、その横顔を見たロカが緊張した声で呟く。

「……アイツ、本気で闘る気だぜ。いいぜアトラス、ブッ潰せっ！」

ジーサードが前半は俺に説明するように言い、後半はインカムに命令する。

ジャキンッ、と大腿部装甲から刃渡り60cmはあるコンバットナイフ型の単分子震動刀を抜いたアトラスは――

――バチュンッ！　と、通常の剣戟では有りえない破裂音じみた音を上げて、LOOの鉤爪と切り結ぶ。

刃を掴み取ったLOOの右手が、チェーンソーで切られているような激しい火花を上げ――ビギッ、グギグギッ――！　と、アトラスはその手を震動ナイフで破壊していく。

そして手から手首、手首から肘までを――ザクッ！　と、魚をおろすように薙いだ。

「……！」

破壊された右腕から緑色のオイルを血のように飛び散らせる、LOOめがけて――

『――ぬううんッ！』

アトラスは盾のフチを刃のように扱う、左フックを放つ。

米陸軍士官学校仕込みのボクシング技術が、グシャグシャになったＬＯＯの右肘を捉え――ビキッ！　と前腕を捥ぎ取ってしまう。

空中でオイルを散らして回転する、重いその右腕をキャッチしたアトラスは――

その腕を鈍器にして、ＬＯＯの左足を思いっきり殴りつけている。

（……ッ……）

……荒れてきたな。現実のメカ同士の戦いは、アニメのようにカッコイイもんじゃないって事か。生身の戦い同様、見苦しいものなんだ。

ＬＯＯとアトラスが上げる火花や煙の尾が、汽車の噴煙と混ざり合う。

トランザム号は今や、まるで大気圏突入中の流れ星のようだ。

左足を引きずるＬＯＯは、なんとかアトラスのサイドに回り込んで距離を取る。

するとアトラスは客車後部の鉄骨を、バーベルを持ち上げるような姿勢で……メキッ、メキメキッ……！　と、力任せに持ち上げていく。

バキッ！　とそれを車体から剥ぎ取って巨大な金棒にしたアトラスが、ＬＯＯを潰してスクラップにする勢いで――バスンッッッッ！　と振り下ろす。

武装を幾つか投棄しながら客車前方へと回転受け身を取り、ＬＯＯはそれを躱すが――脚部ユニットを金棒に掠められ、大きく破損した。

いいぞ。この格闘戦は、アトラスが圧倒してる。このまま押し切れるムードだ。

「ＬＯＯｏｏｏｏ……！」

自分の傷を見て、怒るような仕草をしたＬＯＯに――

「不思議な事ではない、ＬＯＯよ。戦場で負傷しない兵など、むしろごく希である」

笑顔のような面頬のアトラスが、ガシャンッ、と、再び前進していく。

人間だったら諸手を挙げて逃げ出したくなるような、恐ろしいスマイリー・アトラスに……バッ、とＬＯＯは伏せるような姿勢を取った。

先頭の機関車側から見ると、白水着姿のＬＯＯのオシリや股が丸見えで……あれは人形だと分かっているものの、俺はちょっとヒス的な血流を感じてしまう。

それを叱るように、ビォッ！　ビォッ！　と、ロカによって短い警笛が2度鳴らされた。

「あー……」

と、目を丸くしたツクモが前方を見ているので――俺もそっちを見ると。

「……っ……！」

汽車は砂漠に入った巨大な亀裂のような、渓谷に差し掛かっている。

岩場にＶ字の口を開けた、地溝帯だ。

さしずめ、小型版のグランドキャニオンといった所か。

線路はその渓谷に掛かる、ボロボロの木橋の上に続いている。

この暴走機関車が立てる激しい震動は、あのボロ橋を破壊しかねないぞ。
俺と同じ事を思ったか、歯車減速のギアに手を掛けたサンダース爺さんに――
「ブレーキ掛けたら殺すぜ。おいアンガス、加速だ」
ピッタリ追尾してくるシャトルを煙越しに睨むジーサードが、背中で命じる。
「御意に。しかしNOS燃料は残り2本……それも大型のNOS―2と、さらに大きな、NOS―3のみでございますが。よろしいでしょうか？」
アンガスが……ぶっとい方のニトロを出してきて、にこやかに問いかける。
もう限界っぽい機関車のボイラーを、ツクモが怖々と横目で見る中――
「好都合だ。NOS―2を俺の合図で入れろ。あと5秒……3、2、1、今だっ！」
「NOS―2」
命知らずのアンガスが、ぽい、と釜へダイナマイトみたいな燃料を投げ入れ――ッッッドオオオオオオオオオンッッッッッッッ‼
「――きゃあああああっ！」
「うひいいっ！」
ロカとツクモの悲鳴が連なる中、ボイラーの蓋が吹っ飛んだ。
激しい爆発音と共に汽車の煙突も破裂して吹っ飛び、鉄の破片となって車体左右に飛び散っていく。赤黒かった煙はもはや赤とオレンジの――炎そのものとなり、機関車上空を後方へと吹き流れていく。
ガガガガガガガガッ！　というもはや汽車とは掛け離れた駆動音を上げて――
トランザムが、グングンと速度を上げていく。そして加速の真っ最中に、渓谷上の木橋ゾーンに突っこんだ。列車はバキバキバキッ！　と橋を壊し、車輪の左右に枕木の破片を撒き散らし――そのまま、谷の上を飛ぶように爆走していく。
（……ッ……！）
木橋は、暴走機関車が駆け抜けると同時に――骨組みを残し、後ろからバラバラと倒壊していく。牽引される炭水車や客車は、少し後ろに沈んで見えるほどだ。
な、なるほど。このトランザムが高速で突っこめば、どの道、走るそばからボロ木橋はブッ壊れる。そこで減速してたら橋の倒壊に巻き込まれて、目が眩むような深さの渓谷に真っ逆さまだ。そうならないために、むしろ加速しながら駆け抜けろ――って事だったのか、ジーサード。
ホント、人工天才様は考えがブッ飛んでるよ。思いっきり殴りてえ。
「ボイラー内温度、2000度以上っ！　メーターを振り切ったからもう分かんないよ！　時速っ、192km――まだ上がるっ、196――200kmっ！　エリア、あぐっ、51まで――あと78kmっ！　うわぁあん舌噛んだぁ！」
ガタガタ揺れるどころかボンボン跳ねるように走る機関車の中で、ロカが涙声の報告。
トランザムはオーバーヒートして、機関部の至る所から水蒸気や火災の煙を上げている。ラッ

パ形の煙突は跡形も無く消し飛んでしまったが、煙突とはそもそも有害な黒煙を避け、火の粉で火事を起こさせないための安全装置みたいなもの。無くても機動には関係ない。

キュイイイインッ……という甲高い音に、後方の客車上を見下ろすと……

この悪夢のような渡橋の真っ最中にも、ＬＯＯは戦闘行為を中断していなかった。

残された左手と両足の鉤爪で、自らを客車の屋根に三脚のように固定した状態で――

背中にランドセルのように装着した、臼砲のような超先端科学兵器をアトラスに向けている。

言うなれば、大砲モードに変形した状態だ。

「陽電子砲……もう実用化していたとは。そいつも平常心のアンガスが、客車上の光景に眉を寄せている。

対するアトラスは跳ねながら走る客車から転落しないよう、片膝をついて鉄骨を掴んでいる。

ＬＯＯから見れば絶好のチャンス、格好のマトだ。

説明されずとも分かる。アトラスが逃げ出せないシチュエーションを待って砲撃体勢を取ったという事は、あれが――決め技なんだ。ＬＯＯの。

（……アトラス……！）

橋の上では汽車から逃げ出す事もできないアトラスに対し、ＬＯＯの砲が――

――発射される、その瞬間。

「これ、盗塁だからね。バッターの仕事を取ったわけじゃないよ」

かなめのノンキな声がインカムから聞こえてきて、カカカッ！

客車の屋根を下から紙のように破り、磁気推進繊盾が3枚跳び上がってきた。

そしてＬＯＯの発砲と同時に、その砲口に飛びつく。＊字形に重なって、テープで口を塞ぐような具合に。

「ＬＯッ……！」

客車から落ちないためそれに対応できなかったＬＯＯが、砲口を見上げた時――

――ボウッッッッッッ！

磁気推進繊盾に発砲を妨害された背中の科学臼砲が、背中ごと爆発するように破裂した。

「――豪快にナイス・スチールである！　かなめ君！」

その瞬間、客車後方の屋根にしがみついていたアトラスは――

バカンッ！　と、背中の装甲を一部開いた。カブトムシが羽を広げるように。

さらに、ガシャガシャッ！　と、肩部や脚部の後ろの装甲も殻が割れるように開く。

装甲内の各所に埋め込まれていたらしい、幾つもの噴射ノズルが同期して――

「――うおおおおおおおお――ッ！」

アトラスの雄叫びに重なるように、ゴオオオオオオオオオオッ！　と、爆炎を放った。

それはかつて品川でかなめがジーサードに使用したものと同じ、全躯連動固体ロケットエンジ

ン――人知を超えた爆発力で至近距離から飛びかかる、必殺の攻撃補助装置だ。
その文字通り爆発的な力で、アトラスは――
――ガキィィィ

砂漠を突っ切る炎の矢と化した、機関車内で――

「――現在速度、２１０km！　エリア51まであと58km！　でも、サード。ＬＯＯも追い払ったんだし、少しはボイラー温度を落とさないと！　壊れちゃうよッ！」

ロカがオッドアイを両方ツリ上げて、サードに怒鳴ってる。

俺の素人目にも、トランザム号はもう崩壊寸前に見える。ボイラーのリベットが3割は内圧で吹っ飛んでおり、その穴から炎と煙がバーナーのように噴き出しまくってる。釜の中はＮＯＳ燃料の過剰供給で太陽のように輝き、眩しくて直視できない。車体と線路から上がる異音は耳を劈くほどだし、吹っ飛んだ煙突の穴からは真っ赤な炎が長大な尾を曳き、ネバダの大地に真っ黒な煙の帯を描いている。

そもそも最高時速が１００km程度の蒸気機関車に、性能の2倍強を強いてるんだ。いつボカンといってもおかしくないぞ。

だが、車体後方の空を睨むジーサードの命令は――

「アンガス、ボヤボヤすんなッ。ＮＯＳ―３だ、急げッ！」

さらなる加速命令だ。

ジーサードの命じる事なら何でも聞くアンガスは、

「御意に」

と、にこやかに……俺たちをドン引きさせるほど太っとい、ニトロ燃料の筒を取り出す。

「アホウっ！　これ以上やったら吹っ飛ぶぞ！」

サンダース爺さんがツバを飛ばして怒鳴るが、

「吹っ飛ばされるよりはマシだろ」

とだけ返して、ジーサードは耳の穴に隠してたらしい1cm四方の赤い巻き紙を出した。

それは自らをヒステリアモードに変える――ジーサードが口の中に貼り付けた、そのフィルムのような紙は――見覚えがある。東京上空でも口腔粘膜経由で摂取していた、脳内神経伝達物質亢進剤のカクテルだ。

「おい、ジーサード……なんでだよ！」

慌てる俺を無視し、ジーサードは脚部プロテクターからＵＳＰマッチモデル……ここで初めて、拳銃を抜いた。

そして窓枠に手を掛け、炎と烈風の吹き荒れる車体上へと片手懸垂でよじ登っていく。

「――ＮＯＳ―３」

言い残された命令通りに、アンガスが――

アンダースローで、最大のニトロ燃料を破裂寸前のボイラーに放り込む。

――ドオオオオオオオオオォォォ

衝撃でジャンプし、数m本当に飛行した。
ガキャンッッッ！　と線路に戻ったトランザムの機関車内で、中華鍋の中のように炎と熱風が吹き荒れる。俺たちは悲鳴を上げる事もできず、炒飯の具材のように入り乱れ――
「……っ……！」
――激震しながら超高速で走る、弾丸機関車の中――
俺はボイラーに飛び込んでしまいそうになったツクモを抱き留め、天井にバウンドしたロカに覆い被さられ、炭水車からスライディングしてきたかなめに下から抱きつかれてる。
……ケモノっ娘、ロシアの超能力少女、血を分けた妹……
それぞれ個性的な3人の美少女。その6本の手足、瑞々しい6つの胸が、今、上から下から、前から後ろから、同時に俺を覆っている。
――3人掛けは未体験だった事もあり、俺は――ドクンッ――
「三輪車って言ったかな？　こういうの……」
目をギューっと閉じて俺に抱きつく3人の額や頬へ、チュッ、チュッ、チュッ。
それぞれキスしてやり、順番に目を開くのを楽しく見回した。
「うわっ、うわっ。サ、サード様に似た顔にっ……せせせ接吻されっ……されされっ！」
「この、あほ！」
「危なかったぁー、お兄ちゃん。もう。妹クッションが無かったら転げ落ちてたよ？」
シッポの毛をびびびびと広げて女の子らしいリアクションをしてくれるツクモ、俺を下敷きにしたのに真っ赤になって殴ったロカ、いつもの明るい妹スマイルのかなめ。
ははっ。3人とも、かわいいもんだ。
「無事で良かったよ。汽車も――うん、まだ走ってるね。さすがアメリカ製は頑丈だ」
「とッ、遠山キンジ！　帰ったら、心臓を念力で止めてやる。あたしは科学アカデミーでヤギの心臓を止めた事だってあるんだからっ」
ゴシゴシと俺にキスされた頬を手で拭い、煤でむしろ顔を汚していくロカに――
俺は立ち上がり、
「止められるより、射止める方が得意かな。心臓は。でも、愛らしいロカに止めてもらうのなら本望さ――心配いらないよ、止められたら、また自分で動かすから。ああ、それとこれはまだ動いてる」
さっき窓から飛び出しかけたのをキャッチしていた、機械式のストップウォッチを差し出してやる。
ロカはそれをパシッと取り、流れる外の景色を数秒視認し、頭の中で計算してから、
「――現在、時速220km！　エリア51まであと55km！　あと15分だよ！」
ヤケクソなのか、機関車の屋根にいるジーサードに聞こえるようにか、大声で叫んだ。
いやはや、機関室はプチ火の海だが……時速、220kmとは。

これはもう、機関車が記録した史上最高速を超えている。
「おめでとうサンダースさん。あんた、ギネスブックに載れるよ」
俺は、運転席で酒を飲み干して「ジーザス！　減速ギアが割れたぞ！」とスキニー缶を窓から捨てたサンダース爺さんに言う。
「ツクモ、あと1マイルを切ったら汽笛をよろしく」
そして、おでこにチュウされたのがそんなにショックだったのか呆然としてるツクモに警笛ヒモを持たせ……
「お兄ちゃん頼もしい。こんな時でもなれたね。あたし、もっと好きになっちゃった」
俺がヒステリアモードになれるよう、さっきの3人掛けを仕組んでくれたかなめに――ぱち、とウインクを送られた。
いけない妹だなあ、かなめは。
自分に加え、クラスの女子を2人も俺に当てがうなんて。
だが、おかげで……
「今まで、見守るだけだったけど――この決戦、最終列車には乗れたってとこかな」
と、俺はジーサードと反対側の窓枠に手を掛け……時速220kmの風圧に飛ばされないように平賀製品の鉤入り靴を展開し、汽車の屋根に上っていった。
「――遅ぇぜ兄貴」
腕組みして空を見上げるジーサードも……なれてるな。熱のように伝わってくる、この魔獣のようなムード。完全にHSS状態だ。
遠山兄弟――前はカナとだったが、今月2度目の、ヒステリアモードの揃い踏みか。
機関車が吹き上げる、炎の帯の向こうで――未だ3・2kmの距離を保っているX―48E・グローバルシャトルから……バラバラと、子機が青空にバラ撒かれていくのが見える。LOOの姉妹じゃなさそうなのは、良かったんだが……
（……あれは……ッ）
小さいが、手強いヤツだぞ。
MQ―1――プレデターだ。それが12機も空に展開されてる。
プレデターは目の無いイルカのような機首をした、不気味な外観の無人航空機。
無人機の中では傑作機の1つで、前世紀からボスニア、アフガン、パキスタン、イラクといった国々で偵察やピンポイント爆撃……要は暗殺を繰り返してきている。巻き添えで無辜の市民も殺すから、反米感情を煽りまくってる事でも有名だ。
最高速度は今のトランザム号と互角ってとこのハズだが……どうも世間に公開されてるスペックは、米軍の流した真っ赤なウソらしいな。明らかに距離を詰めてきてるぞ。
「――LOOは露払いの護衛戦闘機に過ぎなかった、って事だな」
「ああ。本命はあのプレデターの群れってこった」

ジリジリと接近してくるプレデターを睨み上げ、ジーサードが言う。
この、マッシュの用兵は――
いかにもアメリカらしい、物量に物を言わせた波状攻撃ってヤツだ。
SFアニメなんかじゃ、LOOみたいな新鋭機は最終兵器として出されるモンだが……現実は逆だ。新鋭機とは実戦経験も少なく、どんな不調が生じるか分からないシロモノ。だからデータ取りのテストとして、むしろ最初に使い捨てられる。
それで敵の戦闘能力を削げるだけ削ぎ、トドメに――ああいう、実戦経験を積んだ量産機を大量投入して、皆殺しにする。
そういう戦略が採られるものなんだ。往々にして。
「……サジタリウスをやったのも、プレデターだったんだな」
「ああ。あんな機動をすりゃパイロットが失神するだろうと思ってたが――無人機だったってワケだ。後ろからのはFIM-92だったが、上からのは体当たりだったのかもな」
俺とジーサードが語る中、プレデターの群れは――
汽車がスモークディスチャージャーのように上げる黒煙が光学的な煙幕にならないよう、左右に半分ずつ展開し始めた。
そして――パパパッ、と、旋回を終えた機体から順に胴体下部を光らせ始める。機銃も増設してるんだな。
爆走するトランザム号の左右に、着弾の土煙が上がり――バララッ、という遠い銃声も聞こえてくる。何発か、車体に命中した7.62mm機銃弾が跳ねる音も始まった。
「撃ってきたな」
「ああ。まだ射程外なのにご苦労なこった。おいお前ら！　対空戦用ォー意！」
インカムが不要なぐらいの大声でジーサードが叫んだ時――
プレデターが一斉に、AGM-114らしき空対地ミサイルを放った。2発ずつ、計24発も。
ミサイルは、白煙の航跡で空に無数の帯を描きながらこっちに迫ってくる。蜘蛛の糸のような煙が視界いっぱいに広がる様子は……見る者を絶望的な気分にしてくれるな。
だがそれでもアメリカ人は勇猛果敢で、
「……プレデター……かッ！　卑怯者めがッ！　男なら本人が来て勝負しやがれェい！」
吼えるように叫んだサンダース爺さんが、運転もそこそこに――バスッ！　と、窓から木製のハンドガードを突き出してM1ガーランドを発砲した。
俺とジーサードがその方向を見ると……マグレで、弾はミサイルの1つに当たってる。アクロバットのように整然と並んでいた煙の航跡が1本、ヨレて……フラフラと飛び……
ボスッ……！　と、ミサイルの1つが空中で自壊した。
「やるなぁ」
「おい！　ちゃんと運転しろ！」

苦笑いする俺の横で、ジーサードは車内に叫んでる。
続けてレキが、1つ、2つ、と武偵弾――炸裂弾で、ミサイルを仕留め始めた。これは狙ってだろうが、空中爆発に巻き込んで別のミサイルも上手く破壊してるぞ。
トランザムのナナメ後方から迫ってきたAGM-114は、右を俺がデザート・イーグル、左をジーサードがUSPの炸裂弾で迎撃する。1発当てたぐらいじゃ壊れない代物だが、2発、3発とブチ込んでやれば破壊は可能だ。
ミサイルが最高速に至る全然前の段階で、しかも逃げるトランザムの速度分は引かれて迫ってくるワケだから――迎撃は容易いとは言わないものの、不可能ではない。
多様な銃声を連ねて、アトラスの機関銃M240、コリンズのニードルガン、ツクモのPDW FN P90が弾幕を張る。やめろって言われたのに、サンダースさんM1ガーランドをまた撃ってるよ。今度は外れたけど。
俺たちがミサイル迎撃に躍起になっているスキに――プレデターたちも、どんどん接近してくる。その1機が、ババババッ、と……なぜか汽車の前方に機銃弾をバラ撒き始めた。何やら一生懸命、数打ちゃ当たる的な感じで何かを狙って撃ってる。
（……何だ……？）
ミサイル迎撃で忙しい中、目だけでその狙いを確かめた時――ガキンッ！　と、列車の前方1kmほどの地点でポイントが切り替わるのが見えた。
プレデターの機銃弾が切替器に当たり――エリア51へ直進していたトランザムの行路を、渓谷側へUターンするような路線へと変えてしまったのだ。
（マズいッ……！）
このままUターンさせられたら、俺たちはこの単線を逆戻りする事になる。減速ギアが破損してるから、今度は谷底へ真っ逆さまだぞ。と、俺が青ざめた時――
――タァンッ――！
ドラグノフ狙撃銃の発砲音が鳴り響き、ジャキン！　と、再びポイントが切り替わった。
その1秒後、列車はその分岐点を無事に直進していく。
「……」
窓から銃と顔を半分出したレキは、『時速220kmで爆走して激しく揺れる汽車から、ポイント切替機のハンドルを狙撃で掠めて切り替える』という神業の実行を何とも思っていない様子で……ミサイル迎撃に戻ってる。
……巣鴨と操車場で2度ほど追い返そうとしたが、連れてきて良かったな。レキ。
「兄貴――榴散弾だッ！」
ジーサードの声に顔を上げると、空で――プレデターが放ったロケット砲弾が、バッ！　と、分散するのが見えた。ぶどうの粒のように、1発の砲弾に48発もの子弾を詰め込んだ大型散弾だ。それを、次々とプレデターどもが撃ってくる。

バッ！　バッ！　バッバッバッ！　と、汽車の右・左から――
総計576発のぶどう弾が、襲いかかってくる。空を覆い尽くす、イナゴの群のように。
「慌てるな、ジーサード」
既にベレッタも抜いていた俺は、アリアのお株を奪う2丁拳銃――両銃のセレクターを左右の手の親指で同時に連射に切り替え、バリバリバリッ！
空中に、全弾をバラ撒いた。
――ギギギ

たしてしまったし、ジーサードのUSPもスライドオープンしている。
敵も……ミサイルやロケット砲といった大物は使い果たしたようだ。
しかし、ほぼ全機、機銃は健在だ。数は力ってヤツだな。
とはいえ俺の見立てでは、機銃弾も使い果たしたのも1機いると思われたが——
その1機が、編隊から明らかに離れている。
加速して……こっちへ、向かってきているぞ。
「——突っこんでくるぜ。特攻だ」
ジーサードが苦々しそうに言う中、敵の機動には機関車内もざわめいている。
機体そのものが突っこんでくる、あの光景に……アメリカ人たちは、アレルギー反応を起こすらしい。数多の死を米軍に強いた、神風特攻隊——日本との戦争で植え付けられたトラウマがある。
学で子々孫々に伝わって、皆、特攻を必要以上に恐れているムードがある。
「——ああいう手に出るってのは、追い詰められた証拠だ。落ち着いて捌け」
と、俺は忠告するが——
パパンッ！　ダダダッ！　と、部下たちは半ばパニックになって貴重な残弾を迎撃に用いている。
ここはジーサードが止めるべきだったが、
「——落ち着けッ！」
その動きが見られないので、俺が叫ぶ。が、ワンテンポ遅かった。
突っこんできたプレデターは汽車の後方に墜落・炎上したが——銃声は多かった。もう、下の皆も弾切れだぞ。その報告が、インカムに次々と届く。
（……あと、9機……）
様子を窺うように、プレデターの群れは——旋回している。だがこっちが撃ってこないので、その輪を狭め始めた。来るぞ。反撃不能の、機銃掃射が。
「……」
ジーサードは、黙っている。リーダーさえも難儀しているムードは部下たちに伝わり、皆、縋るように汽車の上を見てきた。
死ぬまで徹底抗戦するタイプの日本人と違い、アメリカ人には——不利になると上気が低下しやすい特徴がある。楽しいノリやテンションが大事な民族性なのだ。
だから、ここは……
「よし、ジーサード。ここからベースボールといこう。ここはアメリカだし、マッシュに教わった打ち方も試したいしな。お前、ピッチャーやれ」
俺は努めて明るい笑顔を作り、パッ、と、汽車から炭水車へ跳び移る。
そして石炭の小山に突き刺さっていた、アトラスが壊した客車の残骸の鉄骨……その、釘抜きみたいな形に曲がったやつを選んで持ち上げる。

長さは1・5mぐらいあるしバットっぽくないが、まあ贅沢は言うまい。
「弾が無いなら、球だ」
と、炭水車に積まれたボールぐらいの大きさの石炭を拾い上げた俺に……
俺がやろうとしてる事を理解したらしいジーサードは、プーッ！　と吹き出した。
そして、かなり接近してきて大きく見えるプレデターを背に、笑いながら炭水車に跳び移ってくる。
「ハハハッ！　バカときどき天才だな、兄貴は！」
天気予報っぽく言ったジーサードは、俺のジョークに爆笑してるよ。俺、アメリカだとウケるのかも。いや、これはジーサードなりに部下の士気を高めようと合わせてくれたんだろう。だってほら、アトラスとコリンズは苦笑いだし、ロカとツクモは一切笑ってない。
何の言い合わせもなく、俺は鉄骨バットを構え――トス・バッティングのような調子でジーサードが石炭ボールをイイ感じの位置に投げ上げる。
まずは石炭を割らないよう、俺は鉄骨で優しくそれをミートして――
（――桜花ッ――！）
バッティングというよりラクロスのように、石炭を振り回して投げ飛ばす。
その岩石のような石炭を逆V字の尾翼に当てられたプレデターが1機、ガクンと機首を下げて……ヨロヨロと砂漠に墜ちた。
「ほら、次。9球でキメるぞ」
「おう！」
ジーサードがトスする石炭球を俺がスイングして投げ、プレデターにブチ当てる。
2発、3発。繰り返すんだが、面白いようにそれが当たる。
（プレデターは……石炭の塊が、見えないんだ……！）
なるほどね。機銃弾やミサイルで攻撃される事は想定していても、まさか石炭ボールをぶつけられるとは思ってなかったから――データが無くて、捕捉できないんだ。
プレデターたちはさっき銃撃戦をやっていた時より、回避機動が取れてない。攻めるか逃げるか、迷うような挙動さえしている。何をされているのかも分からないんだろう。
右往左往するプレデターを俺が撃墜するたび、一味から歓声が上がる。
「――ハハハッ。ヤツら、七面鳥だぜ！」
ジーサードもゴキゲンだ。良かった。チームの士気が持ち直してきたな。
「最初からこれやってりゃ良かったな。バッティングセンターみたいで楽しいぐらいだ」
と、ラスト1機になった所で俺も笑って――ブンッ！　と、石炭を投げると――
ようやく、プレデターはそれを避けた。そして左右にロールしながら、迫ってくる。
「おっと……？　ジーサード、もう1球」
2発目の石炭ボールも、避けた。

これは……素人考えだが、どうやら大慌(あわ)ててでプログラムを書き換えて、ボール投げにも対応できるようにしたってとこか。

「キノコ頭がタッチの差で間に合ったみたいだな。おい、逃げるぞ」

すれ違いざまのプレデターによる、機銃掃射――

炭水車がそれで穴だらけにされる中、俺とジーサードは並んで走って機関車へと逃げる。

「……っと。さて、どうしたもんかな」

なんとか、機関車へと全員が避難できた所で……プレデターが大きく旋回(せんかい)し、機関車にまた襲いかかってくるまでの僅(わず)かな間だけ作戦タイムが取れる。

「――あたしに案があるよ！」

するとすぐロカが手を挙げて、俺(おれ)を指さす。

「キンジを捨ててプレデターを引きつけて、その間にあたしたちはエリア51へ向かう！」

「おい！　ふざけてる時間は――」

抗議する俺に、

「ふざけてないし！　キンジならプレデターに追い回されるぐらい平気でしょ！」

さっきのキッスを根に持ってる感じで、ロカが怒鳴(どな)る。

そんな口ゲンカをよそに、アンガスが……

「こちらを利用できませんでしょうか？　エリア51で防壁を攻略する際に必要かと思って温存して参りました爆薬ですが――背に腹は代えられませんでしょう」

こんな火事場でよく捨てなかったなそれ、と、目を見張ってしまう事に――ＮＯＳ(ニトロ)燃料とソックリな、ダイナマイトの束(たば)を出してきた。

そこですぐ、

「――それだ(Bingo)！」

人工天才のジーサードが、閃(ひらめ)きを得る。

「そいつを炭水車に突っこんで、超大型の散弾地雷にするぞ。プレデターが降下してきたところで炭水車を切り離し、爆発で石炭を巻き上げて討ち取るッ。動け(ムーブ)！」

思いついたらすぐ実行、というノリで一味は炭水車に戻り、かなめの磁気推進繊盾(Ｐファイバー)にも穴掘りを手伝わせ……最後は全員の手作業で、ダイナマイトを石炭の下に埋(う)め込む。

「来るぞッ……攻撃まで32秒ッ！　点火しろ！」

爆発までの秒数が書いてあった導火線をツクモが適切な位置で噛(か)みちぎり、サンダース爺(じい)さんのライター(Zippo)でコリンズがすぐそこに点火する。

特大の指向性散弾と化した炭水車から、一同は慌(あわ)てて機関車に戻り――

「――切り離せッ！」

ジーサードの号令一下、機関車との結合部に掛けられていた鎖と留め釘(くぎ)を外した。

「……！」

そこで全員が、唖然としてしまう。
——切り離せない。
結合部が歪んで、継ぎ目がスムーズに開かなくなってしまっているのだ。継ぎ目は半分ほど開いたが、想定外の力が掛かったのか変な具合に歪んでいく。それで、ぐいっ……と炭水車の前部が持ち上がり、ウィリーしてる状態になってきた。
爆発までは、あと20秒。
かなめがすぐさま、科学剣で継ぎ目を切断する——
——ガチャンッ！　と線路に戻った炭水車は、前輪が脱線して枕木にぶつかり、跳ねて機関車に追突した。その衝撃で、ツクモが——
「——あっ！」
つんのめって、転がり込んだ。今まさに切り離された瞬間の、炭水車へ。
前輪のみ脱線した炭水車は激しく揺れてツクモを振り回し、牽引する車輛が無くなって加速する機関車から遠ざかり始める。
ツクモは——炭水車のフチに頭をぶつけて、気絶した様子だ。自力では戻れないぞ。
空からは、最後のプレデターが迫ってくる。こっちに機首を向けて、ナナメ後方から。
「——ツクモ！」
その瞬間、ジーサードが——
絶体絶命のツクモを見捨てず、左の義手——手首から先を、圧搾空気で飛ばした。
義手が炭水車を掴むが、とても綱引きできる重量ではない。
それに何より、あの炭水車はあと10秒で大爆発するんだッ。
ババババババッ！　と、プレデターの機銃弾が線路の周囲や炭水車、機関車を捉え始める。その弾丸の雨霰の中、ジーサードはなんと義手のワイヤーを頼りに——炭水車へ、飛び移った！
「ジーサードぉッ！」「サード！」「——サード様ッ！」
部下たちが絶叫する中、ジーサードはツクモを右腕で抱きかかえて庇う。その背中に、左腕に、7.62mm機銃弾がブチ込まれていく。
撃たれて弾かれたジーサードの左腕が、ガギンッ！　と、炭水車の車体に弾痕が作った亀裂に挟まる。運悪く、ジーサードはそれで体を固定されてしまった形になり——
ツクモ共々、もう機関車へ戻ってこれなくなる。
「ジーサードぉおおおおっ！」
絶叫する俺も、もう飛び移れない距離だ。
機関車は炭水車を引き離し、ずっと先行してしまっている。
——ジーサード——！
プレデターがその直上を掠め飛ぶ、炭水車のダイナマイトが——

「……う……うおおおおお――ッッッ！」
――ジーサードの絶叫と共に、爆発する――！
ッッドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！
火山の噴石のように、石炭が四方八方に飛び散る。
最後のプレデターはそれでバラバラになり、破片となって砂漠に散らばっていく。
――その光景をバックに、ツクモを右腕一本で抱えたジーサードが――
背に爆風を、そして次々とぶつかる石炭の石を受けながら……機関車側へ、跳んで――いや、吹っ飛ばされてくる。
この車輌も爆風で一瞬浮いたが、そこはそこらの電車よりずっと重い機関車。
ガチャンッ！　と脱線せず線路に戻ったそこで――俺たちの伸ばした腕が、ギリギリ、ジーサードとツクモを車内にキャッチできた。
「――ジーサードっ！」
俺が抱き入れた、血まみれで炭まみれのジーサードの体には……左腕が無かった。
トカゲの尻尾みたいに義手を切り離して、炭水車から逃れたんだな。
「……う……」
セットしていた髪もバサバサになったジーサードは、しばらく朦朧としていたが……
煙を吐きながらも、ちゃんとリーダーを継続している。
「……お、おいッ……あと、何マイル、だ……！」
「は、はいっ、エリア51まであと……5マイル……！」
ロカが色の異なる左右の目をまん丸に見開いてそう報告し、皆がジーサードとツクモを介抱し

「う……あ……サ、サード、さま……」
ツクモも、意識を取り戻す。よかった。こっちはほとんど無傷だ。
だがそんな中、
「えーっと……ちょっと空気読めてないみたいな感じになるけど、あれ、さあ……」
かなめが、窓の外の――進行方向側を見ている。俺たちを、手伝いもせず。
「何だよ、もうプレデターは全滅させた。お前も手当てを手伝え」
「……」
俺に睨まれても、かなめは窓の外から視線を外さない。
ので、俺が妙に思って立ち上がると――
「……ッ……！」
窓の外に、俺が生まれて初めて見る物があった。
それを見た瞬間、俺の頭から何もかもが吹っ飛ぶ。文字通り、絶句してしまう。
（……なんだ、あれは……！）

まるで昔ワトソンやヒルダと戦った、スカイツリー……いや、それよりも巨大な、白い柱が前方に見えたのだ。

その柱は、動いている。

グルグルと、地球をこじ開けるコルク抜きのように自転しつつ。

「――竜巻だよォ！」

かなめの叫びに、全員が顔を上げた。

あれが竜巻……だってのか？　そんなバカな。あんな巨大な竜巻だなんて。この距離であの大きさに見えるって事は、直径１００m、高さ８００mはあるぞ。バカげたサイズだ。目の錯覚か何かで、そう見えるだけ……だと信じたい、俺の周囲が……にわかに暗くなり始める。風向きも急変していき、流れる汽車の炎と煙が掻き乱されていく。

歯ぎしりして、目を凝らすと……

積乱雲の下、あの竜巻がどこかから攫ってきたと思われるトラクターが、牛が、砂粒のように上空へ巻き上げられているのが見える。錯覚なんかじゃないぞ。あれは――

「畜生、ツイてねぇ！　ワシら、大竜巻の真下に突っ込んでくぞ。ありゃＦ４ってとこだ。ネバダじゃ滅多に見られねえ、でっかいヤツだぜ……ッ」

ここが地元のサンダース爺さんさえ眉をしかめるサイズの、巨大竜巻なのだ。

俺たちはそこへ向けて、時速２２０kmで駆けている。直線の線路を。分岐点はない。ブレーキも壊れてる。

だがこの道が正しい事も、ハッキリ分かった。

竜巻の脇から、地平線に見えたのだ。今まで無かった、人工物――空軍基地が。

あれがエリア51だ。もう、目視で確認できる所まで来たぞ！

「心配、すんな……！　この汽車だって、45トンはあるッ。このまま突っこめ……ェ！」

怯える部下たちを激励してフラフラと立ち上がったジーサードは、

「兄貴、前ばっか見んな。来るぜ……！」

まさに竜の咆吼のような轟音を上げる竜巻に背を向け、汽車の後方を睨む。

俺も後ろに振り返ると、乱気流で暴れる前髪の合間から――

こっちはこっちで、巨大な――ＬＯＯとプレデターの母艦だったＸ―48Ｅ・グローバルシャトルが、波状攻撃の第3波となって迫ってきていた。

コイツも特攻、体当たりしてくるつもりだぞ。

それも線路は狙わず、機関車との衝突コースを取っている。脱線させても、ここはもう俺たちが生き延びればエリア51まで徒歩でも辿り着ける圏内だからだ。

「Ｘ―48Ｅは飛行空母機だが、空飛ぶ砲弾でもあるんだ。炭化ケイ素――ダイヤモンドとシリコンの中間みてぇな、やたら硬えファイン・セラミックスで出来てる。モース硬度が9・3の、巨大なサファイアさ。俺はＸ―48Ｄ……あれのダウンサイズ版の翼胴融合機を流星でブチ抜け

なくてな。体当たりで潰されて――この前は、やられたんだ」
「……っ……」
前門のツイスター、後門の飛行砲弾。
ツイスターには突っ込まれるぞ。およそ、あと2～3分で。
全員、これにはもう……絶望するしかない。あまりの絶体絶命っぷりに。
俺も……絶体絶命は、いつもの事だが――今回はそれが2重張りとはね。俺を殺したがる運命の神様は、緋緋神よりも性格が悪い御方のようだ。
そして……
「ジーサード。汽車を見て、一手思いついたんだが。イケるかどうかは半々ってとこだ」
絶体絶命になれば、閃くものがある。
「奇遇だな兄貴。俺も多分、同じ事を思いついた。やれるかどうか、50%・50%だな」
それがヒステリアモードだ。
皆が諦めても、俺たち兄弟は諦めない。諦める事ができないんだ。思いついちゃうから。
「どっちが汽車で、どっちが炭水車やる」
「ん」
と、ジーサードが拳を出してきて――言い合わせたワケでもなく俺と、ジャンケンポン。アイコデショ。で、ジーサードが勝った。
「クソッ……」
「よし、汽車は兄貴な。弟がブチ抜けなかったもんを、兄がブチ抜く。NYでガキどもに聞かせたらきっと喜ぶストーリーになるぜ」
ジーサードは隻腕で窓枠に掴まり、心配そうな部下たちをよそにまた屋根へ上る。
（ジャンケン、負けると思ったよ。俺は不幸に定評のある2年の遠山……っと）
そして俺も、暴風の吹き荒れる屋根の上へ。
汽車前方のツイスターはもはや、行く手に立ちはだかる巨大な白壁のように見えている。さすがはアメリカ、自然現象もケタ外れにダイナミックだぜ。
そして――悠々と機関車に迫り来る、シャトル。
こっちも、でっかい。まさに空飛ぶクジラって風情だよ。震え上がっちまいそうだ。
だが、な。
恐怖よりも、俺は――怒りの感情が勝るんだ。半ば八つ当たりぎみの怒りだが――
何かを遠隔操作して戦わせ、どこかで自分はのうのうと高笑いしてるようなヤツは……
（――アリアと緋緋神を思わせて、実に、実に、不愉快なんでな！）
その時――トランザムは激しく震動しながら、巨大竜巻に突っ込んだ。
全身が引き千切られそうな暴風の中、俺は――
右拳を大きく引き、左の開手は視界の中のシャトルを掴むように顔の先に構え、上体を下げ

る。鉤入り靴で固定した足下が、それでも上昇気流で浮かびそうになる。
俺の背後ではジーサードも同様の構えを取った、ハズだ。
シャトルとの衝突まで、あと1分。
「なんて名前にするんだ？　兄貴」
「何をだよ」
「この兄弟技の名前さ。要るだろ、セントラル・パークでウケるためには」
「多段桜花」
「ダセえ！　――スーパーノヴァってのはどうだ？　日本語だと超新星だ」
「ガキっぽいだろ、スーパーなんちゃらとか……」
「――ンだとォ？　兄貴の分際でナマイキだぞ！」
「ああ、ああ、分かったよ。じゃあ2つを足して、『桜星』。これでいいだろ」
「んッ……よし、それで決まりだッ！　桜星だ！」
兄弟の案を合わせたのが嬉しかったのか、ジーサードは明るい声ではしゃいでる。地獄絵図にもこれ以下は無さそうな、巨大竜巻の内部という魔界みたいな環境下で。
どうやら台風のように目があるらしく、機関車はブ厚い竜巻の外壁を抜け――
――それを追うシャトルが、竜巻に突っ込んでくる。
竜巻の内外壁で対流する低気圧・高気圧が作り出す超高速の気流に煽られ、シャトルは捻れるように飛び始めた。しかし、その針路が逸れる様子はない。
激突まで、あと30秒――！
「信じろよ、兄貴」
ザシュッ――と、ジーサードが両脚を踏み直す音がする。
「弟を信じなくて、何が兄貴かよ」
俺も、足を踏み直す。
よし。狙いは定まった。
俺とジーサードの周囲で、トランザムが吹き上げる火の粉が乱舞する。まるで――炎で出来た、桜の花びらのように。
「――この桜吹雪――散らせるものなら、散らしてみやがれ！」
シャトルを睨んで、俺がそう叫んだ時――
――ボオオオオォォォォォォォォォォ――ッッッ！
エリア51まであと1マイルを報せる汽笛が、汽車から高らかに鳴り響いた。
（コイツを迎撃すれば、勝ちだ……！）
雲と砂塵の壁から――ボンンンンッ――！　と、シャトルが飛び出してくる。
ちょっとした旅客機ぐらいのサイズがある、飛行砲弾が――
迫ってくる。目の前へと。

――マッシュ。

お前は結局、最後の最後まで自ら武器を取って戦う事は無かったな。

俺たちは、お前のシミュレーション計算通り苦しめられたもんだよ。

だが、その数式はここで崩壊する。

お前の計算なんざ、所詮は机上の空論。いや、もっと空虚なプログラム上の空論だ。

お前は今も、エリア51でポテチを食ってコーラを飲みながら、シャトルを遠隔操作しているんだろう。ゲーム感覚で。

だが俺たちはこの地獄のような砂漠、竜巻の中心で、自ら戦っているんだ。

いいか。

男と男の勝負を最後に決めるのは、銃弾の数でも、頭の良さでも、体の大きさでもない。

――覚悟だ。

本気かどうか、命懸けの真剣味があるかどうかなんだッ！

（そいつを、教えてやるぜ……！）

腹を括った俺の背に、ジーサードの右手が添えられる。

桜星とは、俺とジーサードの超音速打撃の合わせ技。

まずジーサードが『流星』でマッハ1を作って俺を押し出し――俺がさらに『桜花』でマッハ2を作り出すのだ。制服の下に着込んだプロテクターの限界、ちょうどの速度まで。

それにはジーサードと俺の全身の筋骨を、全く同時に連動させる必要がある。

流星と桜花を合わせる、阿吽の呼吸――呼吸の完全な一致が、求められる。

だが、できるさ。

――だって、兄弟だからな！

「いくぜ――流星――ッ！」「――桜花ッ――！」

――その瞬間――

俺の世界が、マッハ1の桜花が見せる世界とは全く別の……

光の中にいるような、全てが眩くボヤけるような――マッハ2の世界に、変わる。

（これが……マッハ2の世界……！）

ヒステリアモードの眼がウルトラスローに見せるその眩い空間で、流れ星のように翔る俺の拳から、桜吹雪のような円錐水蒸気が放たれる。

――視界を覆うシャトルと、俺の拳が接触する――

ゼロコンマ1秒にも満たない、超常の衝撃の世界。

むしろ俺の手には、何にも触れなかったような感覚があった。俺はインパクトの瞬間、『秋水』で全ての力をシャトルへ伝えたからだ。

これにより、俺たち兄弟の装備を含む全体重――約140kgが、俺の拳に一点集中してグローバルシャトルに命中した事になる。マッハ2で、正撃90度角のカウンター打撃で。

これは、旧日本海軍の最上・利根といった重巡洋艦に搭載された2号20・3㎝連装砲の91式徹甲弾で迎撃したのとほぼ同じ意味を持つ。桜星はまさに乾坤一擲の、人間砲弾技だ。

艦砲のゼロ距離射撃は想定していなかったであろう、飛行砲弾の――竜巻が巻き上げた砂に付けられた、無数のミクロン単位の傷を……

俺が与えた衝撃が、全て押し広げていく。ミリ単位、センチ単位、メートル単位へと。ほんのコンマ数秒のうちに。

スーパースローで見える世界の中で、シャトルは前から後ろへ――壁にぶつかった卵が割れるように、いやそれ以上に、砕け散っていく。

――バッ――と、時間間隔が戻り――

俺とジーサードは『桜星』の姿勢のまま機関車の上に立ち、サファイア並の硬度を誇るシャトルのセラミック装甲は粉々になっていく。

竜巻の外壁に吹く上昇気流で、宝石のように煌めく破片の渦が巻き上がっていく。その美しい輝きの奔流とは別に、剥き出しになった内部は風に揉まれながら墜落し――

――トランザムから置き去りにされ、竜巻の中を転げ回り、グシャグシャになっていく。

竜巻を抜けた汽車の後方に飛散させられていく、シャトルの残骸を見送る中――

ばすんっ！　と、エリア51の外周を囲む金網のフェンスを紙きれのように吹っ飛ばし、機関車は広大な空軍基地に突入した。時速220㎞を保ったままで。

基地といっても建造物はまだ先にあり、ここは飛行場の建設予定地らしく――今までの砂漠と同じに見えた。だが、エリア51の敷地内は外と1つ大きな違いがあった。

線路が、無いのだ。

飛行機のランディングギアが引っかからないようにか、撤去されているのだ。この占い線路が……！

「……！」

線路をミサイルのように飛び出したトランザムは、先端のカウキャッチャーから砂漠に突っ込む。

ズザザザザザザザアアア

砂の大波を巻き上げつつ慣性の法則で追ってくる機関車が、後ろから迫り――潰されるかとヒヤヒヤしながら転がった俺とジーサードは……

5秒、10秒、砂の雪崩に押し流されつつ……

……ようやく、静止した。

白黒の煙を噴き上げ、横倒しになって止まった機関車の、僅か1m前方で。

「……ヘッ……兄貴と組んで戦うと、ロクな目に遭わねェなァ」

最初は砂から背中と足しか出てなかったジーサードが、モグラみたいに砂から出てきてボヤく。ただし、超笑顔で。

「そりゃこっちのセリフだ」

上半身しか砂から出てなかった俺も、アリのように這いだしてボヤく。しかめっ面で。

「あとよォ、ひとつ分かったんだけどよ。物理法則ってやつは、女だな」

「……なんでだよ」

「兄貴の言う事を聞いて、時々おかしな事でも通すからさ」

というジーサードのアメリカン・ジョークを思いっきりシカトしてやり……

俺は、周囲を見回す。すると、前方遠くから……ジープがこっちに殺到してきてるな。

ここがエリア51の第何号管理区なのかは知らんが、予定通り親ジーサード的な所に突っ込んだと信じたいね。もう、戦う力、無いし。

「みんな無事かな」

「俺の部下をナメんなよ」

親指でジーサードが示した、背後の汽車からは……

「終点～、エリア51～、エリア51～っと！」

車掌さんみたいなセリフと共に出てきたかなめを先頭に、

「予定より少々早く着きましたな。見込み違い、ご容赦下さい」

砂漠に降り立って恭しく頭を下げてくるアンガス、

「ま、サードにしちゃ安全運転だった部類だね」

「豪快に同意である！　ワッハハハ！」

「あらやだ。礼拝の時間だわ」

「サード様ぁ～！　こっわかったですよぉ～！」

ロカ、アトラス、コリンズ、ツクモが、それぞれ煤だらけのケガだらけになりながらも……自力で出てきて、アメリカンな軽口を叩いたり、マイペースに祈り始めたり、女の子走りで駆け寄ってきたりしてる。

都バスを普通に降りるような仕草で、レキも平然と出てきた後……

「ワシのトランザムが……！　オー・マイ・ゴォオオッド……！　ウオォォォン……！」

サンダース爺さんも這い出てきて、砂漠に伏せて泣いてるよ。とっても元気な大声で。

ていうか、よく見たらこの人が一番無傷だな。さすがベトナム帰りはタフだよ。

そして、

「お力添えに厚く御礼申し上げます。無論、車輌は弁償させていただきますよ」

その傍らでそう言ったアンガスに、

「――グッドだぜ。次はピッカピカのディーゼル車を頼む」

ケロッと泣きやんで立ち上がり、ヒゲ面を思いっきり笑顔にしてる。なんなのもう。

だが、とりあえずは――

「一件落着だな。兄貴」

「ああ」

「やればできるもんだな」

「ああ、やればできるもんだ」

戦闘後のセリフは、譲ってやったよ。2つとも。俺は優しい兄貴だからな。

その後、立ち上がった俺たち兄弟の前で、ジーサードの部下は横一列に並び――

みんなしてニカーっと笑って、びしびしっ、と、敬礼してきた。

腕が1本しかなくても返礼はできるわけで、ジーサードも敬礼を返す。

「ご苦労だったな、お前ら。これより、エリア51内へ進軍する」

その頭上に、神の采配か――偶然、さっき舞い上がった星条旗が舞い降りてきて――

ジーサードはそれを当たり前の事のように右腕で掴み取り、マントにした。

そしてその右腕で、バッ、と――

もう俺たちの前に並んで停車していた、ジープの群れにガッツポーズして見せる。

すると米兵たちから――U.S.A!!――U.S.A!!――の大合唱が返ってきた。日本でいうところの、万歳三唱みたいなノリで。

……良かった。ここは親ジーサード派の管理区だったんだ。最後の最後は、ツイてたよ。

でも俺は、「I.P.N.だからな。俺の運ってワケじゃなく、ジーサードの持ち運か。これは。

――アメリカの砂漠に、陽が沈んでいく。

俺は毛布を羽織り、ボケーッとそれを眺めている。体育座りのレキと並んで。

野外キャンプで食い切れないほどのバーベキューを振る舞われた、俺たちの前に……

迷彩服のマッチョという、絵に描いたような米兵が2名やってきた。

そのそれぞれが右腕と左腕を抱え、憔悴しきった顔のマッシュ＝ルーズヴェルトを連行しながら。

マッシュルームカットの小男、マッシュは……確かに、エリア51に陣取っていた。

それが何でか知らんが、しょっぴかれて来てる。まあ、個人的には悪い展開じゃないな。

そこに、制服を着て葉巻を咥えた、これもイメージ通りの――空軍准将を名乗る中年の大男

もやってきて、ジーサードに敬礼をする。
それに返礼してから、ジーサードは……
「……ようマッシュ。死体袋入りでなくて悪かったな」
四つん這いになって顔を伏せているマッシュの前に、あぐらをかいた。
「今の彼はマッシュ容疑者です。ミスター・ジーサードがエリア51に到着した時刻付けでNSA(FBI)を解雇され、同時刻に――連邦不正請求禁止法違反(FCPA)の内部告発を受け、同法110条1項に基づき、電子逮捕状が発布されましたので……身柄を拘束しました」
准将の説明に「あんな告発は無効だ。ボクに収支報告記載事項の不正利用の事実は無い。裁判でひっくり返してやる」と呟くマッシュだが……
その言葉には、力が籠もってない。
「マッシュ君。恐れる事はないぞ。刑務所(アルカトラズ)には――君が更生の機会を与えた優しい先輩が大勢いるのだ。皆きっと君に感謝してるから、可愛がってもらえるハズだ」
准将は紫煙をくゆらせると、そうマッシュに告げている。
カフェ・ラロで俺が出任せに言った『落ちこぼれの方がエリートより良い3つの理由』――ポストのあるヤツは、負けたら失脚する。
マッシュはそれを、即座にやられたってワケか。
(階段は、踏み外すと……転げ落ちるもんだからな)
アンガスに違反キップを切らなかった黒人婦警さんも言ってたが、そもそもマッシュは嫌われ者。物事に100%成功するって事だけが取り柄で、人望は薄かった。智に働けば角が立つ、ってやつで。
エリートの階段を頂点近くまで上っていたコイツのライバルたちは、みんなプチ大統領みたいなヤツらだったんだろう。
となれば、ジーサードに負けてマッシュに初黒星が付いた瞬間……
手負いの獲物に襲いかかるように、そいつらは寄ってたかってマッシュを攻撃したってワケだ。政治的にな。
「……あー、マッシュ。俺は平和ボケの日本人かもしれないけどな。どうやらお前の方が実戦経験は少なかったみたいだな。まあ出所したら、歩兵からやり直せよ」
俺もジーサードの隣に片膝をついて、あの時のイヤミを返してやるが……
なんか、スカッとはしないな。
だってコイツは、木の洞から鷲の爪で引っ張り出されたイモムシみたいに無力だから。
このネバダの戦いは……
虚しい、戦いだったな。つまるところ。
いや、片方が命を懸けていなかったんだから……戦いですら、なかったのかも。
だが、これからの戦争はきっとマッシュのようなヤツら同上の戦いになるんだ。米軍はそれを

推し進めているワケで、その奔流が止まる事は無いだろうから。
どっかのパソコンの前で、ゲームみたいに兵器を操作し合う戦争……か。
虚しいんだろうな。まあ、銃剣で殺し合うのも虚しくてバカバカしいもんだけどさ。
「……なぜだ……なぜ、ボクが……負けたんだ……！　あらゆるデータが、絶対に勝てる事を示していたのに……！」
そこがイマイチ分かってないらしく、とうとう喚き始めたマッシュに――
「そりゃお前がバカだからだろ。俺ら兄弟にケンカを売るヤツは、バカのノーベル賞だ」
ジーサードは自分と俺を親指で示しながら、苦笑してる。
そこにアンガスがやってきて、
「さてサード様。サード様のお命を狙ったこの悪童、如何いたしましょうか。どのような処刑法でも請け負いますが」
ニタァ……と、元々引きつってる顔をさらに引きつらせるように笑わせてる。
真っ青になるマッシュを前に、ジーサードは軽く吹き出して――
「よせよ。殺すべきは、殺す価値のあるヤツだけだ。それが俺らのルールだぜ」
なんて言って、「お前、見かけによらず甘いよなー」と俺にツッコまれる。
そんな俺にちょっと青筋を立てつつも、ジーサードはマッシュを正面から見る。そして、
「それに……実質、俺たちの負けだ。今回も。俺たちちゃこの有様だが、コイツはカスリ傷ひとつ負ってねえ。権力を剥ぎ取ったのも、俺たちじゃない」
俺と同じ虚しさを感じている顔で、そう告げた。
しばらく、沈黙がその場を流れ――
「……ジーサード。ボクを……笑いたければ笑え。殺したければ殺せ」
絞り出すように、マッシュがそう呻いた。
「ボクは……キミのように強い男にデザインされず、この世に生を受けた。周りの人間はみんな……女の子でさえ、ボクより強かった。ボクはボクの非力さを陰でオペレーターの少女たちが笑ってた事を……知っていたよ。だから、縋ったんだ。ボクが掴める、権力という力に。ボクを認めてくれた……たった1つの組織、NSAに……！」
ぽたぽたと、砂漠に涙を落としながら……
四つん這いのまま、マッシュが語る。
マッシュが、ああも出世に執心してたのは……コンプレックスの裏返しだったのかもな。
だが、その哀れなマッシュが人生を賭けて尽くしてきたNSAも――いざ失策をしたら掌を返して切り捨てた。
組織ってのはそういう残酷なものかもしれないが、ドライすぎるぜ。アメリカ社会は。
まるでこの、砂漠のように。
「……ボクを認めてくれたのは、この世で、NSAだけだったんだ……！」

うわあぁ、と、砂に伏せて泣いてしまったマッシュを見下ろしつつ……
「いや、違うぞ。もう1人、お前を認めてる男がいる」
ジーサードが、マッシュの震える肩にポンと手を置いてやっている。
「……？　誰だ。そんなの、いるハズない」
「いるさ。お前の目の前に」
「……っ……」
「俺だ。いっぺん、あわや殺されるとこまでやられたしな。今回だって――俺らをあそこまで追い詰めたのは、なかなかのもんだったぜ。だから顔を上げろよ。もう泣くな。笑え。俺も、お前と同じ、アメリカのために造られた哀れな男さ。それが2人とも捨てられて、砂漠でアホ面ぁ突き合わせてる。どうよこれ。笑えるだろ？」
そう言われたマッシュは、泣きはらした情けない顔を上げ――
ズレた眼鏡の下で、笑った。鼻水を垂らしながら。
「……ふふ。そうだな、笑えるな。だが、アホ面というならキミの方がアホ面だ」
「へッへッへ。いいや、お前の方がアホ面だぜ。そこは譲らねえ」
マッシュとジーサードは今や、はぐれ者の人工天才同士……何か共感するものがあったのか、ウマが合った様子で笑い合ってる。ここへきて、ようやく。
そしてしばらく、2人して気持ち悪い笑いの応酬をした後……
……マッシュが、立ち上がった。
そしてスーツの襟・ネクタイ・眼鏡を正し、膝の砂を払い、マッシュルームカットの髪も手ぐしで整え、ハンカチで洟をかみ……
最後は男らしく涙を手で拭い、キリッと顔を上げた。
「――痩せても枯れても、ボクはアメリカ人だ。そして全てのアメリカ国民には、自分が正義と信じる行動を実行する権利がある」
そう前置きして、俺たちを見回したマッシュは――
「従って、ボクはキミたちによるこれ以上の破壊活動を防止するために――ジーサード、キミを瑠瑠色金の所へ案内する。来い。あそこはNSAの管轄だが、もうボクはNSAの職員じゃない。たまたま専用の非常口を知っている、ただの通りすがりの人工天才だ」
――最後のプライドで、そう言い放った。
自分を打ち負かし、許し、認めてくれたジーサードに、そうとは決して言わなかったが……謝罪と、礼をするために。

Go For The NEXT!!!　Ford Model T型フォード

エリア51・第89A管理区は――

天を照らして蠢く空軍基地のサーチライトの向こう、その地下に存在していた。

砂漠と見分けのつかない偽装が施されていた、マンホールのような地下へのタラップを降り……ひんやりした廊下を、俺たちはマッシュの案内で進んでいく。

壁も床も紺色の金属でコーティングされたそこは、砂漠のド真ん中にあるとは思えない電子の要塞だ。何枚もの隔壁が行く手を阻み、マッシュがまだブロックされていなかった専用キーでそれを次々に開けていく。

しかし、この厳重な防御……彼の案内無しには、瑠瑠色金には決して辿りつけなかっただろう。

――マッシュはLOOがアトラスに負けた時点で、イザという時のジーサードとの交渉用に、ここの管理者権限をプロテクトしていたそうだ。

勝てない可能性が0・5%あった事から、その電子的プロテクトは事前に万全なものを準備しており……プロテクトの存在が露見するまでに3時間、破壊されるまでに3時間はタップリかかるだろうとの事だった。

施設の地上階には職員がいるようだったが、身内すら疑ってかかるような構造の管理区内の地下層には人はいない。この地下階は、何でも知ってるNSAですら存在そのものを一部の人間しか知らない場所なのだ。

「これが、地下5階のF隔壁。ここより先は――実は、ボクも行った事が無いんだ」

そう言いながら、緊張した面持ちでマッシュが壁のパネルにパスワードを入力し――

縦・横・ナナメに、3重の隔壁が割れて開く。

（……ここまで、厳重にするなんて……）

徹底的な封印っぷりが、逆に物語っているな。

この先に秘蔵されている瑠瑠色金が、正真正銘本物だという事を。

そうして辿り着いた、地下7階――

――『警告　Warning　制限区域　Restricted Area　立入禁止　Do Not Enter』と前置きされた、突き当たりの大広間が――

マッシュの鍵で、開かれていく。

「……」

固唾を呑んでその先を見る、俺たちの目には……

（……何だ……？）

黒塗りで幌付きの、クラシックカーの一群だけが映った。

どれも同じ、T型フォード――フォード・モーター社が約100年前に発売した、世界最初の

量産車だ。その販売台数は1500万台を超えた、珍しくも何ともない大衆車。
それが20台ほど、キレイに並べて置いてある。他には、何もない。
この広間は行き止まりで、その先に隠し部屋がある様子もない。
「……瑠瑠色金は……どこだ？　ここに……大質量の瑠瑠色金があるハズなのに」
マッシュが周囲を見回すが、誰の目にもそんなものは見当たらない。
「やられたぜ……マッシュ、お前さえも……担がれてたんだッ。瑠瑠色金は……誰かが、もう、どこかに避難させやがってたんだッ……！　チクショウ……ッ！」
ジーサードも呆然として、その場に膝をついてしまう。
俺も……
体から、あらゆる力が抜けていきそうになる。
この感情が、絶望、というものだろうか。
アリアのため、日本から遥々やってきたアメリカ、命懸けで辿り着いたエリア51——
その、瑠瑠色金が収められていたハズの場所が……今は侵入者を嘲笑うかのような……
ただのカー・ガレージにされていた。だなんて。
冗談にしては、悪質すぎる。
悪夢でも見てるんじゃないだろうか。
そうだ、きっとこれは悪い夢……
「サード——これ、瑠瑠色金だ。全部、全部——！」
そこで俺の目を覚まさせるような発言をしたのは、超能力者のロカだった。
「……何……ッ？」
ジーサードが振り向く中、色金に精通している玉藻と同族のツクモも——
「ま、まちがい、ありませんっ……！　この車は全て瑠瑠色金で出来てます、塗装の下は全部、全部、瑠瑠色金ですよ！　これこそ探し求めてたお宝ですよ、サード様……！」
喜びにシッポを震わせて、感激の涙を流しつつ車列を指さしている。
「これはカモフラージュだよ、サード。政府は昔——色金を伸ばして、当時ありふれてたT型フォードの部品の形にしたんだ。そしてそれを着色して組み立てて、走れるようにもしてある。もし内乱とか戦争が起きた時、走って全米各地に逃がすつもりだったんだよ」
ロカも手を震わせながら、T型フォードの1台に触れている。
こ、これは——
この車が、全部、全部……
色金で出来てるっていうのか。
だとすれば、恐るべき質量だ。トン単位だぞ。
——確かに、色金は金属。金属である以上、延性や展性があり、加工する事は容易い。アリアの緋弾や俺のバタフライ・ナイフ……色金止女もその1つだったわけだが、身近な物に加工して

しまえば、その形状に従い、撃つ事も、斬る事も、走らせる事も可能なのだ。
20世紀初頭のアメリカでは、この車ばかりが走っていた。最初はこれしか量産車が無かった。その時代に、時の為政者が――大質量の瑠瑠色金を、車の形にしてしまったのだ。『よくあるもの』の形にして隠匿し、イザとなれば自走させて四方八方に逃がすために。
そう考えれば、色金が車の形をしてる事にも辻褄が合う。
やった。
やったぞ。
俺たちは辿り着いた。瑠瑠色金に。
こいつを1台でも2台でも持って帰れば――
分けても分けきれないぐらいの色金が、俺たちの手中に収まる！
「ジーサード……！」
「兄貴……」
俺が、膝をついていたジーサードの右手を引っ張って立ち上がらせた……その時。
予想外の事が起きた。
「キンジさん」
いつの間にか真横に来ていたレキが俺の名を呼び、振り返らせるなり――
「……っ……？」
――キス、してきた。のだ。
去年の夏休みの最終日のように。いや、その時よりも激しく、深く。
甘いミントティーのような味のするレキの舌が、俺の舌を絡め取っている。今。
突然のことに、何の反応もできないまま――
俺はそれに、ただ応じている。
周りもただ、目を丸くしてその光景を見ている。
どういう事だ。
何が起きているんだ。
はっ、と――
――俺と唇を離した、そのレキは――
「……っ……」
……！
――違う。
レキじゃない。レキでは、無くなっている。今の、大人びたキスの間に。
どこか色っぽい、普段のレキとは全く異なった目つきになったその女は――
車列の方に、向き直った。
レキの体に乗り移った、その魂は……ああ。

分かる。分かってしまう。

――風、だ。

レキを遠くから、半ば操り続けてきた……『風』。それだ。今、レキは風になっている。

歩き方すら、普段より女っぽくなったレキは――一歩、二歩、車へと歩み寄り……

歓喜の感情の籠もった声で、喋り始める。

「ルル、そこにいるのですね」

――日本語だ。

その声に導かれるようにして、レキの前に――

車列を背にして……青いホログラムのようなそれが、現れた。

「――リリ――」

という声と共に、美しい、裸体の女が。

青い光の女は、目を閉じ、胎児のように腕を曲げ、祈るように両手の指を胸の前で組んでいる。

……これは……

俺が今まで見てきた数多の超常現象の中でも、群を抜く超常現象だ。

人の形をした、淡く、青い、靄のような光の女。

だが、この場にそういったものを映写する投影機は一切無い。

直感的に表現するなら――霊体。そう呼ぶのが一番納得がいく。そういう存在だ。
そして俺は、彼女に見覚えがある。写真で見ただけだが――
（……サラ博士……!?）
目を見張った俺よりも、ジーサードとマッシュが驚愕している。
そう。彼女は……サラ博士の顔をしているのだ。
組んでいた手を解き、レキへと手を伸ばしたレキが、システィーナ礼拝堂でミケランジェロが描いた天井画のように、伸ばした人差し指同士を触れ合わさせる。
そうして、静寂の数秒が流れた後――
「……お許し下さい……」
青い光の女が、そう語り始めた。これも、日本語で。
「あなた方の愛するこの姿を、お借りしたことを……あなた方はとても好戦的な命なので……あなた方の脳にあった、この姿をお借りしました……私たちには、定まった『姿』というものが、ございませんから……」
「……ルル。私は、この璃巫女の感覚を借りて物語のあらましを見てきました。もう……止めましょう。人間たちの命と心のために、止めなければいけません。ヒヒを……」
「……私は……争う時を、殺める時を、止める時を恐れていました。たった3つしかない私たちが、また孤独に1歩近付く時を。ですが、もうリリの言う通りなのでしょう……」
何……なんだ。
何なんだ。
何の話をしている。
だが、俺たちは――誰も、言葉を発する事ができない。
まるで――神々の前で、人々が何もできないかのように。
いや。
分かる。
――実際に、そうなのだ。
そこにいる2人は、女神と女神――
光る青い女は、目を閉じたままこっちを向いてくる。
そして、再び祈るように両手指を胸の前で組み……
俺たちに、こう告げるのだった。
「……どうか……止めてください。ヒヒを――ヒヒイロカネを。私たちの、姉を」

あとがき

はいどうも！　暑いんで玄関を開けてたらルンバが脱走していきました！　赤松です。

今回は久々にこの小説18巻・コミックス10巻・緋弾のアリアAA8巻の同時発売となり、嬉しいです。そしてこちらもお久しぶり、『緋弾のアリアQ&Aコーナー』です！

Q：『最近のクライマックス感…ひょっとして、緋弾のアリアは完結が近いのですか!?』

ご心配をおかけしております……が、ご安心下さい！　まだまだ終わりませんよ！

私の頭の中には今なお、書きたい出来事、クローズアップしたいキャラクター、戦闘と日常とラブコメのネタがタップリあり――むしろ、日に日に増えていくぐらいなのです。

つまり「もう思いつかないので終わります」という事は、この作品にはありません。

皆さまにご愛顧いただけている内はずっと続きますので、心配御無用でありますよ！

さて、話は変わりまして……

いよいよこの夏、緋弾のアリア『新プロジェクト』の正体が、『緋弾のアリアAA』に関するものと発表になりました。

なので、注目度も急上昇中！　のAAについて、改めてご紹介させていただきます。

『緋弾のアリアAA』とは、アリアの戦妹・間宮あかりが主人公の物語。後輩女子たちの日常を（ちょっとお色気なコマも交えつつ）描いた、眺めてるだけでも幸せになれちゃうコミックスです。橘書画子先生による作画も、カワイイったらありゃしないです。

でも、キャッキャウフフだけじゃ赤松作品らしくないですからねェ……（暗黒微笑）

アリアAAで描かれるのは――日常といっても、やはり武偵高の日常。

可愛い彼女たちもみんな、拳銃や刀剣を装備し……拳やキック、刃や弾を飛び交わせる、とってもアリアの後輩たちらしい過激な日々を送っているのです！

そんな〝キュート&バトル〟なアリアAAの時間軸は、この小説とリンクしています。なので風魔やかなめといった後輩はもちろん、バスカービルの一同も活躍してますよ。

また、小説12巻でマンガを描いていた元イ・ウーの『魔宮の蠍』、17巻でキンジたちに噂されていた武装検事の娘・佐々木志乃、そしてこの18巻で遠山家との古い縁が判明した間宮あかりなど、実はAAからこっちに登場しているキャラも既にいたりするのです。

読めば『緋弾のアリア』の理解もさらに深まる、ファン必携のコミックス――それが、『緋弾のアリアAA』なのであります。いやー、これはもう揃えるっきゃないですね！

といった見え見えのステマをした所で、誌面も尽きました。

それでは、次はまた――作中の季節に、現実の季節が追いつくころに。

2014年8月吉日　赤松中学

ありがとう!!
ございました!!
■今回の表紙は
メカ少女ってことで
色々資料を観ながら
デザインしてみました。
普段メカなどを描く機会が
ないのでなかなか大変で
ありつつも楽しかったです。
ではまた次巻で
お会いいたしましょう！！
ありがとうございました!!